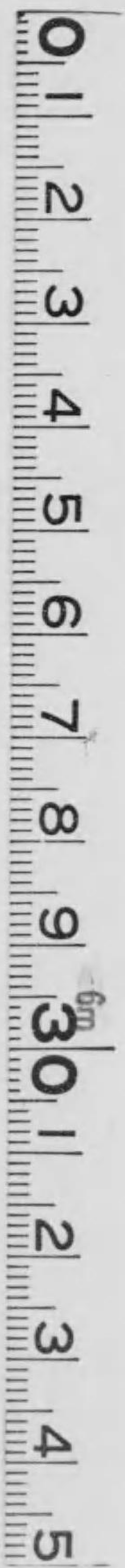


93
2970



始



93-297



ル
ス
ト
イ
作
復
活

後編

内田魯庵譯

大正
9. 5. 18
内交



第二編

第一回

マースロワの再審は二週間内に元老院で開かれる筈だから、ネフリユードフは夫迄にペテルブルグに行つてなければならぬ。萬一棄却されたら辯護士の意見通りに辯護士の作成して呉れた請願書を陛下に提出する手續を運ばねばならぬ。辯護士の説だと、控訴の理由が薄弱だから大抵棄却されるので、今から其覺悟で支度しなければならぬ。六月初めにはマースロワが多勢の囚徒と一緒に西比利亞へ護送される筈だから、何處までも随つて行く決心を極めた以上はイツ何時でも一緒に立てるやうに、一巡各處の領地を巡回つて處分を附けて置かねばならぬと、其心組で先づ家の最大の財源となつて一番近いクスミンスキイ村へ行つた。

ネフリユードフは兒供の時から青年時代まで此領地で長きくなつて、夫から後も二度も行き、一度は母の命令で獨逸人の執事を伴れて損益收支の清算をしに行つたのだから、土地の事情や

地主と農夫との關係は久しい前から善く理解んでゐた。で、地主に對する農夫の位置が全て奴隸なのを見て、當時大學生としてヘンリー・ゼオルジ主義を奉じた渠は主義を行はんがために父から直接相續した分だけを悉く農夫どもに分けて了つた。處が其後軍隊に入つて一年二萬圓の小遣を棄てるやうになつてからは、日頃の主義は一切高閣に束ねて全て忘れて了ひ、母から仕送る金が何處から湧いて來るものやら無茶苦茶で、开んな穿鑿は仕ないやうにしてゐた。が、母が亡くなつて愈々財産の處分を自分で着ける必要が生じて來ると、土地私有に對する態度を怎う定めやうと云ふ疑問が復た頭を打上げた。無論一と月前なら自分の力では到底現狀を變ずるわけには行かぬ、土地を壟斷してゐたは自分で無いと辯解して、良心の休まるやうに何とか工風して、成るべく遠くへ離れてイツまでも收入を貰つて平氣でゐられたかも知れない。が、今は之まで通りにズル／＼にしてはゐられない、斷然思切つた改革をしなけりやならぬ。現在監獄世界と妙な混雜んだ關係を生じ、或は西比利亞くんだりまで出掛けるかも知れぬといふ場合、何よりも金が先に立つを知りつゝも斷然思切つて身に取つては不利益な改革を行はうと決

心した。即ち是迄通り自ら田圃を作らないで、極廉い地代で農民達に貸付け、渠等をして領主の支配を受けない獨立自由の民たらしめやうとした。尤も備耕を廢して地代を取るは丁度昔しの奴隸所有者が勞働の代りに奴隸から金を取つたと同じ事だと思つたのも一度や二度で無く、こんな事では猶だ中々宿題の解決にはならんが、左に右く解決に一步を進めて無法な奴隸制度の形式を若干か改善したものに違ひないから、此意味で此方針を取る事に斷然決した。

ネフリユードフは丁度正午にクスミーンスキー村に著いた。之からは萬事手軽にする意で、電報も打たずに直ぐ停車場で二頭立の百姓馬車を雇つた。南京東紗の上衣に、長目の胴著の下に帶を締めた若い馭者はお客と話をするのが大好きで、喘々息を切つてる白い馬と近頃お拂箱になつた跛の馬とでノロクサ車をガタ附かせて行く途中、此土地の殿様を載せてゐるとは夢にも知らずに、頻りに獨逸人の管理人の噂をしてゐた。ネフリユードフも故と白ばくれて自分が誰だとも明さなかつた。

『あの腹黒の獨逸ッほうは、』と、都會住居をして小説ぐらゐは讀んだ事のある馭者君は、斜に

馭者臺に腰を掛けながら、長い鞭の頭から本までを手で扱いて容子振つて見せつゝ、「あの腹黒の獨逸ッほうは栗毛の馬車馬を三匹も買込んで、夫婦合乗か何かで洒落れてまさア。ヘッヘッ！クリスマスの時なんか、大工家へ木（クリスマス）をおツ建つて、俺アお客を送込みやしたが、電氣が點いてるんだからおツ魂消やした。土地中搜したつて那樣な贅澤をする奴アムりましねエヤ。あんでも減相な金をチョロまかしやアがツたつて、怪しからねエわけサ。立派な地面を買込んだつて噂もありやす。」

ネフリユードフは管理人が自分の領地を怎んな處分をしてゐやうと、怎んな金儲けをしてゐやうと一向關はぬやうに思つてゐるが、扱て怎んな話を聞くと餘り好い氣持がしなかつた。

此日は爽々とした上日和であつた。黒い雲が折々日を蔽したり、其處此處で農夫が若い燕麥を刈込んでゐたり、青々とした牧場の上を雲雀が舞つてゐたり、芽出しの遅い檜を除いては滴るやうな新緑で森が蔽はれてゐたり、牧場の彼方此方に草を喰ふ牛や馬が點々してゐたり、遙か遠方の畑が耕やされてゐたり、見るもの皆戸閉に氣が伸びくした。が、折々嫌な氣持がしたの

は此領地を我物顔に好き勝手に振舞ふ管理人の噂であつた。けれども愈々領地に着いて豫ての計畫を行はうとする段になると、此惡感はずぐ消えて了つた。

事務所の帳簿を調べて管理人に會つて、農夫の小さい所有地が此方の畑の眞中に在るお庇に儲かる利益を一々數上ぐる露骨の話を聞くと、愈々自ら作るのを廢めて悉く農夫に土地を貸して了はうと決した。

帳簿面と管理人の話で悠ういふ事が解つた。最良耕地の三分の二は今では定つた賃銀の勞働者を備つて立派な機械を使用つて耕してゐるが、残る三分の一は一デシャーチン（凡そ我が一町）五圓で農夫に請負はしてある。そこで農夫は此五圓の爲めに三度鋤を入れ、三度草を刈り、蒔いたり刈つたりして束に捆けて麥打場へ運び込むまでの仕事をする。之だけの仕事を勞働者にさせれば少くも十圓は支拂はねばなるまい。其上に農夫は領地から取れるものと、使用う時は必ず勞働で代償するのが例で、之が亦高いものになる。例へば牧場から草を、林から薪を、或は畑から芋の葉を取つて使用へば必ず夫だけの勞働をしなければならぬ故、大抵な農夫は事務

所に労働の負債が出来てゐる。随つて耕地以外の土地は此代償で作らせるから、尋常なら五分の金利にしか當らない筈のものを約四倍として農夫から搾取るわけである。

以前から知つてはるだが、更めて新しい見方で見ると、能くも自分なり自分と同じ位置の他の人なりが慪ういふ不都合極まつた事情を平氣でゐられたもんだと不思議でならなかつた。管理人の説だと、若し土地を農夫に貸附けて了うと、差向き農具や牛馬が不用になる、賣つた處で悉く元價の四分の一にもなるまい、第一農夫に土地を貸したら散々に荒されて了うといふ。何の道大損物だといふ事を聞くと、益々土地を貸附けて収入の大部分を減ずるのが切めても善事だといふ念を堅くし、滞在中にテキパキと整理してはうと決心した。現在の作物の刈入や賣方や或は不用になる農具や牛馬や建物の處分は時期を見て計らうやうに管理人に委す事にして、左も右も直接農民に自分の計畫を語つて貸附條件を定めて置かうとしてクスシンスキイ領の中心の界限三ヶ村の農民を集めるやうに管理人に命じた。

で、管理人の意見を聞いても動じない大決心の歡喜と、自分の利益を犠牲にする安易とを抱

いて欣然として事務所を去り、事件の成行を左さま右さま考へつゝ家の周囲を一廻りしやうとし、荒れ放題に放棄らかしてある花畑——其くせ管理人の住居の前には綺麗な花を植えて置きながら——を抜けて蒲公英の咲くふチニスの遊戯場から、昔し屢々煙草を呷へながら運動し三年前には母のお客の美しいキリーモワ嬢と浮かれた名残の菩提樹道を逍遙きながら、明朝農民に話さうといふ談話の筋道を胸中に立案しつゝ再び事務所茶を飲みながら相談し、最う一遍考を纏めてから後、大きな母家の、昔しは逗留客の寢室に當てた用意の部屋へと行つた。

此の小綺麗な狭い座敷の壁にはヴェニス景色畫を何枚も、窓と窓との間には大きな姿見を掛け、清潔な弾機蒲團の寢床の側の小卓子には水指やら燗寸やら消燈器やらを準備し、姿見の前の卓子には化粧匣や露語の刑法研究を初め英獨文の刑法書類を入れた靴が置いて有つた。是等の書物は旅行中讀むつもりで用意して來たのだが、此晩は遅かつたので、明日は早朝に起きて農民を集める準備が出来るやうにと、直じ床へ入つて横になつた。

部屋の隅には古風な象眼入のマホガニーの眩掛椅子が有つた。此椅子は以前は亡母の寢室に

あつたのを偶つと憶出すと、全て思ひも寄らぬ變な感じが不意に湧いて來た。何時かは此家も倒れ、此庭も荒れ、此林も切倒されるのだと思ふと、急に情なくなつて、是迄隨分金を掛けて丹精した地屋敷や厩や物置や農具や馬や牛を一朝にして失くして了うのが俄に惜くなつた。

今の今までは何の這般なものを捨てるのは造作もないと思つてゐたが、俄に捨てる處が、土地を貸附けて収入の半ばを減するでさへが中々容易でない心地がした。左に右に農民に土地を貸附けて一家の産を失くして了うは不覺悟極まつてるぞといふ考が不意に起つて來た。

『土地を所有してはならぬといふのか。だが若し土地を棄てたなら一家の經濟が維持出來なくなる……だが、西比利亞へ行かうつて矢先に家や土地が何の役に立つ』といふ聲がするかと思ふと、又別の聲で、『だが、一生西比利亞に埋もれて了うツモリでもなからう。其内女房も持てば子供も出來る。其時は怎うする。矢張親から譲られた時と同じ形で子に譲らねばなるまい第一、土地に對しても亦義理がある。棄てたり失くしたりするのは造作もないが、さア欲しくなつても二度と手に入れるは中々難かしい。且之から先きの世渡りは怎うする？ 腕一本腕一

本で自分の身過ぎをする覺悟が確と定つてゐないと、迂闊財産の處分も出來まいが、實際夫だけの成算が胸中にあつての上の決心か、全く這般な突飛な考が眞實良心から湧いて出たものだらうか。事に由つたら人前を作りたさに——高潔を誇りたい爲めばかりに行はうつてのぢやあるまいか疑問である。』

と左さま右さま自問自答しつゝ、情々考へると、何さま人の思はくに動かされてるとしか認められないが、愈々考へれば考へるほど益々多く疑問を生じて容易に解決が出來さうと思はれなかつた。

左に右に今夜は少とも早く就眠して此の減茶苦茶の難問を遁れ、明日は未明に起きて、起きたての新らしい頭腦で解釋しやうと決心して床に就いた。が、暫らくは容易に就眠かれなかつた。窓からは新らしい空氣と共に月が射込み、蛙がキチキチと鳴き、遠い公園や或は近い窓側のライラックの木叢で鶯の番ひが囁り合ふのが聞えると同時に、典獄の娘が搔鳴らしたビヤノや典獄其人までを憶出し、續いてマースロワを憶出し、マースロワが蛙の鳴くやうな奇妙な唇

をして、『何卒妾をお見捨て遊ばせ、』と云つたのを憶出した。

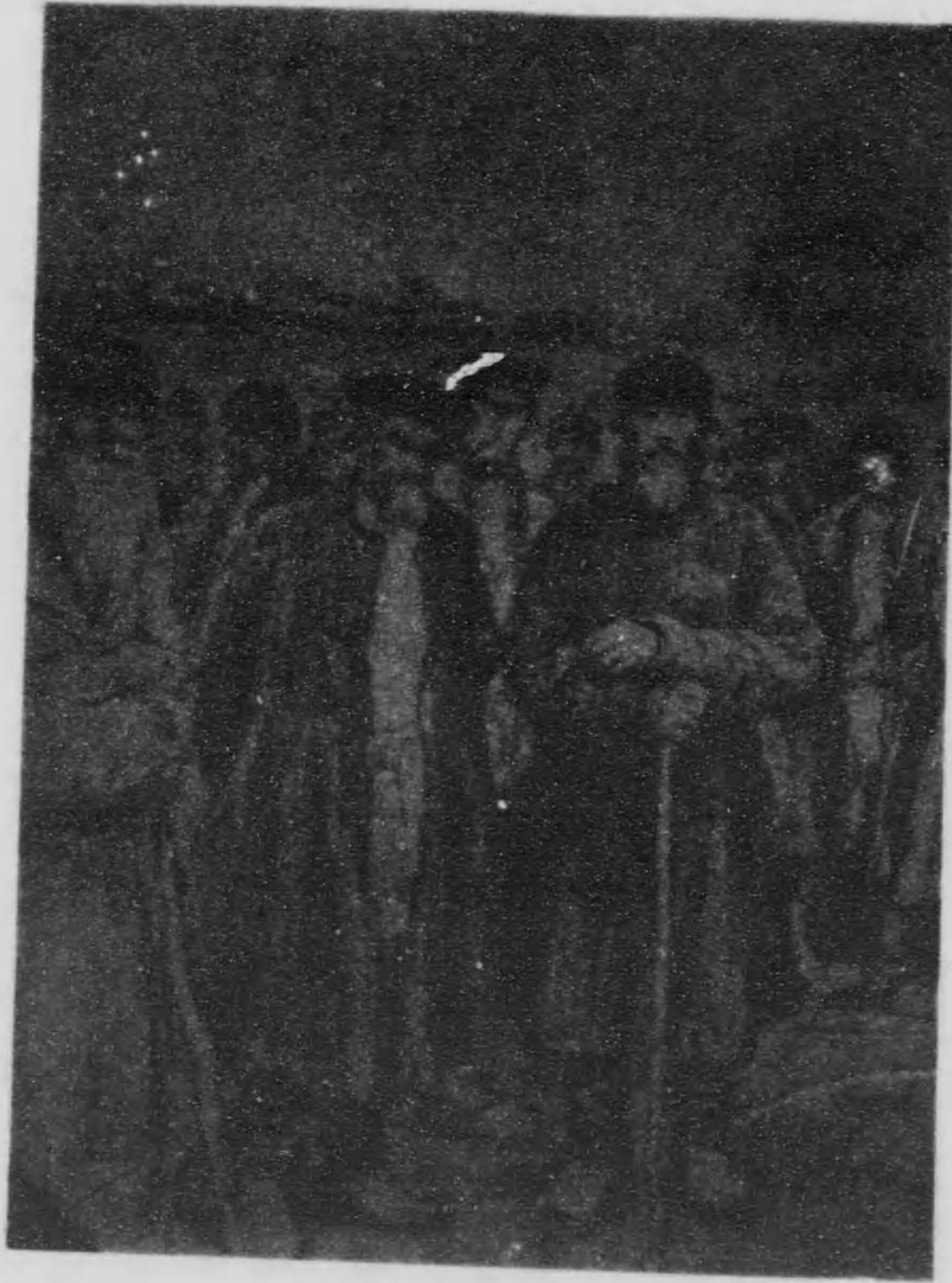
で、現ら〜としてゐると、獨逸人の管理人が蛙の鳴く方へ行かうとするのが目先に仄ついたので呼返さうとした、其途端、管理人の顔がマースロワに變つて了つて、『貴郎は公爵、妾は咎人、』と屹とネフリユードフを窘めた。

『いや、這般な事で屈しちやならぬ、』とネフリユードフは心中に思ひつゝ忽ち眼を覺まして自問した。『左に右く自分の做やうツて事が是だか非だか。之を先づ定めなけりやならんが、實は何方とも解らんし、頭から氣にも留めてをらん。何方だつて同じだ。何しろ今は眠て了はにやならん。』

とウト〜しつゝ管理人やマースロワが降りて行く跡を追駈けやうとした先きは夢か現か。

第二回

翌る朝は九時に起きた。主人の用事に控へてゐる事務所の若い書記はネフリユードフが目を



覺ました氣配を聞付けると、今迄如此なに叮嚀に磨上げた事が無いほどテカテカ光らした靴と冷たい清冽な井戸の水を持つて来て、最う既に農民が集まつてをりますと云つた。

ネフリユードフは直ぐ飛起きて、自分の考を纏めやうとした。前夜寝る間際に地面を盡く棄て、了つて全く産を失ふを惜なく思つた感情は痕跡もなく消えて了つて、怎うして那麼な情ない感情がしたかと思議でならず、今では却て眼前に横はる仕事を喜んで迎へ、内心窃かに誇つて覺えず打笑まれさへした。

窓から覗くと、蒲松英が一杯に生へてる昔からのテニスの遊戯場に農民が段々と集まつて來るのが見えた。前夜、蛙が鳴いたのは空しからず、此日は朝から曇つて、蕭條かな生温い雨が降り出して草や木の葉にシト／＼と落ち、新芽の香や最つと雨の欲しけな濕つた地面の香がブウンとした。

ネフリユードフは衣服を着更へながら農夫が段々と集まつて來るのを何度も窓から見てるる、一人／＼に寄つて來ては帽子を脱つて互に會釋し、各自杖を突きながら環を作つた。其中

に肥胖した筋骨逞ましい壯年の管理人が緑の立襟と大きな釦紐の短かい脊廣扮装でネフリユードフの部屋に来て、豫定通りに一同寄りましたが御前の朝のお食事が濟みますまで待つやうに申しつけて置きました、お茶も珈琲も兩方支度をして置きましたから何方でもお好きな方をと云つた。

『イヤ直ぐ會つた方が宜からう、』とネフリユードフは云つた。が、愈々之から我が決心を農夫に話すのかと思ふと何となく氣怏れするやうな耻かしいやうな思ひも寄らない妙な感情がしたネフリユードフが彼地に話さうといふのは恐らく彼等が夢にも思はない耳よりの咄である。之まで奴隸同様に苛酷に待遇かつた彼等に極低廉な地代で賃附けて立派な獨立自由の民としやうといふ、這般な甘い咄があらうか。然るに此の非常な大恩恵を與へやうとする身が、何か知らぬが、尙だ心に耻ぢるやうな氣がしてゐた。で、農夫の集まつてゐる場所へ来て、茫々したのや縮くれているのや禿けてゐるのや白くなつてゐるのや種々な頭が眼の前に現はれると、俄かに胸がドキマギして口が利けなくなつた。

雨は愈々シト／＼と降つて農夫の鬚髪や鬚やザク／＼した外套の毛に水玉を宿してゐた。で、一同視線を合して領主の殿の顔を見つゝ何を口外すかと待構へてゐた。が、ネフリユードフは満心ワク／＼してツイ言ひそゝくれて了つた。暫らく場が白け渡つた時、自ら露西亞農民の適當な支配者であると己惚れ且露西亞語を最も自由に話すイヤに沈着いた高慢ちきの獨逸人の管理人は靜かに口を切つた。此のデク／＼肥つた逞ましい管理人と、ネフリユードフ彼自身と、瘦せ細けた皺苦茶面の怒り肩の粗末な服の農夫達と奇妙な對照を作つてゐた。

『公爵閣下は、』と管理人は重々しく、『今度特別なお思召で汝達に極廉く土地をお貸下けにならうといふのだが、汝達には此の難有い御恩を戴くだけの資格が無い。』

『何故俺らア駄目でがんです、』と赤い毛の辯口者は、『俺らア怠けるとでも言はつしやるか。おじれになつた太奥様には太い御恩になつた俺らだ。今度の若エ殿様だつて豈夫や俺らを見殺しにさつしやる事は無かんべエ。』

『俺らでつて之までツイぞ殿様に楯エ突いた覚えはがんせんが、地面の足りねエ事だけはお慈

らの中年者は云つた。

『だから、垣根を作エると何度も云つたのを忘れたか。』

『垣根を作エろつてなら先づ木を呉れさつしやい、』と矮軀の律義さうな男は、『俺やアお前さん去年の事ツた、垣根を作エベエと若木を切つたら、お前さんは直ぐ願つて出て、俺を三月半中に打込んで虱に喰はしたぢやねエか。垣根を作エたお蔭は直ぐ慫慂顔でがんす。』

『何を彼の男は云つてるのだ？』とネフリユードフは管理人に向つて訊いた。

『Der erste Dieb im Dorfe (村一番の大盗賊)』と管理人は獨逸語で、『彼奴は毎年林の木を切つては捕る奴でムいます、』とネフリユードフに答へて更に農夫に向ひ、『汝は他人の所有権といふものを大切にしなければならんぞ。』

『お前さんは大切にさつしやるかエ？』と老爺さんは、『義理にも大切にさつしやらねエけりや——矢鱈と人をフン縛らつしやるからノウ。俺らの運はお前さんの手の中に握られてるやうなもんでがんす。』

『飛んでもねエ事をいふ、』と獨逸人の管理人は、『汝達の方が俺を痛い目に會はせたくせに。』
『何だつて——お前さん、去年の夏に俺らア屍骨を打折いた事ア忘れさつしやるめエ。此通り猶だ痕跡が残つてるだ。泣く子に地頭で、俺らア仕方がねエから泣き寝入りやしたが、お前さんは忘れる事は無かんベエ。』

『何だと！ 何しろ汝達は法律に従はんけりやならんワ。』

相互の言葉争は益々盛んで限りがなかつたが、無關係者には何が何やら一向解らない。唯だ一方の農夫はブン／＼怒つてるやうでも何處かビク／＼してゐるし、一方の管理人は位置と権力を嵩に是が非でも壓制けやうとするのが顯然と見え、互ひにワヤ／＼と云ひ募るのを聞くのが如何にも苦／＼しいので、ネフリユードフは少とも早く土地賃貸の要件に入らうとして、

『先ア餘計な事は云はずに肝腎の土地の件だ。』と一段聲を勵ました。『乃で愈々貸すとしたら幾何地代を拂うかネ？』

『殿様の地面だもの、殿様が勝手に地代を定めたら宜かんベエ。』

夫からネフリユードフが地代の額を言出すと、勿論隣地から比べると非常に廉かつたが、農夫等は尙だ高いと云つて、彼等に有り勝ちな掛引を始めた。初めはネフリユードフも自分の申出しが二も二もなく歓迎される事と豫期してゐたのが、思ひの外渠等は少しも嬉しがらぬやうな氣色が見えなかつた。

尤も此の申出しが確かに渠等にとって有利なのは良く解つた。といふのは愈々貸附けの一段が定まると、此恩恵が全村平等に及ぼす敷、或は特別の仲間に限る敷、委しくいふと體力の弱い者や地代を滞ほらせるやうな怠惰者を除けものにしようと主張する連中と、此主張の下に除けものにされさうな連中との間に大論争が始まつた。到頭其果が管理人の仲裁で地代其他一切の條件が定められてから、農民達はガヤ／＼と罵りながら村の方へと坂を下りて歸つた。

其間にネフリユードフと管理人とは約定を定めるべく事務所へ行つた。萬事がネフリユードフの望む通り思ふ通に定められ、農夫等は近所界隈の何處の地面を借りるより三割安く借りる事が出来た。加之ならずネフリユードフの収入は以前の半分に減じたとは云へ、尙だ中々に十

分で、其上に林を賣つたり不用な農具や牛馬の處分をすれば纏まつた金が入る筈で、何も彼もが上首尾であつたが、尙だ何だか心に恥づるものがあるやうな氣がした。且、農夫達は口頭でこそ頻に難有がつてゐるが、心中尙だ不満足で、猶ほ此以上を望んでゐるのが、看え透いてゐた。であるから思切つて収入の大部分を捨てたのであるが、矢張農夫達の希望を十分満足させる事が出来なかつたのだ。

其翌日約定書の調印を済ましてから、總代に選ばれた數名の老農夫に送られて、停車場の客待駁者が噂した管理人の御大層な馬車に乗つて停車場に行き、不満足氣な顔して見送る農夫等に袂別を告げた。ネフリユードフ自身も何だか物足りないやうな氣がして、何故だか知らぬが、情ないやうな恥かしいやうな心地が絶えずしてゐた。

第三回

クスミンスキー村から直ぐ廻つて伯母から譲られた所領地、即ち初めてカチューシャに會つ

たバノイウオ村へ行き、クスマンスキー村同様の改革をし、旁々カチューシャに關する一件及び二人の間の兒供の消息、死んだといふが眞實か嘘かを探らうとした。

朝まだきに村に著くや否、一番駈に車を走らして喫驚したは伯母の邸の總ての建物、就中母屋の非常な大破である。鐵葺きの屋根は盡く赤錆を生じ、其中五六枚は捲られてゐた。多分暴風雨の爲であらう。下見の板は數箇所破損して何處でも赤錆の釘を折るか抜くかすれば容易く壞れて了ひさうだ。玄關は二ヶ處とも、取別け善く記憶えてる中の口は破れたり腐れたりして垂木だけが残つてゐた。窓玻璃も處々破れて板張になつてゐた。支配人の住居になつてる部屋や臺所や既は處斑に忝けて破れ掛つてゐた。唯庭だけは荒れてゐなかつたが、木は伸び切つてゐて蔚茂と繁り、一面に花が咲亂れ、櫻や林檎や梅が白雲の棚曳くやうに垣越に見えた。垣になつてゐるライラックの木叢も十二年前に十六歳のカチューシャとゴレーリキ(遊戯の名)をして茨の溝に落ちて足を茨掻きしながら一緒に此蔭に隠れた時のやうに花盛りであつた。ソーフキヤ伯母が母家の傍に植えた落葉松は、其時分は杖ほどの太さであつたのが今では棟梁程の太木と

なつて青々した針のやうな葉が繁茂してゐた。庭沿の川は靜かに流れて水車の堰に落ち込み、此河を央に挟んだ牧場には幾群の黒いや白いや飴色の牛が點々してゐた。

中學を卒業前に廢めて了つた書生上りの支配人は笑顔でネフリユードフを中庭に迎へて事務所へ請じた。何か特別の嬉しい事でもあるやうにイソ／＼と襖の蔭へ隠れて暫らくは秘々として話を聞かされたが、其内にネフリユードフを送つて來た辻馬車馭者が酒代を貰つて馬車の鈴を鏗爾鳴らしながら歸つて了うと、後は寂然した。すると又刺繍をした百姓服を着て耳環の代りに銀の房を垂らした娘が素足で窓の傍を駈抜けると、其後から男が紙裏の鞆を蹴附けながら追駈けて行つた。

ネフリユードフは小さい窓に凭れて庭を覗いてゐた。和かな新らしい春風は新たに掘返された土の臭氣を窓から通はしつゝ、汗ばんだ前額に垂れる髪の毛や小刀で切つた窓框の紙片のヒラ／＼するのを弄つてゐた。

トラ・バ・トラツブ——トラ・バ・トラツブ」と遙か川下で布洗ふ女が拍子を取つて打く碇の音

がキラ／＼光る水車の貯水池の水面を渡つて進む響き、水車の水が巧みな調を奏で、目眩るしく飛ぶ蛇がブーンと耳の端を掠めた。

ネフリユードフは徐々に若い盛り無垢なる時代を憶出した。其時の水車の水の調や布洗ふ女の袖打つ音や汗ばんだ前額に垂れる髪の毛や窓框の紙を弄る春風や耳の端を掠める蛇の羽首や、昔も今も少しも變らないが、我身を昔しの十九の少年と思ふ事だけが怎うしても出づなかつた。が、昔と同じ純潔無垢と同じ洪大無量の希望を未來に抱いてゐる其頃と同じやうな氣がしてゐた。けれども丁度夢を見てゐるやうで、恁んな事は最早空頼めであるのが解ると、身に染みて悲しくなつた。

『お仕度は何時頃に致しませう？』と支配人は微笑みながら云つた。

『何時でも都合の好い時に、格別餓じくはないから、左に右に村をひと廻りして来やう。』

『お館の方へ行らして下さいませんか。内部は悉く整頓してをりますから、何卒御見分を願ひたいので、外廻りが済みましたら……』

『それは後廻しだ。時に附かん事だが、マトリーナ・ハリナと云ふ女が村に在るかネ？』
(之はカチニニツヤ)
(の伯母の事だ。)

『はア、居ります。内々で酒の密賣をやつてをります。度々説諭したり叱つたりしますが、併し取押へるのも可憐相ですから捨置きます。御承知の通り最う老女で、孫がムいます。』と續いて莞爾々々してゐるたは、主人に對して助才なく愛嬌を振り捲かうとし、且何も彼も自分と同様に理解こんでゐると思つたからで。

『何の邊に在る。會ひたいもんだが、』

『村端れでムいます。一番端れの家から手前へ三軒目で、左方に煉瓦の家がありますが、夫を外れると婆さんの家でムいます。御案内致しませうか？』と支配人は矢張莞爾々々顔で。

『イヤ何、直ぐ解るだらう。案内には及ばんから、夫よりも村の百姓たちを一つに集めて置いて貰ひたい。地面の件に就て話して聞かせる事がある。』

と云つたは、クスミンスキーに於けると同じ改革を此村でも行つて、成るなら今晚にも農夫

と立會つて新約束を結ばうといふ腹があるからだ。

第四回

門から出るとネフリユードフは銀房の耳飾を附けた娘が酸模や車前草の一面に生えてる牧場を横断る草分道を歸つて來るのに出會つた、バツとした色氣の長いエブロンを掛け、ムツクリした素足で飛んで歩きながら左の手を振りつゝ右の手で鶏を腹へ緊と抱へてゐた。鶏は赤い肉冠を震はしつゝ溫和しく凝然としてゐたが、キョトキョト眼を動かして黒い足を出したり引込ましたりして娘のエブロンを蹴つてゐた。段々ネフリユードフに近くなると次第に歩を緩めて、傍まで來ると鳥渡佇立つて妙な風に頭を掉つて會釋したかと思ふと鶏を抱へてアタフタ駈出して行つた。

聽て只有る井戸へ向つて行くと、汚ない粗末な百姓の仕事着を着た猫背の老婆が手桶に一杯汲んだ水を擔棒で擔いで來たのに邂逅つた。老婆は擔棒を斜に道を避け、前の娘と同じやうに

首を振つて會釋した。

此井戸を過ぎると村である。丁度カンカンした暑い日で、尙だ朝の十時だといふに頭を壓へつけるやうだ。時折雲めが、日を蔽し、蒸々と鼻を衝くやうな、但し夫程氣持の悪くない肥料の臭ひが空氣を充たしてゐた。此臭氣は恰も坂を上りつゝある何輛もの肥料車からも臭ふのだが、夫よりか丁度通過ぎやうとする軒並の百姓小屋の開放しの門内に積んだ堆肥から臭つて來るのだ。襦衣も股引も肥料だらけの徒跣の農夫達は此邊にトンと見掛けぬ絹の鉢巻の鼠の帽子を被つた脊の高い肥胖した紳士が銀の把柄の光つたステッキをコト／＼突きながら坂を上つて來たのを見て怪訝さうに願附つた。空の車をガタクサさせて行く野圃歸りの農夫は車の上から帽子を脱つて會釋しつゝ、這般な立派な紳士が此邊の田舎道を何用あつて歩いてゐるのかと不思議がつて目送つた。女原は門から飛出したり家の前に立つたりしてジロ／＼見では互に秘々と話してゐた。

四軒目の門前を通抜けやうとした途端、肥料を山のやうに積んだ上に蓆を掛けた馬車が車輪

を耗つかせながら門を出やうとする處で、六歳ばかりの徒跣の男の子が車に乗りたさうに踵から隨いて來ると同時に、木の皮の靴を穿いた若い男が大股をして圍から外へ馬を牽出した。すると、脚の長い羊毛の馬の子が一緒に門から飛出して、ネフリユードフを見ると車にビタリと引着いたが、車輪で足を摩つたので喫驚して重い車を牽出しながら穩かに嘶く母馬を飛越した。次の馬を牽出したのは肩骨のコック／＼突出した跣足の老爺で、汚い褌衣に縞のツボンを穿いてゐた。で、カラカラに乾いた鼠色の堆肥を蒔き散らしながら道路まで馬を牽出して丁と、老爺の馬夫は門まで戻つてネフリユードフに會釋した。

「豪ア無禮でがんですが、お殿様は俺らア大奥様の御御様だんべエが？」

「然うだよ、先の主人の甥だよ。」

「どうも爾うだツベエと思やんした、」と多辯の老爺は、「能ウムらッしやた。」

「久し振でやつて來た。怎うだネ、此頃は？」とネフリユードフは何を云つて宜いやら解らんから間に合はせを云つた。

「俺らかネ？ 段々悪くなるばツかりでがんす、」と老爺は左も後生樂さうに愚圖ツかして云つた。

「怎うして段々悪くなる？」とネフリユードフは一と歩門内へ踏込みつゝ云ふと、

「怎うにも怎うにも俺らア一生は浮みツこはありやせんや、」と云つてネフリユードフの踵から隨いて構内の屋根下へ行き、

「俺らア、お殿様、十二人の同勢で——」と、頭を包む手巾を滑らかしつゝ袴を捲り上げ、眞黒な脹脛を出して、一生懸命に熊手で堆肥を搔廻して二人の女を指しつゝ、「六ブート（一ブは英斤三）の麥を買つても一ト月とは有りましねエが、何處からお前様麥を買ふ錢が湧いて來やす？」

「お前の畑では麥は出來ないかい？」

「俺らの畑でがんす？」と嘲けるやうに笑ひながら、「俺らの地面では三人口がエンヤラ漸とでがんす。去年の上りはクリスマスまで足りましねエだつた。」

「それぢやア怎うした？」

「怎うすべエ、お前様、悴を一人日傭に出して、事務所からも借りやしたが、断肉のお祭前に無くして丁やして、今だに年貢を納める事が出来ましねエ。」

「年貢は幾何だネ？」

「一年を三期に分けやして、俺らの地面だと、一期が十七圓でがんす。なア、お前様、俺らア見てエな三度のお飯も食へねエ、年貢も拂へねエなんて如此エな悲惨な生涯があるでがんせうか。他目からは怎うしてやつてるか解りましねエや。」

「家の中へ入つて見ても宜いかネ？」と構内一杯に熊手で掻取った臭氣紛々たる黄色く焼けた堆肥の中を行かうとすると、

「宜エ段か、まア、ムラツしやい、」と老爺は跣足で堆肥を踏附け、足の指の股から汚い液をジク、ジク、踏出しながら突とネフリユードフを摺抜けて入口の扉を開けた。

堆肥を搔廻してゐた女は頭の手巾を直し、端折った裾を下して、純金の袖釦鈕を附けた立派

な紳士が自分達の家へ入るのを不思議相に立つて見てゐた。汚ならしい下襦袢一枚の女の子が二人、家から飛出して來た。

ネフリユードフは帽子を脱つて身を屈めながら低い鴨居を潜つて入ると、饅えた食物の臭ひのする狭苦しい汚い板敷には機臺が二臺据ゑ付けてあつた。煖爐の側には皺苦茶な澁紙色の細ツこい腕を捲り上げた老婆が立つてゐた。

「お殿様がムラツしやつた、」と老爺は云つた。

「お殿様けエ。能う先あムラツしやつた。」と老婆はまめくしく捲し上げた袖を下した。

「お前達の家の容子を見に來たのだ。」

「俺らア家イ見て怎うさツしやる。此通り明け放しておッ耻かしい事んだ。家といふ名ばかりで、曲りくねって打倒れさうだ。萬一先あ打倒れたら怪我アするべエが、家の爺様たら生得が暢氣でがんすから、俺ら身分には澤山だべエ云ひやんして、王様のやうに氣樂べエ云つてやす。」と元氣な老婆は首を振りながら、「お飯の支度に掛つてやすだ、働エてる衆に食べさせべエと。」

『お前たちは怎んなものを喰べてる？』

『俺らア喰べてるもんでがんですかネ？素晴らしいもんでがんですよ。今が黒麴と裸麥酒なら今度の次は裸麥酒に黒麴、』と云ひつゝ老婆は半分腐れてる齒を露出して見せた。

『調戲退けて眞摯な咄で、お前達の喰ふものを見せて貰へまいか？』

『俺らが喰ふものかね？』と老爺は笑ひながら、『俺らが喰ふものは小面倒臭くねエ極單純したもんでがんです。ノウ婆さん。見せて上げたら宜かんべエ。』

老婆は頷きつゝ、

『俺らア百姓の食ふものを見て怎うさツしやる。お前様も餘程好奇なお殿様で、何でも穿鑿べエしなければ承知出来ねエ性分と見える。黒麴と裸麥酒は今云ひやした通りで、夫からお汁、昨日貰つた痛風草で拵エたお汁に馬鈴薯でがんです。』

『夫だけかね？』

『尙だ足りましねエか。そんだらと、牛の乳を少つとべエ呑みやす、』と老婆は戸口の方を見て

笑ひながら云つた。扉は開放されて戸外には男の子や女の子や乳呑兒を抱いてる女が一杯集つて、百姓の食物を見たがつてる此の奇妙な殿様を物珍らしさうに見てゐた。老婆は這般な立派なお殿様と口を利くのが高慢らしかつた。

『俺らア一生は哀れなものでがんです、お咄しになりましたねエ、』と老爺は云ひつゝ戸外を屹と見て、『やい、何を見てけつかる、』と怒鳴りつけた。

『イヤ、邪魔をした。夫では左様なら、』とネフリユードフは、何故だか知らぬが心中耻かしいやうな沈著かないやうな氣がした。

『最う歸らつしやるか。こねエな汚ねエ處を能く先ア見て呉れさツしやつた、』と老爺は難有がつた。

通路に集つてる連中は一方へ片寄つて道を開けると、ネフリユードフは此間を通つて直ぐ道路へと飛出した。すると徒跣の男の子が二人、踵から隨いて來たが、二人とも襦袢一枚きりで長き方のは初めは白かつたのが今では鼠色に化け、小さい方のは桃色が褪けて、加之に破れ

通路に集つてる連中は一方へ片寄つて道を開けると、ネフリユードフは此間を通つて直ぐ道路へと飛出した。すると徒跣の男の子が二人、踵から隨いて來たが、二人とも襦袢一枚きりで長き方のは初めは白かつたのが今では鼠色に化け、小さい方のは桃色が褪けて、加之に破れ

てゐた。ネフリユードフは二人を盼顧ると、

『伯父さんは何處へ行くんだエ？』と白い襦衣の方は忽ち口を開いた。

『マトリヨナ、ハリナノ許へ行くのだが、お前は家を知つてるかネ？』

すると桃色襦衣の子は何だか笑止しさうに笑出した。が、長き方は眞面目臭つて、

『マトリヨナは二人在る。お婆さんの方がエ？』

『爾うだ、老婆のマトリヨナだ。』

『そんなら俺知つてる。此の村の端れに在るんだけど、伯父さん、伴れてツてやるべエか。』

なア、²フヨードカ、伴れツてやるべエぢやアねエか。』

『だがお前、馬は怎うするだ？』

『馬は大丈夫だんべエ。』

と、そこで相談が出来て、三人は一緒に上手の方へ行つた。

第五回

ネフリユードフは大人よりか小兒と話す方が氣の措けない心地がした。桃色襦衣の小さい方も笑つてばかりゐたのを止めて、長き子と同じやうに發揮々と話出した。

『村で一番貧乏してるのは誰かい？』とネフリユードフが訊くと、

『一番貧乏してるんだネ？』と長き方は、『ミハエルが貧乏してるべえ。夫からマカーロフとマルター——マルタは随分貧乏してるるぜ。』

『アニーシャの方が最つと貧乏してゐるべエ。』と小さい方のフヨードカは、『アニーシャは牛一匹も持つてねエンだぜ。乞丐をしてるんだからナ。』

『アニーシャはお前、牛を持つてねエツたツて、家のものが三人こツきりだ。マルタの方は五人だぜ。』

『だけでもお前、アニーシャは後家だぜ。』とアニーシャ側の桃色襦衣の兒は云つた。

『マルタだつて後家も同じがやアねエか、』と長き方は、『亭主があつたつて、家に在ねエん
だもの。』

『亭主が家に在ない？ 何處に在る？』とネフリユードフが訊くと、

『牢の中で虱を飼つてらだよ、』と長き方は答へた。此の虱を飼つてるといふは百姓仲間の通
り言葉である。

『マルタの亭主てのはネ、』と桃色襦袢の兒は早口で説明し出した。『去年の夏殿様の山林の木
を切つた罪で牢へ入れられて既う半年になるベエ。兒供が三人に病人のお婆さんが一人だから、
マルタは乞巧をしてゐるだアよ。』

『何處だい、家は？』

『ホラ、此家だよ、』と丁度今通り越さうとする家を指さして云つた。只見ると、其前に蓬のや
うな頭髮の小さな孩兒が跛の足で危ツかしさうに立つてゐた。

『ワースカー——此孤兒は先ア、何處エ行つてらだ、』と垢だらけの煮染めたやうな襦袢一枚きり

の女が家から飛出して大きな聲で叫つた。ネフリユードフを見ると喫驚して、孩兒を怎うかさ
れては大變だといふやうに周章くつて引抱へて逃込んだ。

之がネフリユードフの山林の木を伐つて牢へ入れられた男の女房のマルタである。

『マトリヨーナの婆さんも矢張貧乏してゐるかネ？』とマトリヨーナ・ハリーナの家近くへ來
た時、ネフリユードフは小兒に訊くと、

『いにや——マトリヨーナは貧乏してゐねえや。内緒で酒を賣つてらだもの、』と桃色襦袢の
兒は云つた。

聽てマトリヨーナの家まで來た。ネフリユードフは小兒を外へ置いて、自分だけが家へ入つ
た。奥行十四呎の一室きりで、大きな燧燼の後ろには脊の高い男なら身體を伸ばす事が出來さ
うもない寢臺があつた。

『此寢臺の上でカチューシヤが兒供を産んで、産後の肥立が悪くて臥てゐたんだナ、』と心中に
思つた。

家の中は殆んど機臺で塞けて、丁度マトリョーナが惣領の孫娘と二人で經絲を描へてる處へ、ネフリユードフは入らうとして低い入口で前額を打撞けた。其踵から最う二人の孫娘が隨いて来て、鴨居を押へつゝ戸口に立つてゐた。

『誰に用があるだ、お前様は？』と老婆はネフリユードフを見ると突慥食に劍呑を喰はした。元來が因業である處へ、絲が思ふやうに捕はないのでムシヤクシヤしてゐた。其上に拔賣酒の傷持つ足で知らぬ人の來るのを恐れてゐたからだ。

『私は此界限の土地の持主だが、お前に訊きたい事があつて來た。』

老婆は暫らく無言で睨つと凝視めてゐた。聽て俄に容子を變へて、

『飛んでもねえ。先ア、お殿様でムラツしやツたか。全で、はア、お見外れ申しやした。俺やア、はア、粗忽かしやで、通り掛りの旅の衆だツベエと思やんしたんで、飛んでもねえ無禮べえ申しやした。勘辨ノウサツしやいませ。』と猫撫聲を作りつ、更めて、『お殿様でムラツしやツたか。』

『實は他聞を憚るのだが、』とネフリユードフは戸口に立つてる小兒の背ろの窺れた女——陰氣な顔をしてニヤ／＼笑つてる病み呆けた乳呑子を抱いてる女をジロリと見つゝ、『お前一人と相對ひで聞きたい事がある。』

『俺一人とかネ、』と云ひつゝ戸口を見て、『やい、あじを見てけつかる。まご／＼するとステツキを打喰はせるぞ、』と叫りつけ、『さッ、戸を閉めて外へ行かッせエ。』

此權幕に喫驚して小兒は逃出した。女も襦と戸を閉めて行つて了つた。

『誰だかと思やんしたら俺らア大切なお殿様のお前様でがんしたか。俺らのお寶物、俺らの大事な寶珠の玉のお殿様でがんしたか。能ウ先ア、』と老婆は、『能ウ先ア親切に尋ねて呉れさつしやつた。さア腰を掛けさつしやいませ、』と前垂で席を拭きながら、『誰だかと思やんしたらお殿様のお前様だ。始終御恩になる立派な氣前のお殿様だ。其のお前様をお見外れ申すナンテ、何て俺は馬鹿だんべエ。勘辨ノウサツしやいませ。』

と云ひつゝネフリユードフの腰を掛けた前に突立ち、左の掌へ腕を載せた右の手で頰杖を突

き、キン／＼した聲で、

『齡を老らしやつたノウ、お前様も。若エ時分は雛菊見てエに綺麗な美エ殿御でムラッしやつたが、それが先ア今は——矢張苦勞ノウさつしやつたと見えるノウ。』

『其の苦勞を話したさに來たのだが、』とネフリユードフは言葉を更めて、『お前はあの、カチユーシヤ・マースロワを覚えてるだらうナ？』

『カチリーナでがんですかエ？覚えてるの覚えてねエの段か、俺イ姪つ子でがんですもの、覚えてなくて怎うするベエ。彼の女子のためにやア俺やア、はあ、何れ程泣かされたか知んねエだ。あの女子のこんなら俺イ何でも知つてるだ。何のお前様、神様やツァール様の前へ出て清淨潔白なもの有りましたねエや。若エ時分の事んだもの、少とベエの悪戯は誰でもするだ。お前様も茶や珈琲が好きでがんですからノウ、大方魔がさしたんベエ。魔と云ふ奴ぐれエ強エものはありましねエ。お前様も魔に憑付かれやんしたに違えねエ。が、お前様は悪戯ベエしたつて百兩で莫大もねエ手當ノウさつしやつたから帳消しになつてるだが、彼の女子たら那樣たる不了見

者だツベエ。俺イ云ふ事せえ諾いてらア無事にして行かれるだに、手前勝手の放縱ばかり吐きやアがつてカラ手にをへねエだ。お前様だから咄すだが、俺イ姪だけんど、虚言は吐きましたねエ、眞實の事を話すベエが、お前様、怎うだ。お邸さアお暇ノウ貰つてから、俺イ太らア宜え口を捜し當てゝやりやした。處がお前様、其家の若檀那は女子におつ惚れて口説いたと思はつしやい。あの女子たら何たら笑止しな子だんベエ。若檀那がヤイヤイ云はつしやるだのに頭を掉つて到頭言ふ事を諾きましたねエ。加之にお前様、御主人と嘩喧ベエして追出されやした。夫から山林の役人の家エ參エりやしたが、矢張辛抱が出来ましねエで、何ともハヤお前様、手をへましねエ。』

『カチユーシヤの産んだ子は怎うしたエ？ 確かお前の家で産をした筈だが、怎うしたエ、小兒は？』

『孩兒でがんですかエ？ 實はお前様、肥立が順當に行きましたねエで、一時はお前様、難かしさうでがんですから、俺イ洗禮をさせやして、夫から育兒院へ預けやした。阿母がおツ死ぬてエ

に罪もねエ神様みてエな孩兒を放つとく事が怎うして出来ベエ。世間には其様な無慈悲な事ベエ不慮で、生れたばかりの孩兒を放つといて見殺しにするもんもあるが、俺らには出来ましね。少とベエ面倒掛けてもと思やんして、育兒院へ頼みやした。お金も未だ澤山ありやしたから、寧そ其りが宜かんベエと——」

『すると育兒院の番號は解つてるナ？』

『夫がお殿様、番號は解つてやすが、孩兒はおッ死んぢまやした。マラーニヤが伴れて行きやすと直ぐおッ死んぢまやした。』

『マラーニヤて、誰だ？』

『マラーニヤてのは、お前様、スクロードノ村で孩兒を預かる商賣ノウしてやしたが、今ぢやア矢張おッ死んぢまやした。素晴らしい伶俐な豪エもんでがんしたよ。孩兒を預けに行きやすと三人が四人までは自分の家で育てやして、夫から纏めて育兒院へ伴れて行くのでがんすが、夫がお前様、巧エ工風をしたもんでがんす。搖籃の大エやつたら、尋常の大きさの倍もありや

せう。其ん中へ四人までは寝かしやすが、足と足を密著けて、頭だけは衝突はねエやうに按排よく離しやして、布で作エた乳首を口に含まして置きやすと、スヤ／＼と溫和しく寝て了ひやす。巧エ工風をしたもんでがんす。』

『む、夫から。』

『カテリーナの孩兒も矢張此様な按排しきに育てられやしたが、二タ週りも経たねエ中に病み付きやした。』

『ふうむ、』とネフリユードフは悵然として、『乍麼な兒だつたかねネ？』

『美え子の何のつて那様な綺麗な孩兒が減多とあるもんでありましねエ。お前様酷肖だ、』と老婆は眼をバチ／＼さした。

『怎うして病氣附いた。食物でも悪るかつたカナ？』

『食物ツたつてお前様、唯つた一種でがんす。自分の子でねエと仕方がねエももんで、活かしてせエ置きやあ濟むといふ育て方でがんすから、莫斯科の育兒院へ伴れて行きやした處でおッ死

んだと云ひやして、書附を持って來やした。マラーニヤのする事あ此通り几張面で、少とも漏が無エだ。中々豪エもんでがんしたよ。』

ネフリユードフが兒供の事に就て聞き得たのは之だけであつた。

第六回

二ヶ處の鴨居で二度頭を衝突けて戸外へ出ると、二人の小兒は待つてゐた。人立ちは前よりか殖えて、乳呑兒を抱へた女も多勢ゐるが、其中に繼々の頭巾を被つた孩兒を抱へた瘦細の妻れた女があつた。此の軽々と抱かれてゐる血色の悪い兒は皺だらけの小つほけな顔に奇妙な微笑を漲らして、拘彎つた拇指を伸ばしたり縮めたりしてゐた。

此の笑ひ顔が病的だと解つたので、お伴に隨いて來た小兒に此女は何者だと訊くと、

『之が伯父さんに話したアニーシャさ、』と年當の小兒は云つた。』

ネフリユードフはアニーシャの方を向き、



『お前は怎うして暮してゐる？』

『怎うして暮すつて、お殿様、俺、お貰エをして村の衆の厄介になつてをりやすだ、』とアニー
シヤは、しくくと泣出した。

年寄のやうな顔をした孩兒は蚊の脛のやうな足を拘攀つて氣味の悪い笑ひ方をした。

ネフリユードフは紙入から十圓札を出してアニーシヤに與つた。で、二歩三歩も行くと、矢
張乳呑兒を抱いた最一人の女が追絶つてネフリユードフの袖を止めた。其跡から婆さん、又其
跡から若い女と、代るくりに取附いては貧乏咄をして施與を請求つたので、懷中に持つてゐるだ
けの小札で六十圓は盡く呉れて了つて、搔揉られるやうな氣持がしながら支配人の家に戻つた。
支配人は笑顔で迎へて、夕刻村の者が集會する由を話した。ネフリユードフは禮を陳べてか
ら、滿地に眞白な林檎の花の落ちた草原小徑を辿りつゝ今日遭逢はした事どもを熱々と考へな
がら直ぐ庭の方へ行つた。

初めは四邊が寂寞としてゐるが、忽ち支配人の住居の屋背で、二人の女が腹立聲で交み代り

に罵る間に何時でも輾然してゐる支配人の穏やかな聲が交るのが聞えた。

「俺イ力では此上既う怎うにもなりませんねエ。なんほだつてお前様ア、俺イ頭に釣るして十字架まで引奪らうとさつしやるのは、そりやハア餘まりてもんだんべエ。」

と一人の女は腹立聲で云つた。

「少とべエ牧場に入つたからつてお前様、獨結に取つて難かしく云ひなされる事アねエ。」と又一人の女は、「さア、牛を返して呉れさせエ。少とべエの事んで四足を辛めたり、何にも知らねエで牛の乳を欲しがる孩兒まで泣かす事あ無かんべエ。」

「夫だからよ、牛が荒したゞけの錢を出すとも、罰金代りの仕事をすると何方とも定めなさいと云ふのだ。」と云ふのが支配人の聲である。

ネフリユードフは庭から玄關の方へ行くと、髪を振亂した二人の女——其中の一人は妊娠して確かに臨月近い腹を抱へてる——が夢中になつて騒ぎ、玄關の段の上には和蘭木綿の衣服の衣兜に手を突込んで、支配人が立つてゐた。主人の顔を見ると女は口を絞んで、頭に捲いた手

巾を直し、支配人は衣兜から手を出して復た莞爾々々し初した。

事の起因は怎うである。支配人の云ふには、村の者共は兎角に事務所の牧場に牛や積を放して荒す弊があつて、今日も此の二人の家の飼牛が二匹牧場に徜徉してゐるのを見附けたから直ぐ追込んで捉まへて了つて、牛一頭に就き三十錢の要償或は二日の労働代償を要求してゐる處だと云ふ。處で、女の云ふには、牛の牧場へ入つたのは牛の勝手で、夫も唯の小口へ入り掛けたばかりだし、罰金は納めたくても持つてゐないから、若し勘辨出来ないなら後日に労働をして償ふまでも、左に右く朝から炎天に晒されて餓じがつて憐れッほく啼いてゐる牛を今直ぐ還して呉れと頼んでゐるのだ。

「夫だから度々口を酸くして、アレ程お前様に頼んで置いたぢやねエか、」と支配人は笑顔を作りつゝ左も證人になつて呉れと云ふやうにネフリユードフを振向いて、「夫だから正午、牛を伴れて歸る時に外れないやうに善く注意して呉れと云ふんぢやないか。」

「だがお前様、俺イ孩兒を見に鳥渡くらとツ走つた間に、牛めが勝手に逃出しやしたんで、俺

「知つた事ツちや有りましねエ。」

『牛を氣を付けろといふ時とツ走らなくてもだ。』

『そんだけお前様、誰が孩兒の世話をするだ。お前様には乳をやる事は出来なかんべエ。それもなア、全く牧場を荒したもんなら誰もクド／＼愚痴を覆す事はありましねエが、唯の鳥渡べエ入ッたばかりだアに。』

『鳥渡どころか散三に荒されて了ひました。』と支配人はネフリユードフに向つて、『でムいまずから、嚴しく罰金を取つてやりませんと、最後には草がなくなつて了ひます。』

『好エ加減にさツしやれ。俺イ許の牛は之まで一度だつて捕めエられた事アありましねエ。』と腹の大きな女は云つた。

『之までは捕らなくても今度は捕つたんだ。罰金を出すとも働くとも何方ともしなさい。』

『エエツ糞、働くべエ。牛は直ぐ還して呉れさツせエ。罪のねエ牛を饑じがらして置く事はねエだ。』と女は腹立紛れに聲を立て、泣出し、『あんたら困果だんべエ。夜も晝も休むつて暇は

無エ。阿母アは病んでるし、亭主は飲んだくれてるし、俺イ一人で家の事ア脊負つて立つてるだから何とも遣る瀬が無エだ。少とはお前様、察して呉れさツせエ。』

此話を聞くとネフリユードフは直ぐ支配人に命じて牛を還させて、夫から復た庭へ行つて同じ宿題を種々考へたが、此上既う考へるものはないのである。

何も彼も明かだ、極めて明白たるもんだ。如此な解り切つた理窟が何故誰にも解らないだらう。現在自分自身さへ之ほど明白な理窟を怎うして永い間氣が附かずにゐたらう。不思議でならぬ。彼等は常に瀕死の境涯に落ちてゐるから、死といふ事を何とも思はない。小兒の死亡増加とか、婦人の勞働過重とか、就中凡へての村民——殊に老人の營養不足が著るしくても、一向慣れ切つて了つて、更に其の恐ろしい事に氣が附かずに、平氣で何の苦情をも云はないし、我々の方でも矢張渠等の境涯を當然のやうに思つてゐる。畢竟渠等が此の貧乏のドン底に落ちた重なる原因は、彼等を養ふ唯一の土地が地主の爲めに奪はれて了つたからであるのは白日の如く明らかである。

小兒や老人が死ぬのは牛乳が無いからで、牛乳が無いのは取りも直さず牛に食はせる麥や草を作る牧場や地面が無いからであるのは火を睹るよりも明らかである。畢竟するに人民の悲惨を見る一番直接の一番大きな原因は、渠等を養ふ土地が渠等の手に屬さないで、土地の所有權を利して人民の勞働に由て徒手遊食するものゝ手に土地が屬してゐる爲めであるのは極めて明白であつた。農夫の身に取つては奪はれたら死んで了うと云ふほど大切な土地が地主の手に歸してゐるばかりに、農民達は地主が土地から取れる收穫物を外國へ賣つて杖とか帽子とか馬車とかブロンズとかいふ下らぬ贅澤物を買はうとする目的の爲めに農民達は精々と働いて飢餓に瀕してゐる。此關係は、例へば馬が飼はれてゐる埒内の草を悉く喰べ盡して了つたなら段々と瘦せ衰へて終には更に他郷に食を求めらるゝにあらざる限りは必ず飢ゑて了はなければならぬと同様である事が漸つと解つた。

誠に恐るべき事だ。此儘にして置くべき事では無い。何とかして改革すべき方法を案じなければならぬ。少くも這般な事に關係してはならない。『何とか工風をするのだ。』と樺の木の下

道を往つたり來たりしつゝ考へた。『學術社會や政府部内や又は新聞や著書では人民の貧乏の原因や其境遇を改善する方法を論ずるが、確かに渠等の窮困を軽減するに足る最も確實なる一法、即ち彼等が要するだけの土地を渠等に返還する事に就ては一言も云つてゐない。』

顯理ゼオルジの根本思想がネフリユードフの心中に生きくと浮んで來た。一度はドレほど此主義に感動したらうと思ふと、今忘れて了つてゐる事が不思議でならなかつた。『土地は何人の私利とする事は出來ない。水や空氣や日光と同様に賣買出來る性質のものではない。何人も土地の與ふる利益に對しては平等の權利を有してゐる。』クスマンスキー村で改革を行つた時、何となく心に耻づる氣持のしたのは今漸く思當つた。畢章自ら欺いてゐたので、人間は元來土地を私有する權利のないのを十分知りつゝも宛も權利があるやうな顔をして、心の底の底では何と理窟をつけても權利の無いのを承知しながら、當然の權利の一部を百姓共に呉れてやつた意でゐた。

最う這般な事をしてはゐられぬ。クスマンスキー村の土地處分法も最う一遍改革し直さなけ

ればならぬ。同じ地代を取るとしても、此地代を矢張農民の所得として租税其他の共産費用に向けさせやうといふ方案が新たに浮んで来た。勿論此方法として純粹の單稅制度ではないが、現在の状態の下に行はれ得べき方法としては之が一番近かつた。左に右く土地所有の權利によつて生ずる利益には最う決して浴しまいと云ふ考になつた。

家へ歸ると、支配人は一層笑顔を作つて迎へ、最う御食事を召上りませぬかと聞き、耳環を下けた小娘を對手に女房が拵へた手料理が出来過ぎなければ好いがと心配してゐた。

食卓には粗末な薄汚ないクロスを掛け、ナブキン代りの刺繡をした手拭が置いてあつた。柄の取れた古風な大きな羹汁鉢にはポテト・スープを盛つて、今朝娘の腹に抱へられて黒い足を出したり引込めたりしてゐた鶏が皮附の細切に刻まれてスープの實となつてゐた。スープの後は同じ鶏肉の炙肉で、其後が砂糖を澤山掛けた脂っこい乳餅であつた。此の御馳走では食慾を誘はれもしないので、何を口に入れても浮の空で、村から戻つた時の悲哀を束の間に一掃した土地處分の工風にばかり屈托してゐた。

支配人の女房は戸外から秘と覗いてゐた。耳飾を下けた娘は恐る／＼皿を運んで給仕をした。支配人は女房の料理の手際を自慢顔に愈々莞爾つてゐた。

食事が済んでからネフリユードフは支配人を漸つと席に就かして、愈々自分の考へを練上げてから後に人に打明けやうといふ意で、先づ支配人に全所有地を農夫に貸附ける胸中の計畫を精しく説明して、支配人の意見を求めた。支配人は宛も餘程以前から思付いてゐた考を人の口から聞きでもするやうに始終莞爾々々してゐたが、其實全で解らないのだ。勿論、解らない所以はネフリユードフの説明が尙だ十分判然してゐないばかりでなく、此計畫通りだと、ネフリユードフは他人の利益のために自分の利益を一切棄てる事になるからだ。誰でも人は自分の利益のみを計つて他人を損害するを、何とも思はない思想が根強く支配人の頭に根を張つてゐるから、有らゆる土地の收入を農夫の共有財産と仕やうと云ふネフリユードフの話が何の事やら一向理解めないのだ。

『さう致しますと、勿論閣下は此の共有財産の中から歩合をお取りになるのでせうナ？』と支

配人は莞爾々々しながら云つた。

『イヤ爾うでない。土地其物を盡く棄てて了はうといふのが解らんかネ？』

『でムいますと、土地の収入を一文もお取りにならないのですナ、』と支配人は最う莞爾つく處でなかつた。

『其通り全で捨てる意だ。』

支配人は痛く驚いて嘆息を吐いた。が、再び莞爾つき出した。やつと今理解めて来たのは、主人公確かに正氣で無い。夫なら夫で、此の土地を棄てるといふ主人の計畫に乗じて自分が儲ける事が出来るか知らんと自分に利益のありさうな見込を付けて見たが、所詮難かしさうなので青くなつて了ひ、最う笑うどころで無かつたが、矢張主人の意を迎へて機嫌を取る爲めに故と笑顔を作つてゐた。

ネフリユードフは逆も支配人には解らぬと見たので、部屋から渠を退けて後、小刀の痕だらけなのをインキで塗蔽した窓框へ凭れつゝ、自分の計畫案を紙へ書き初めた。

此時、日は若葉の翠滴たるばかりな菩提樹の蔭に落ち、蚊はネフリユードフを螫さうとして群がつて来た。丁度計畫案を書了つた時、牛の鳴聲や門の扉の轆る音が村方から聞え、今宵の招集に應ずる農夫達がワイ／＼罵り叫きながら集まる聲もチラホラ聞え出した。ネフリユードフは前以て支配人に命じて、農民共に故／＼事務所へ来ないでも此方から村へ出向いて會はうと云ひ置いたので、支配人が薦めた茶を急いで済ましてから村へと出掛けた。

第七回

此の人聲村長の家の前に集つた農民共の群から聞えたのだ。ネフリユードフが来ると同時にヒツソリ静まり返つて、クスミンスキーの村民と同様に帽子を脱つて慇懃に會釋した。一見して此村の者はクスミンスキー村よりは一層貧乏してゐるのが直ぐ解つた。何れも木の皮の靴に手織木綿の衣服を著し、中には徒跣の襦衣一枚きりで、田圃から直ぐに來たらしいのもあつた。ネフリユードフは眞剣になつた。で、所有地全體を悉く農民達に分配して了はうといふ胸中

の計畫を語り初めた。が、農民達は一同無言で、誰一人何とも云ふものはなく、一向變つた表情すら顔に見えなかつた。

『私は恚う思つてるのだ、』とネフリユードフは面を赤くして、『人間は誰でも土地を使用する権利を持つてるものだと思つてゐる。』

『其通りだとも。夫に違エねエサ。』と云ふ聲がチラホラ聞えた。

ネフリユードフは諄々と口を酸くして、土地からの収入は一切平等に渠等の間に分配されべき事、夫故に全所有地の権利を渠等の團體に引渡すと共に渠等は協定したる地代を約束して各自の必要に應ずるだけの地面を分借する事、是等の地代は村有財産として各々平等に利益に釣當すべき事を一々話して聞かした。感服したり賛成したりする聲がチラホラ聞えないではないが、併し農民共の難かしい面は愈々難かしくなつて、申合はしたやうに今迄ネフリユードフを凝視めた眼を下けたは、這般な見え透いた甘口の欺瞞に乗せられるものかといふ心持を露はに知らして、ネフリユードフに羞耻のわるい思ひをさせるにも思ひなかつたからであらう。

ネフリユードフは一々委しく明白に話した。農民達も此の明白な話が解らない程に愚鈍ではなかつたが、併し支配人が容易に理解めなかつたと同じ理窟で矢張理解めなかつた。

渠等は人間が自分一箇の利益のみを計るは誰でも當然であると固く信じ切つてゐた。數百年來の経験で地主の利益は即ち農民の損害である事を深く證認してゐた。夫故、地主が用事があつて農民共を呼寄せると云へば、復た惡智恵を出して農民共から搾り取る爲めの新しい文句を付けるのだと直ぐ定めて了う。

『扱てそこで地代を何の位に定めたもんだらう、』とネフリユードフは訊いた。

『俺らが地代を定める譯はなかんべエ。お前様の地面ならお前様が勝手に地代を定めたら宜かんべエ』と多勢の中から云ふ者があつた。

『イヤ爾うでない。お前達の共産資本を作る爲めの地代だから、お前達が定めんけりやならん。』

『其様な事ア出来ましねエ。共産は共産、地代は地代、別物でがんす。』

『お前達には解らんのだナ、』とネフリユードフに隨いて來た支配人は、『公爵閣下の仰しやる

のは、相當の地代を定めてお前達に土地を貸付け、其地代を村有財産として再びお前達に下さるといふお思召なのだ。』

『能く解りやしたよ、』と一癖ありけな齒の抜けた老爺は眼を釣上げて、『銀行のやうなものでがんせう。それで俺らア拂込の日を定めて追々に金を出す譯でがんせう。俺らア先ア御免を蒙るべエ。其様なものは要りましねエや。普通でせエが随分難儀べエしてる處へ、此上絞られて怎うするべエ。』

『さうとも、爾うとも、汝の云ふ通り其様な物が出来られて堪るもんけえ。俺らア以前通りで結構でがんす。』とブツクサ云ふものがあつた。中には聲を厲らけるものもあつた。

で、愈々約定書を交換して記名調印しやうとネフリユードフが發言すと、俄に反抗心が強くなつて、

『何だつて、印を捺して怎うするだ。俺らア無學文盲で働いてせえりや宜えだから、其様な事は知りましねえや。』

『駄目だ、駄目だ。其様な聞いた事も無え話は眞平御免を蒙るべえ。今迄通りにして置かつせえ。尤も種だけは地主負擔にしてお貰ふ申し度もんだ。』

と云ふは是迄の習慣では、種は矢張農民負擔であつたから、更めて地主に供給して貰ひたいといふのである。

『夫ではお前達は土地を貰うのは嫌だと云ふのだな、』とネフリユードフは中年の快活な面つきの跣足の百姓に向つて訊いた。此男は襦袢々々の衣服を着てるが、眞直ぐに轟然と立つた破れ帽子を左の手に持つ容子は丁度兵士が脱帽を命ぜられた時の姿勢そっくりであつた。

『如何にも！』と此男はキツバリ答へた。之まで永らく兵役に服してゐたので、軍隊氣質が尙だ抜け切れないのだ。

『ではお前達は十分土地を持つてると云ふのかネ？』

『いんにや、持つてはるません、』と兵士上り此の男は故と愉快らしい顔をして左も人にでも捧げるやうに恭やく破れ帽子を前へ突き出した。

『そんなら左に右く私の云つた事を猶ほ能く考へて見るんだネ。』と、ネフリユードフは如何にも不思議で堪らなかつたので、復た同じ事を繰返して聞かした。

『考へる事はありましねえ。今も言つた通り俺らア今迄通りて結構でがんす。』と一と辯ありけな齒の抜けた老爺は云つた。

『左に右く私は明日一日滞在するから、お前達の了簡が變つたなら云つて來なさい。』

農民達は何とも答へなかつた。

こんな鹽梅で、ネフリードフは此會見に何の結果をも得なかつた。

『手前が口を利きまして、』と家へ歸ると支配人はネフリユードフに向つて、『逆も彼の百姓達とは御相談の纏まりつこはありません。實に頑固と云つたら、唯今の集まりでも渠等は一つ事ばかりに剛情を張つて、楯扨でも動きません。夫がといふと何でも彼でも恐がつるのでムいます。尤も此中には可成道理の解る奴もをりますので、あの頻りと不服を云ひました白髮の老爺や色の黒い奴ですナ、彼等は中々解つてます。事務所へ呼付けて茶でも飲みながらお話し

なすつたら却て能く解りませう。沈着いて話をする中々巧い事を云ひまして外交官跣足でムいます……』と笑ひながら、『處が其の伶俐な男が多勢の中へ入ると、全で人間が變つて了つて解らなくなります。同じ事ばかり繰返してゐます。』

『夫では其の道理の解る男を味寄せる事は出来まいかな、』とネフリユードフは云つた。『すれば最う一度、嚙んで含めるやうに話して聞かせやう。』

『夫は雜作もない事つてす。』

『では明日呼んで貰はう。』

『長まりました、』と支配人は愈々莞爾々と笑ひながら、『明日呼寄せませう。』

『だが能く聞いて見さつせえ。悪謀ノウする人らしく無えが、』と髮毛の眞黒な鬘の薙した男は、肥つた牝馬に跨つて千鳥足に徐々と練りつゝ、同じやうに馬を聯べて行く襤褸衣服の男に向つて云つた。此二人は毎晩村の馬車を伴れて道傍の草を飼ひに、或は内々で地主の山林の中へ

作れ込むのである。

『印を擦いたばかりで無償で地面を呉れるなんて、今まで何度も乗せられた手だよ。誰だつて最う欺されねえだ。此方とらだつて少とべえ脳味噌があるだ、』と云ひつゝ横道へ外れた馬の子を呼留めやうとし、馬を止めて周囲を見廻したが、馬の子は怎うしても戻つて来ないで牧場へ紛らしかつた。

『土耳其の駒の畜生、復た地主の牧場へずらかりやアがつた、』と頭髮の眞黒なモヂヤク鬚の男が云ふ時、駒は嘶きながら草の香のする牧場を蹂躞らして行き、酸模の莖の折れる音がした。『あの音を聞かかせえ。休日の時に若え女子をやつて抜かして了うべえ、』と瘦せこけた襦袢衣の男は云つた。『でねえと、俺らあ鎌の刃が鈍つて了うだ。』

『印を擦つて云つたが、』と髭髯の男は地主の計畫を批評しつゝ、『迂闊り印べえ擦いたら事だ。生きながら鴉呑にされて了うべえ。』

『爾うとも、其通りよ、』と年上の男は答へた。

二人は夫切り黙つて了つて、道傍を蹴付ける馬の蹄の音だけが聞えた。

第八回

ネフリユードフが歸つて見ると、事務所の自分の室に寢所の仕度が出来てゐた。高い寢臺の上に羽蒲團を敷き、大きな枕を二つ添え、頗る立派な眞紅の絹の大夜具が掛けてあつた。儘に之は支配人の妻の嫁入道具の一つに違ひない。

聽て支配人は午餐の残骸を持つて来て薦めたが、ネフリユードフは一と箸も著けなかつたので、只管忍入つて饗應の甚だ行届かないのを詫まつてから己が住居へと歸つた。

ネフリユードフは農民共が自分の相談に應じないのを夫程心苦しく思はなかつた。却てクスマンスキー村で容易く承知されたり感謝されたりしたよりも、此村で疑心を以て迎へられるどころか、殆んど仇敵のやうに見られて一も二もなく桃付けられた方を寧ろ心持快く思つた。

餘り清潔でない此事務所の内部が頗る詩陶しかつたので、ネフリユードフは氣晴らしに戶外

へ出て庭の方を運動しやうとした。が、偶つと彼の晩の事を憶出し、女中部屋の窓や横手の入口やを思ふと不愉快になつて罪惡の記憶に汚される場所を通る氣になれなかつた。で、戸口の段に膠打掛け、樺の若葉の香のする温かい空気を呼吸しながら暫らく休息して薄暗い庭の方を凝視め、水車の音やナイチンゲールの聲やツイ近くの木叢で眠さうに啼く鳥の聲に耳を澄ましてゐた。支配人の部屋の窓の燈火は消え、物置小屋の背ろに當つて東の力から月が昇り初め、電光が折々閃いて荒れ果てた家から爛漫と々の咲亂れた鬱葱たる庭を照らした。遙かの彼方から聽て遠雷の聲が聞えて、黒雲が空の三分一ほども擴がると、ナイチンゲールを初め其他の小鳥は皆鳴止んで了ひ、水車の水の咽ぶ音の中に折々鶯鳥がクワツクワツと鳴くのが聞えた。其内に支配人の廣庭や村の百姓家で平生よりも早く一番鶏が鳴いた。蒸し／＼する雷の夜に鶏の早鳴するのは一向珍しくないが、鶏が早く鳴いた夜は楽しいといふ下世話通りに、此晩はネフリュードフは楽しいどころか實に愉快極まる幸福な夜であつた。と云ふは昔し無邪氣な青年として爰に逗留した時の楽しい夏の感じを更に新たに憶起し、徐ろに昔に逆つて一生を通じての

一番幸ひであつた其時分の自分に戻つたやうな心持がしたからで。十四の時に眞珠を示し給へと神に神は祈つた事や、兒供の時分何かのわけで母と別れる時母の膝に泣いて生涯善人となつて決して母に心配を掛けまいと誓つた事などを營憶出したばかりでなく、眞に其時に感じたやうに感じた。又或時朋友のイルターニエフと二人で互に助け合つて純善の生活を送り人をも身をも幸ひならしめやうと決心した時のやうな感じをヒシ／＼と感じた。

偶つとクスミンスキー村に泊つた晩、怎ういふ仔細だが氣がぐれ出して、一端捨てやうとした家や林や田地や地面が急に復た惜しくなつた事を憶出し、今でも尙だ惜しいかと自分で自分に訊いて見ると、怎うして彼の晩は那樣な惜しくなつたらう乎と不思議でならなかつた。夫から今日見た様々な事を憶出した。稼人の亭主が地主即ち斯くいふ自分の山林の木を伐つた罰で入牢した爲めに乳子を抱へて乞丐する女や、己れ達の分際では主筋の男の翫弄となるのを當然の義務のやうに思つてゐる、或は思ふやうに話してゐる怪しからぬ了簡のマトリヨナや、生れた子は平氣で育兒院に送つて了うものと定めてゐる事や、營養不足で死に垂つてゐる瘦せ細け

た氣味の悪い笑方をする繼ぎくの頭巾の孤兒や、臨月の身體で亭主の爲めに精々と稼ぎ、忙がしいのに氣を取られてツイ腹の空つた牛が地主の牧場に紛れ込んだのを知らずにゐた女の事や、何や彼やを順々に憶出した。すると忽ち又、監獄や剝落ちた坊主頭や薄暗い檻房や鼻持ならぬ臭氣や重いガラ／＼した鐵鎖が歴然と心に浮んで來た。夫と並行して一方の金のあるに任せ、て馬鹿々々しい所爲をする連中斯くいふ自分ネフリユードも其一人である贅澤な都會生活が一緒に憶出された。

此時、満月近い月は高く物置小屋の上に昇つて黒い陰を地に印し、荒れ寂びた母家の鐵賣の屋根は反射してキラ／＼と輝り、ナイチンゲールは月の光の氷えたに浮れて復た玉の音を轉がし始めた。

偶つと又、クスミンスキー村で愈々實行しやうと決心した時に通を徜徉しながら自分の生活を左さま右さま考へ初めた事を憶出した、怎うして那樣も思ひ惱んで決心が定まらなかつたらう乎、怎うして出る疑問も出る疑問も種々な困難を來したであらう乎。今となつて考へて見れ

ば此の大困難の疑餘り單純なのに呆れて了つた。今考へる通りに考へれば何でもない、本と／＼自分の爲めの結果が怎うあらうと考へるに及ばないので、唯自分が爲すべき筈の事を行へば夫で宜いのである。且不思議な自分の爲めにすべき筈の事は決心出来なかつたが、他人の爲めにすべき筈の事は確實に解つてゐたのだ。例へば土地を私有するは不善なるが故に悉く擲つて農民に分與しなければならぬ事は確かに知つてゐた。又カチューシャを捨てゝはならぬ、何處までも救出して罪を贖はなければならぬ事は確かに知つてゐた。又他の人々と自分とは全く意見を異にする如く思はれる裁判及び刑罰に關する疑問は一々研究考査して解釋せねばならぬ事は確に知つてゐた。けれども是等の苦辛をした結果が怎なるものかは一向解らなかつたが、結果が怎うあらうとも自分が爲すべき筈の事だけは是非とも爲なければならぬといふ事は確實に解つてゐて、此の確たる覺悟が定つたので歡喜に堪へなかつた。

いつを黒雲は一面に漲つて、電光は射るやうに閃き、廣庭から玄關の破れかゝつた古家を照らし、雷は頭の上で破き出した。鳥は皆啼止んで了ひ、木の葉はザワ／＼として風は昇段に腰

掛けてるネフリユードフの髪の毛を弄つた。すると、忽ち雨がボタツと落ちたかと思ふと復たボタツと落ち、次第に強くなつて辛の葉や鐵力の屋根を亂打し、電光は眞黒な空を縦横して絶間なく空を照らし、雷鳴が三度破いたかと思ふと後は間斷なしにゴロ／＼と頭の上を急轉した。ネフリユードフは家の中に逃込んだ。で、

『夫だ、夫だ。』と心中に繰返した。『我々の一生に行ふもの、其事の全局、其意味は凡智の知る處でもなく、知り能ふものでも無い。伯母達は何の爲めに生存したか、イルチーニフは何故死んだか、何故又自分は生きてゐるか、カチーシャは何をしてゐるか、怎うして自分は心得違ひをしたか、何故戦争が起つたか、何故あれからのちは不規律な墮落生活を送つたか。是等は皆神の攝理であるゆゑ濫りに忖度するは我が力の及ばぬ事だ。が、我が良心に刻ま、た神のお思召を行ふだけなら我が力で出来もするし、又行はねばならぬのは確かに解つてをる。且之を行ふて初めて安心立命を得られる。』

雨は篠を突くやうにざんざ降りして、檐から流れる水は瀧のやうに天水桶に落込んだ。雷光は段々と途切れ／＼になつた。ネフリユードフは部屋に引込んで、衣服を脱いで横になつた。汚ない壁紙の破れてゐるのが忙と紛らはしくて沈着かれなかつた。

『は、フ、主人のやうな氣がしないで下男のやうな心持がする、』と考へつゝ、這般な氣になつたのを獨りで喜んだ。

ネフリユードフが心配したのは萬更理窟が無いでもなく、燈火を消すや否、忽ち蚤がムズムズと仕出した。

『土地を捨て、西比利亚へ行けば、蚤と蛇と塵埃だ！ 何の之しきの事が。辛抱しなければならぬものなら辛抱出来なくて怎うする、』と潔氣にも力んで見たが、矢張辛抱が出来ないで床から離れて窓に行き、雨雲の次第に走つて雲間から洩れる月の再び鮮かなのを餘念なく瞻めた。

第九回

拂曉近く漸つと就眠したので、此朝は非常な朝寝をした。

正午頃支配人から招かれた七人の農民總代は果物園に集會して、豫て支配人が林檎の木蔭に据付けた卓子とベンチ——大地に杭を打込んで其上に板を渡して作つたベンチの周圍に集つた何れも頑固に畏まつてゐて、帽子の儘に寛ろいで著座させるまでには中々時間が要つた。

取別けて剛情に言ふ事を諾かないのは例の軍人上りの男で、此日は木の皮の靴を穿き、葬式の時の陸軍禮式通りに帽子を手に持つて直立してゐた。ミケランジェロのモセスのやうな胡麻鬚を縮らし、銅色の禿けた前額に縮れ髪を垂らした、肩幅の廣い押出しの立派な親仁が一番の年長らしく、大きな帽子を被つて、新らしき手織の上衣を身體に捲き付けてゐたが、束々として來て、卓子の背ろへ廻つて腰掛に座ると、他の連中も忽ち此年長者の例に依つて盡く著席して了つた。

ネフリユードフは卓子を共に一同と相對つて、前夜認めた自分の計畫草按を卓子に伸べて諄々と説明仕始した。

此日は參會者が少なかつた爲が、それとも自分の利益を捨て、一圖の計畫の實行をのみ思詰めてゐた爲か、少しもドギマギと狼狽くやうな事はなかつた。で、何の氣なしに例のミケランジェロのモセス然たる髯を生やした親仁に向つて話し掛け、誰よりも一見踏張りのあらるらしい此年長者の贊成又は反對を望んでゐた。處が、此の押出しの立派な御大層臭い親仁が一々著實らしく頷いて聞いてゐたのは、其實は一向解らなかつたので、偶さか解つた時や或は他の者が更に細かに碎いて説明して聞かせた時は首を掉つて濫い顔をした。隣席の南京更紗の襪はぎの上衣に古靴を穿いてる脊の矮い鬚の無い眇眼の爺さんは、竈職人であるが、モセス鬚の親仁よりか少しは解るやうで、始終眉毛をビク／＼動かして一心にネフリユードフの説明を聞いては一々仲間に解るやうな言葉に云替へて聞かしてゐた。最一人の骨格の頑丈な白い鬚の伶俐さうな眼付きの爺さんは非常に理解が早く、巧く機會を攫まへては誇り顔に皮肉を云つたり冷かしたりした。兵隊上りの男も矢張理窟の解る方だつたが、永らくの軍隊生活に頭を馬鹿にされた上にタワイもない軍人の言葉を聞慣れてゐたから半分は理解めなかつた。一番一生懸命に聞いているのは脊の高い、髯の少ない、長い鼻の、太い聲の男で、小ざつぱりした手織の衣服に新

らしい木の皮の靴を穿いてゐた。此男は何も彼も能く解つて肝腎の時だけ口を利いた。残る二人の爺さん——即ち昨日の集合に一々ネフリユードフに喰つて掛つた男も、瘦馬を木綿の細い布で巻付けた親切さうな容貌の色の白い脊高の跛のも一心に耳を引立て、聞いてゐるが、餘り口を利かなかつた。

ネフリユードフは先づ第一に土地私有に就ての自分の意見を陳べ立てた。

『私の考だと、土地と云ふものは賣つたり買つたり出来ない筈のもんだ。ないと金のあるものは土地を買占めて、其土地を使用するものから好き勝手の利益を貰ふ事が出来る。』

『眞實でがんす、』と長い鼻の爺さんは太い濯聲を上げた。

『其通りであります。』と兵士上りの男は云つた。

『村の女が牛に喰はせベエ思つて少つとベエ草を取つたら藪エ目に會ふ。直ぐ捕まつて牢に打込まれるだ。』と白い鬚の男は云つた。

『俺らアところは五里も離れてやすが、地面を借りてエにも地代を上げて了つたから拂エ切れま

しねエ、』と片意地な齒抜けの爺さんは、『何の事アねエ、俺らア縛りつけられて手も足も出ねエ。奴隸時分よりか始末が悪いだ。』

『私はお前達と同じ考で土地を私有するを罪惡の一つと思つてる。夫だから地面を棄て、了ひたいのだ。』

『夫りやア結構な事でがんす、』とモセス鬚の親仁はネフリユードフの云ふのは土地を貸付ける事だと早合點して了つた。

『乃で私は一日も土地を私有する氣がしなから盡くお前達に與つて了ふ意で態々來たのだが、怎ういふ風に分配するのが一番宜からうか、一同で考へて見にやならん。』

『怎うも怎うもありましねエ。俺らア百姓にソツクリ呉れて了つたら宜かんベエ、』と片意地な齒抜けの爺さんは一も二もなく云退けた。

ネフリユードフはハツと思つた。微塵も虚偽の無い自分の此の正直な計畫が猶だ此通りに疑られてるか、只管誠心が足りないのを耻入つたが、再び思返して心を取直しつ、『無論喜んで

お前達に與つて了うのだが、扱て誰に與つたもんだらう、怎ういふ風に與つたら宜からう、何の村の者に與つたもんだらう——といふと難かしい。お前達の村ばかりに與つて、隣村のデイオモンスク村へは與らないでも宜いか？ そこらを一應相談しないとナ。」

一同は沈黙となつた。兵隊上りの男だけが、『其通りであります』と云つたぎりだ。

『乃で又お前達は、若し私から土地を請取つたとしたら、怎ういふ風に各自に分配するか聞きたいものだ。』

『怎ういふ風ツて依率の無エやうに平らに分ける外無かんベエ、』と竈職人は云つた。

『爾うとも、お前様、爾うする外無かんベエ。一人々々に各自に分けるだネ、』と白木綿の布を足に巻きつけた親切さうな跛の爺さんに云つた。

一同は此平等分配説に賛成して何れも最公平の最良手段と考へるらしかつた。

『だが、一人々々に分配するとなると、』とネフリユードフは、『夫だと人の家に雇はれてる傭人共も矢張り分配に與かる譯だナ。』

『イヤ、爾うで無エだよ、』と兵士上りの男は磊落に威勢よく反對した。けれども一番理屈の解つた春高男、其説に一致しないで、

『公平に分配する云ふたら、傭人だらうが何だらうが關ふ事はねエだ、平等に偏頗の無エやうに分配せざアなんねエだ。』と太い聲で云つた。

『夫りや不可ん、』とネフリユードフは怎ういふ意見の出るのを豫期してゐたので『若し誰にでも彼にでも平等に分けるとしたなら、中には必ず働かない奴、自分で鋤鉞を持つのを好まない奴が出来て、折角分けて貰つたものを直ぐ金の有る奴に賣つて了うに違ひない。すれば平等に分けてやつたのが直ぐ再た不平等になつて、土地は次第に金持の手に入つて、勤勉に働く農民達は人口が殖えるに従つて土地が不足し、金の有る奴の所有地が益々殖えて来る。夫では私の志にと啖く。お前達も詰らぬだらう。』

『其通りであります、』と兵士上りの男は云つた。

『地面を賣る事を法度にするだネ。自分で鋤鉞持つて働く奴だけに分配するだネ、』と竈職人

は昂然として云つた。

此意見に對してはネフリユードフは、誰が一生懸命に稼ぐか、誰が怠け出して土地を賣つて了うかを今日鑑別めるは到底出来ない相談であると云つた。

一番理屈の解る脊高男は、彼等村民は共同一致して土地を耕やし、自分で鋤鉞を持つ者ばかりに收穫を分配して、鋤鉞を持たないものには決して與へまいと主張し、『鋤鉞を持たねえやうな野郎には麥一と握みだつて與る其ア出来まいしねエだ、』と太い聲で斷乎と云つた。

此の共産的の意見に對してもネフリユードフは矢張待構へてゐた。若し此制度を取るとしたら、村民は各自必ず鋤鉞を持たなければならず、各自の耕馬も同數でなければならず、結局農具牛馬一切總てを共有としなければならぬが、夫には村民が心から一致しなければならぬと云つた。

『そりやア無理だんべエ。人間は血の通つてゐる内は各自の了簡ちうものがあるから、心から一致させべエたつて無理でがんせう、』と齒の抜けた男は云つた。

『喧嘩ばかりするだんべエ、』と白い髯の爺さんは莞爾々々しながら云つた。

『夫から土性の事だが、』とネフリユードフは更に進んで、『一人が肥えた地面を取つて、他のものが粘土や砂ばかりの下等地面を強付けられるといふ理由は無からう。』

『そんなら細かく割つて各自に振分けたら怨みツこは無かんべエ、』と竈職人は云つた。

ネフリユードフは此の地味不平均は區々一村の問題としないで、數村に渡つて考へねばならぬ事だと答へた。若し農民共の勝手に任したなら、必ず或者は上地を占めて他のものは瘠土を當てがはれる不公平を生じるだらう。誰だつても良い地面を欲しがらうのだ。』

『左様であります、』と兵士上りの男は云つた。

一同は皆黙してゐた。

『夫故此問題は皮相から考へるやうに簡單でない。我々ばかりでなく、多くの人が種々考へたのだ。顯理ゼオルジと云ふ亞米利加の人が矢張色色と研究したが、此人の説に私は大體同意である。其説に由る……』

『えエとお殿様エ。お前様は地主様ぢやムラッしやらねエか、』と片意地の齒の抜けた爺さんは、『お前様の地面ならお前様の自由勝手に處分をつけたら宜かんべエ。あじを躊躇してムラッしやる。お前様の勝手ぢやなかんべエか。』と膠もなく言卷つた。

ネフリユードフも有繋に勃然としたが、併し此の餘計な挿出口に不快を感じたのは自分一人でないので見て窃に安んじた。

『シモン伯父、氣短かな事べエ云ふもんで無エ。お殿様の講釋さア能ウク聞いてから後で云はつしやい、』と理窟の能く解る男は太い聲で云つた。

ネフリユードフは此言葉に氣乗が出て、追々に顯理ゼオルジの單稅主義を説明しやうとして『此地球上の地面は悉く神のもので人間のものではない。』と云ひ出した。

『如何にも、其通りぢや。』と云ふ二三人の聲がした。

『土地は何人にも共有のものである。何人も同一の權利を持つてをる。處が土地には肥えたのも瘠せたのもあつて、誰だつても悪い土地よりは良い土地を欲しがるのは當然だから、同じ面

積を分けただけでは地味の上から云ふと不公平を免れない。夫故、怎ういふ風に分けたが最も公平だらう乎。處で爰に一法がある。即ち上等の地面を使用するものは使用し得ないものに對して上地使用の價を拂う事にする、』と段々と説明の歩を進め、『然るに之が中々厄介だと云ふは、地主がないのだから、誰が此價を定め、誰が誰に拂つて宜いやら解らぬ。そこで何處の村でも村費に金が要るから、上等の地面を使用するものは此村費を多く負擔する事にするのだ。即ち上等地なら多く、下等地なら少なく、夫々所有地面の地味に應じて村費を分擔する事とすれば、誰も彼も怨みツこなく公平になる。夫から全く土地を使用しないものは何にも拂はなくても宜いので、唯土地を使用するものだけが租稅を拂ひ村費を辨するのだ。』

『そりや理窟だ、』と竈職人は眉を動かして、『宜エ地面を作る奴が村費を餘計出すだネ。』

『ゼオルジちふ和郎は面白エ頭を持つてるだノウ、』と縮れ髪の年長の親仁は云つた。

『だが、其の村費だノウ、俺らア力で拂へるくれエのもんなら宜エがノウ、』と春高男は之からドンな計畫が持出されるか計りかねて太い聲で云つた。

『夫だ、』とネフリユードフは更に説明を續けた。『無論村費の負擔は高過ぎて不可んが、と云つて廉過ぎては矢張不可ん。何政なら高過ぎれば自然拂へなくなる。損になる。安過ぎれば所有權が賣買される。地面の賣買で儲ける奴が出来る。夫だから其處を一つお前達と篤と協議したいのだ。』

『成程お殿様の云はッしやる通りだ。其通りに違エねエだ。如何にも道理だ、』と農民共は漸つと十分に合點めたので本氣になつた。

『ゼオルジちう和郎は豪エもんだノウ、』と肩幅の廣い年長の親仁は云つた。『彼の和郎の云つた事を能く考エて見させエ。』

『處で愈々爾ういふ段取なら、』と今まで黙つてゐた支配人は微笑を含みながら、『此方も地面を欲しくなつたが、怎んなものだらう。』

『餘剰の土地が有つたらお前の所有にして耕やすが宜からう、』とネフリユードフは云つた。

『お前様は大エと地面を持つてなさるべエが、尙だ欲の皮を突張らす了簡であらッしやるか、』

と白い髯の爺さんは呵々と笑つた。

之で先づ相談は終つた。

ネフリユードフは繰返し自分の意見を反覆して、決して即答を要しないから十分勘考し、善く相談した上で結果を知らして呉れと云つた。

農民達は村方へ歸つて十分相談してから挨拶をする事とし、各自暇乞をして非常に興奮した體で歸つた。暫らくは家路を指して行く渠等の濁みた高聲がいつまでも聞えてた。夜に入つても人聲が村を流れる川水に傳つて聞えた。

其翌日農夫は田圃へ行かずに、領主の持出した相談を一同首を鳩めて商議した。村方は二派に別れて、一方は此相談を何の危険も無い利益あるものと認めて承諾しやうとし、一方は尙だ十分に合點めないで、何だか危ツかしいやうに思つてゐた。が、三日に到頭相談が纏まつてネフリユードフの持出した條件を承知する事に定め、其結果を傳へる爲めの總代を送る事となつた。慥ういふ風に首尾よく相談が纏つたのは、或る老婆がネフリユードフの人物は決して人を欺

くやうな心配はないと云つたのが効いたので、殿は近頃自分の靈の問題に就て思ひ惱んで罪亡ほしの善根を施こさうとしてゐる、バノーヴォ村へ来る早々莫大な金を貧乏人に施こしたのが何よりも證據だと云つた。尤も是迄貧乏人と顔と顔とを衝合はした事が無く、あアいふ開放しの露出しの百姓生活を初めて見たんだから驚して、元來慈善其物を道理あるものとは決して認めなかつたが、目のあたりに此の慘澹極まつた貧乏生活を見ては、左も右も金を施こさずにはゐられなかつたのである。加之ならず、クスミンスキー村で一年前に手離した山林の代として莫大な金を請取つて来た上に、若干の動産を賣拂つて手許が頗る豊かであつてから、何かにつけて過分の金を振卷きたかつたのである。で、金を恵む噂が八方に擴がると、女を重にして此界限の貧乏人共が我勝にお慈悲を戴きを集つて来た。怎ういふ風に與つて宜いものやら、どのくらゐ與つて宜いやら、誰に與つて宜いやらと解らなかつたが、現在赤貧洗ふが如き氣の毒な生活を見て、澤山持つてる金を與らずに知らぬ顔する事は出来なかつた。乞はるれば乞はれる儘に濫りに施こすは決して賢くないと思つてゐても。

愈々今日を限りと云ふ日に伯母の家に残した品を改めやうとして、眞鍮の獅子頭に環の附いてるマホガニーの衣裳篋の抽出しを開けると、其中から澤山の手紙殼に交つて二人の伯母と書生時代の自分と尙だ無邪氣い可憐な牙えくしたカチューシャと、一緒に影つた寫眞が出て来た。此寫眞と文殼だけを抜いて残餘は、一切の道具ぐるみに此家を實際の相場の唯つた十分一で、支配人の肝煎で水車業の男に賣つて了つた。

怎う考へても不思議でならんのは、クスミンスキー村に泊つた晩、自分の財産の失くなるのが急に惜しくなつた心持である。今では何の氣もしないどころか、身の累ひの失くなつたで爽然として、丁度遠征家が新しい土地を發見け出した時に起りさうな今までに覺えない清々しい感情がした。

第十回

田舎から歸つて來ると市中の景色が全て今迄と變つて見えた。夕方點燈後に停車場に著き、

馬車で直ぐ家に戻つて来た時は座敷中が尙だナフタリンの香ひだらけであつた。アグラフキョーナもコルネーも二人とも草臥れ切つて互に妙な顔をしてゐたは、一年に一週引摺出しては紐に釣るして空気に曝し、夫から再た來年の蟲干まで藏つて置くより外役に立ちさうもない品物の整理方で喧嘩をしたらしい。

ネフリユードフの居間は空虚であつたが、其辯尙だ整理してゐないので、入口が箱で塞つてゐた。ネフリユードフの歸つたのが情力的に愚圖愚圖行つてゐる仕事の邪覽になるのが見えてゐた。田舎の農民の悲惨な状を見ては迎も馬鹿々々しくして這般な下らぬ仕事に關つてはゐられぬから、翌日は下宿に移轉さうと決心し、後々の始末は妹が來て萬事の處置を附ける迄は從來通りに一切アグラフキョーナの隨意に委す事にした。

で、翌日は早くから家を出て、監獄に極近い場所に極質素な餘り清潔でない座敷を二日間借りて、毎日必要な道具を下宿へ運ぶやうに家人に命じて置いてから復た出直して辯護士を訪ねた。

戸外は中々寒かつた。春には能く有勝ちな時候の激變で、風雨後は急に寒くなつて、薄い外套ではツク／＼して堪へられないから、早足にセッセと歩いて汗を流さうとした。

が、心は尙だ田舎の記憶で充滿で、百姓の女や兒供や爺さんや、生れて初めて見た貧乏世帯や、取別けて小さな細っこい折れさうな足を伸ばしたり縮めたりしつゝ變な顔して陰氣臭く笑ふ孩兒の年寄面が眼に仄つき、眼前の市中の人間と比べて見やうとして、肉屋や肴屋や呉服屋の店前を一々覗込んで見ると何處の店の者でも小肥りに垢抜がして、迎も田舎の百姓には見られない血色をしてゐるので、今更のやうに喫驚した。怎ういふ人間は何れもお客が品物に眼のないのを幸ひに欺かす工風に骨を折るのを商賣上、無用どころか、一番の肝腎要めの仕事であると思つてゐるのだ。幅の広いヒツブ(コートの腰部に垂れたる後ろをいふ)の垂れた二行鈕の服を着た駈者や、金筋入の帽子を被つた玄關番や、前髪を縮らして前垂掛の炊婦や、別して辻馬車の中に足踏伸ばして後反りながら人を馬鹿にするやうな目付をして一々通行人を目送る、頸元を綺麗に刺付けた辻馬車駈者や、怎う云ふ連中は悉皆能く肥つてゐた。

尤も此中には耕地不足のため據ろなく都會に飛出して來た田舎者も確かに有るには有る。又
 恠ういふ田舎者の中には、巧い儲け口を捜し出して故郷の地主に負けない生計をして面白笑止
 しく暮してゐるものもあるだらうが、中には運悪く愈々落魄して、田舎に在た時よりも一層悲
 慘な氣の毒な境涯に落ちたものもあらう。

現に渠の下宿する家の最下層に眞黒になつて靴繕ひの如き、又石鹼臭い湯氣の籠つて洗
 濯屋の窓で腕まくりをして熨斗を掛けてる瘦細ちの火の付くやうな髪をしてゐる洗濯女の如き
 又前垂や素足をペンキだらけにして眩の上まで捲り上げた湯紙色の瘦腕でペンキ桶を下けなが
 ら互に罵り合つてゐる二人のペンキ屋の如き、皆此の落魄れ連で、何れも一癖ありけな險相な
 面構へをしてゐた。又荷車をガタクリさせながら行く土方や、辻々に立つて物を乞してゐる襤褸
 々々の汚ない男や女は皆同じ相の面つきをしてゐた。

恠ういふ質の面構が又、只ある居酒屋を通り過ぎた時、往來の窓から澤山に見えた。皿や徳
 利を陳べた小汚い卓子に相對つて、白い襦袢の給仕人が忙がしさにまご／＼してゐる間に、

赤い熱つた馬鹿けた面附の男が濁聲上げて歌つたり怒鳴つたりしてゐた。其中で窓側に腰を掛
 けてる一人は眼を据え眉を釣上げ口を尖らして、頻りに何か考へ込んでゐるらしかつた。

『奴等は何しに寄合を附けてゐる？』とネフリユードフは自問自答したが、冷たい風が持つて
 來る卑臭い空氣や塗立のペンキの鼻を突くやうな臭ひに忽ち息を塞らした。聽て或る町へ行く
 と、鐵板を積んだ車が何臺も凸凹した道をガタクリさして來た。其の喧ましい音が耳を劈いて
 頭痛がして來たので、ネフリユードフは車を追越さうと足を早めて行くと、不意に此の車の音
 の中から自分の名を呼ぶ者が聞えた。佇立つて、只見ると口鬚を膩で塗り固めて針のやうに尖
 らしたテカ／＼した顔の士官が、辻馬車の上から馴れ々々しげに手を振りつゝ白い齒を出して
 笑ひながら、

『ネフリユードフ君、イオ、君ぢやないか。』

只見ると舊友シエーンボックだから、初めは矢張眷かしく思つて、

『おッ——シエーンボック君だネ、』と嬉しげに聲を掛けた。が、其途端何も喜ぶがものはない

と直ぐ思つた。

シエーンボックと云ふは、昔しネフリユードフと一緒にバノーヴォ村の伯母の家に泊つた夫の贅澤男で、夫以來ネフリユードフは暫らく會はなかつたが、相變らず借金にも怯けずに騎兵隊に屬して、怎うか怎うか金持仲間かねもちなかまに潜り込んでお英を濁してると云ふ噂を聞いた事がある。會つて見れば相變らずの元氣で得々としてゐる容子で、萬更此噂の虚説でないのが解つた。

『好い處で會つた。誰も知つてゐるものが無いから困つてゐた處だ。』と辻馬車から飛下りざま肩を伸ばしながらネフリユードフを凝然と見、『齡を老つたナ。暫らく會はない内に全で變つて了つた。だが、歩きつきで直ぐ君と解つたよ。何しろ久し振で飯でも一緒に食はう。怎うだい、美味い物を食はせる家が此邊に有るかネ？』

『折角だが、今日は爾うしてちやをられんのだ。』とネフリユードフは何氣なしに腹を立たせず、に少しも早く逃出さうと工風しつゝ、『一體何しに來たんだエ？』

『後見職といふ御用向きで御出張遊ばした。はッ、はッ——之でも君、我輩は後見たよ。君も

知つてゐる百萬兩長者のサマーノフ——其のサマーノフ家の總理大臣だよ。サマーノフの當主てのは君、少と人間が甘く出來てるが、併し五萬四千デシヤーチン（一デシヤーチンは凡そ我が一町一反歩）のお殿様だ、』と宛も自分が此大地主になつたやうに得意満々として、『然るに君、萬事が放擲だから小作人共は好い氣になつて更に地代を拂はない。到頭八萬圓以上貸になつて怎うにも怎うにもならんのだ。そこで我輩が引受けて一年經たぬ間に悉く整理して、加之に七割も收入を殖やしてやつた。怎うだい、乃公の腕前は、』と頗る大得意であつた。

爾う云へば成程此男が資産を失くして借金で首も曲がらなかつたのを、運善く或る人の世話で、秩序もなくバツバと金を費ふ或る金持爺さんの後見を托されたといふ咄を聞いたのを憶出した。今でも矢張此後見で飯を食つてゐるものと見える。

『何とかして怒らせないで逃げたいものだ、』とネフリユードフは心中に考へながら、口鬚を油でテカ／＼固めつけた舊友の顔を見つゝ、面白さうに浮立つて何處かで美味しいものを食はうと云つたり、後見の手際を自慢したりするのを聞いてゐた。

『怎うだい、何處かで飯でも喰はうぢやないか？』

『全く今日は爾うしてぢやをられんのだ。』とネフリユードフは時計を出して見た。

『ぢやア君、今夜競馬があるが——やつて來んか。』

『行かれまいよ。』

『そんな因業を云はんで、先ア來て見る。吾輩の馬は賣飛ばして了つたからグリーンシャの馬に賭ける。君はグリーンシャを知つとるだらう。渠奴は好い馬を持つとるよ。是非來給へ、一緒に飯を喰はう。』

『折角だが、會食は出來んのだ。』とネフリユードフは微笑した。

『そりや不可んナ。何處へ行くんだ？ 其處まで吾輩の車で送らうか？』

『なアに、直ぐ其處の辯護士の許だ。直ぐ其處だ——其角を曲れば直ぐだ。』

『爾うく、君は近頃監獄の用事で忙がしいさうだが、豈夫か四人の願人になつた譯ぢやなからうナ。』とシェーンボックは笑ひながら、『コルチャーギンの家で聞いて來た。コルチャーギン

はネ、最う既に田舎へ行つて了つたが、一體怎ういふ仔細なんだ、話し玉へ。』

『全く、全く夫に違ひないのだ。が、往來中では話したくても話しが出來ない。』

『道理、道理。昔しから君は變人だつたからナ。だが、競馬へは來るだらうネ？』

『イヤ、全く行かれんのだ。實を云ふと、行かれても行く氣はしないネ。だが君、怒つちや困るよ。』

『怒る？ 爾んな奴はあるもんか。だが君は何處に住つてる？』

と云掛けたが、怎ういふわけだか急に眞面目になつて、瞳を据え顔を擧めて何か憶出さうとするらしかった。居酒屋の窓の中で見掛けた眉を釣上げたり口を尖らしたりする間の抜けた男の表情と丁度同じだつた。

『寒いぢやないか、君？』

『寒いネエ。』

『包を持つて來たらうナ。』とシェーンボックは辻車馬駈者に向つて云ひつゝ、唐突けに、『ぢや

「君、失敬する。好い處で君に會つて非常に愉快だつた。」とネフリユードフの手を握つて馬車へ飛込みざま、白い手袋を穿めた手をテカ／＼した顔の鼻の頭で振ながら、白い漆徹るやうな齒を出して例のやうに莞爾々々した。

「那樣な心持に俺もなつてゐられたのかナア。」とネフリユードフは辯護士の家へと急ぎつゝ心中に考へた。「全然那樣な心持になり切つてゐたのぢやないが、ならうと思つてゐたのだ。そして那樣な具合に世の中を渡るつもりでゐたのだ。」

第十一回

ネフリユードフは順番を待たずに應接室に通された。辯護士フアナーリン君は直ぐメンシヨーフの放火犯嫌疑の一條に就て話し出した、此裁判の矛盾撞著極まるのを憤慨して一件書類を讀んださうで。

「實に怪しからん、言語道斷です。家屋所有者が保険金を得たさに放火したのは見え透いてま

すが、其様な事は先ア宜いとしても、メンシヨーフ母子が放火したと云ふ證據が一つも無いぢやありませんか。結局豫審判事の不注意と検事の馬鹿力で強に罪人にして丁つたのです。夫だら田舎の裁判所は困るんで、當地の裁判所で裁判されたなら容易しに請合つて無罪になるんで、控訴するに及ばなかつたのです。夫からと——フキヨードシャ・ビルコーワの一件——皇帝陛下へ歎願する案文ですナ。あれは書いて置きましたから、ベテルブルグへ御持参になつて、貴下自身の請願書を添えて一緒にお出しになるんですネ。でないと掛りの官吏から形式的に二ツ三ツ訊かれるだけで、何の効果もありません。精々先ア上奏委員の有力方面に運動するのですナ。夫から——と、確か之れだけでしたナ？」

「イヤ、尙だ恚ういふ手紙が來てゐます——」

「はッはッ、恰で貴下はバイブになつて了つた。監獄の不平が貴下の口を通じてドシ／＼やつてくる。」と辯護士は笑ひながら、「だが、好い加減になさい。餘まり脊負込むと遣り切れなくなる。」

「ナル 之は又頗る驚くべき事件です、」とネフリユードフは云ひつゝ、或る村で或る百姓が同志と一緒に聖書の回讀提唱をした處が、正教會の僧が詞と認めて其筋へ訴へ、到頭檢事に告發されて裁判に移された話の概略を語つて、『驚くべき話ですが、眞實でせうか？』

『何を驚くんです？』

『何をツて、驚くべき事ツちやア無いでせうか。警察官は唯だ命令を奉するだけだから不思議ぢやないが、檢事が告發すると云ふ事はない。苟くも教育ある人間が——』

『夫が抑も誤つてゐます。檢事だの判事だのと云ふものを自由の人間とばかり思つてゐますが、爾う云ふ時代も有るには有つたが、今で大違ひで、矢張月給日を心配する唯の官吏サ。渠等は月給を進う、少とでも餘計貰ひたい、といふより外に理窟は無いんだから、誰でも告發します、裁判もします、宣告もしますサ。』

『だが、聖書を同志と共に回讀すれば西比利亞へ流すツて云ふ法律が有るんですか。』

『有りますとも。人を集めて聖書を読み、希臘正教會で許されてない——正教會の教義に背い

た解釋をして聞かせたといふ證據があれば、第百九十六條に照らされて西比利亞へ流されて了ひます。』

『無法だ！』

『無法だが、出来ます。』と辯護士は莞爾として、『吾輩は何時でも裁判官達に云ふんですが、全く渠等に感謝せずにはゐられないのです。何故なら貴下なり吾輩なり其他のものなりが幸ひに監獄に入れられないのは一に渠等の厚意に由るので、若し吾々の公權を奪ひ、遠い西比利亞へ流して了はうと思へば渠等の手心で何時でも容易く出来ます。』

『併し、其通りに判事や檢事の手心次第で怎うにでも法律を自由に動かす事が出来るとしたら、何の爲めの裁判です？』

辯護士はブツと哄笑して、

『妙な事を仰しやる。夫は貴下、哲學と云ふもんです。其事なら又別にお話し致さうが、怎うです、土曜日に入來つしやらんか。學者、文人、美術家なんぞといふ連中が多勢來ますから、

爾う云ふ抽象問題なら其時大に論じませう、』と辯護士は特に抽象問題なる言葉に皮肉な意味を持たせて云つた。『たしか妻とは最うお親戚になつてゐますナ。是非入來ッしやい。』

『難有う、論じませう、』とネフリユードフは云つた。が、自分ながら心にもない虚言を能く云つたもんだと思つた。といふは、若し恚ういふ問題を論ずるツモリなら、此辯護士の所謂文學會なる學者や文士の仲間に加はりたくないからだ。

何故なら、ネフリユードフが、若し判事や檢事が随意に法律を動かせるなら裁判は何の意味も無いものになると云ふと笑出したり、哲學だの抽象問題だのといふ言葉を輕蔑して話す調子で判断すると、辯護士、恐らくは辯護士の朋友連中とネフリユードフとは餘程考が違つてをると思つたからで、其の違つてる程度は中々尋常でなく、ツイ今方邂逅つた舊友のシェーンボック一輩と自分と違つてゐるから見ると又一層遙かに飛離れてゐるかも知れないからだ。

第十二回

監獄は可成な遠方である上に時刻が遅かつたので、ネフリユードフは辻馬車を雇つた。小伶俐な人の好さうな顔をした中年の馭者は、只ある町を駈らせながら建築中の大きな家を指さしつつネフリユードフを顧盼つて、

『大した普請ぢやがアせんか、』と宛も此普請の一部を受負つてでもゐるやうな口氣で鼻を動かした。

成程大きな建築であつた。様式も頗る手の込んだ創意的のものであつた。往來からは板圍ひをして、周圍に鋸止めの松丸太の足場を組み、漆喰だらけの職人が蟻のやうに彼方此方から渡板に集まつて、煉瓦を積んだり、切つたり、或は重い瓦斗や桶を運び上げたり、空桶を持つて下りたりしてゐた。建築技師らしい立派な扮装の小肥りの紳士が足場の傍に立つて上を指さしつつ何事か説明してゐると、ウラジミール縣あたりの百姓出らしい請負人が謹んで聞いてゐた。建築材料を積んだ車が門から入つたり、空車が出たりする度に必ず此二人の前を通るのだ。

「渠等の安心してゐる事は——仕事をしてゐる奴もさせてゐる奴も——成程安心してゐなけ

ればなるまいが、併し、渠等の家では兒供と一緒に残した女房が精限り眞黒になつて骨折業をしてをる。孤兒は襪々の頭巾を着て、腹が空つて今にも死にさうで、年寄のやうな皺だけの顔でニヤ／＼笑つて、細つこい足を伸ばしたり縮めたりしてゐる中で、己れらの膏血を絞り取る無用の愚人たる金持のためにこんな愚劣極まる家を建つてやらにやならんのだ。』と思ひつ家を見上げて覺えず聲を揚げ、『實に愚劣な家だ！』

『何故愚劣でけす？』と馭者はムツとした調子で、『慙う云ふ大けエ普請があるから人足が仕事に有りつけるんで、愚劣な事アねエでけせう。』

『何しろ無用の仕事だ。』

『無用の事アありませんナ。こんな仕事があるから勞働者が飯が喰つて行かれるンでけすぜ。』ネフリユードフは黙つて了つた。丁度砂利道へ掛つて、車輪の音が俄に噴ましくなつたから談話が出来なくなつた。が、軈で監獄近くへ來ると、碎石工事を施こした道路となつたので、車輪の音がしなくなつた。

『慙うでけす、旦那、』と馭者は復たネフリユードフに向ひ、『田舎から多勢稼ぎにやつて來ますワ——素敵ちやがアせんか、』と馭者臺から振向いて、各自に鋤や手斧を手に持ち、袋を肩に羊の毛皮の衣服を着た地方の出稼人がゾロゾロ來るのを指さした。

『例年よりも多いかネ？』とネフリユードフは訊くと、

『多いの何のツて例年と比べものになりやしませんワ。でけすから、旦那、何處へ行つても人間が一杯で振り切れねエから、雇ふ方では勝手な贅澤を吐かして人間を紙屑より安く踏んでやす。小使錢の端多仕事だつて減多に有附けやせんからナ。』

『慙うしてだエ？』

『人間が多過ぎやすから、容易に口は目附かりやせんや。』

『夫ほど人間が多過ぎるなら、何故、故郷に沈着いてゐないだらう？』

『夫が旦那、政郷だつて矢張仕事が無エンでけす。第一、作物を作りてエにも地面が無エンでけすからナ。』

ネフリユードフは忽ち腫物に觸られたやうな氣持がした。誰でも腫物は兎角に意地悪く觸られやうな氣がするものだが、觸られて身に應へるといふは畢竟痛み處があるからである。

『何處でも同様か知らん？』とネフリユードフは心中に考へつゝ、試に此辻馬車馱者の故郷の村の面積は何のくらゐだか、此男が有つてゐる地面はどれほどだか、何政又田舎から飛出して来たかと段々尋ねると、

『俺らの村では一人一人に就て一デシヤーチンと定つてやすから、俺らが家では三人口で三デシヤーチンでけす。』と辻馬車馱者は乘氣で咄し出した。『處が一人の兄弟は軍隊に入りやして、親爺と弟と二人こつきりになりやしたが、大の男が二人掛つて是れんばかりの地面を作るでもねエと、弟の野郎も矢張莫須科へ来たがつてやした。』

『地面を借りる事は出来んのかエ？』

『今日日は中々借りられやせんワ。それがといふと、俺らの村の界限の領主は揃エも揃つて皆が耗つて了つて、何處の地面も悉皆町人の手に渡つて了つたからカラモウ仕様が無エ。各自

に自分手に作つて人には貸して呉れやせんワ。俺らの方の地主は佛蘭西人で、矢張先の領主から買つたんでけすが、今ぢや決して貸して呉れやせんワ。』

『佛蘭西人、怎んな奴だ？』

『デユフォールで奴で、旦那は御承知でけせう、大芝居の役者の鬘を請負つてゐる奴でけすが、こいつが好い金儲けになるさうでけすナ。俺らの力の地面は此奴が残らず買メめやしたから、俺らは此奴の支配になつて好き自由な辛エ目に會はされてやす。尤も此奴は根は善人でけすが、女房の露西亞人がシタ、かな奴で、此嫌アめが百姓を搾るんでけす。悲惨な咄でけす……そら、監獄へ來やした。玄關へ横付けにしやせうかナ。だが、横付けにさせねエかも知れねエ。』

第十三回

玄關で案内の鉦を鳴らしながら、之から會う時のマースロワの容子やら、之まで経験したマースロワ初め監獄に呻吟する連中に面と對ひ合つた時の奇妙な感じやらがムラ／＼と憶出され

て氣が減入つて了つた。聽て取次に出た押丁にマースロワを尋ね、二ツ三ツ問答してからマースロワは病院へ轉じたと云つたので、直ぐ監獄病院へ行つた。病院の受附は親切な老人で、誰に面會したいかと訊いてから、マースロワなら小兒病室だと教へて呉れた。

すると、石炭酸の臭ひをブンとさした若い醫員が廊下でネフリユードフに追付いて、難かしい顔をして何の用があると訊いた。此醫員は常から囚人の肩を持つて、始終監獄吏や監獄醫長とさへ面白からぬ衝突をしてゐた。乃でネフリユードフを見ると、復た厄介者が來て無法な事を云出しはしないかと掛念しつゝ、誰でもあれ間違つた事を云出したら容赦はしないぞといふ權幕を見せたさに、故意と四角四面に難かしく切出したのだ。

『爰には女は在不在。爰は小兒病室だ。』

『そりやア知つてますが、女囚が一人看護婦の手傳に來てゐませう。』

『女囚なら二人在る。何方に面會したいのだ？』

『マースロワといふものに……』とネフリユードフは答へた。『實は此女と親密な關係があつて、』

此女の件で元老院に控訴する爲め之からベテルブルグへ參る筈になつてますが、夫に就て其前に一應面會して仕合せをし、且此品を與りたいのです。』と衣兜から袋を出して、『寫眞です。』

『爾うですが、宜ウムンす。』と醫員は漸つと合點めたと見えて、前よりは言葉遣ひも物柔かに、白いエプロンの年老つた女に向つてマースロワを呼んで來いと命じて更にネフリユードフに向ひ、『爰で待つてますか、夫とも待合室へ行きますか？』

『難有う。』とネフリユードフは答へつゝ、醫員の態度が急に變つて大分風向が宜くなつたので、病院内のマースロワの評判を訊いた。

『至極評判が好いです。以前の身分を考えると感心に能働きます。あツマースロワが來ましたよ。』只見ると、年老つた看護婦の踵から、青い棒縞の衣服に白いエプロンを掛け手巾で頭髮を包んだマースロワが隨つて來た。ネフリユードフを見るとボウツと顔を赤くして暫らく躊躇つたが、聽て洗面作りつ下眼をして、廊下の眞中の敷物の縁傳ひに急いで來た。初めはネフリユードフの側まで來ても手も出さうとしなかつたが、漸つと一層顔を眞赤にして手を出した。

此前會つた時のマースロワは萎れ返つて、其の又前の面會に肝癢起して喰つて掛つたのを邊りに詫まつて小さくなつてゐるが、ネフリユードフは夫限會はなかつたから、今日も矢張り同じやうに小さくなつてゐる事と思ひの外、此日は全で容子が變つて了つて、今迄に無い打解け難い隔心が見え、何か敵意を包んでゐるけにも思はれた。で、今ぶた醫員に話した通りの一條、即ち元老院に控訴する爲めベテルブルグへ行く筈だと話しつゝ、バノーヴォ村から持つて歸つた寫眞を袋の儘で渡した。

『伯母の家で發見けた古い寫眞だが、お前は必と喜ぶだらうと思つて持つて來た。』

マースロワは黒い眉毛を釣上げ、例の斜視の眼に怪訝の色を示しつゝ、『こんなものを怎うするんだ？』と云ひたけな風にネフリユードフを見ながら、無言で寫眞を請取つてエプロンの衣兜に入れた。

『お前の伯母さんに會つて來た、』とネフリユードフは云ふと、

『爾うですか？』と一向平氣で冷ましてゐた。

『病院は怎うだい？』と訊くと、

『結構ですワ、』と答へた。

『さして面倒な事もないかネ？』

『いゝエ、ですけれど尙だ馴れませんで。』

『そりやア何よりだ。左に右く彼處に在るよりは宜いだらう。』

『彼處とは何處？』とマースロワは復た眞赤なつた。

『彼處てのは檻房さ、』とネフリユードフは早口で云つた。

『何故、此方が宜くツて？』

『周圍が宜いだらう。檻房に在るやうな人間は爰には在らないからナ。』

『檻房にだつて好い人は澤山ありますワ。』

『むゝ、メンシヨーフの一件ナ、』とネフリユードフは憶出したやうに、『種々骨を折つて見たが、先づ免されさうな鹽梅だ。』

『夫りやア神様が怎うにかして下さいますワ。那樣な結構人のお婆さんですもの、』と再たもや此老婆さんの美質を繰返しつゝ、ニツと笑つた。

『私は之からベテルブルグへ行く意だ。お前の再審も直き初まりさうだが、巧く前判決が取消しになれば可いが。』

『取消しになつてもならなくても今ぢやア既う同じですワ。』

『何故？』

『夫でも、』とマースロワは云ひながら何か訊きたけにジロリと見た。

其容子や言葉つきで推すと、ネフリユードフが何處までも最初の決心に膠著して動かないのであるか、夫ともマースロワが拒絶したのを勿怪の倅ひに氣が變つて了つたか、を訊きたけに見受けたので、

『何故同じかネ。お前の云ふ事は怎うも解らんナ。私一個に取つてはお前が放免されやうとされまいと何方でも同じで、豫てお前に話した通り、何方にしても夫々私の覺悟がある、』と斷

乎として云つた。

マースロワは靜かに面を舉げて、黒瞳勝ちの斜視の眼で凝焉々とネフリユードフを凝視めたり或は故と外らしたりしつゝも滿面に喜色を漲らしてゐた。が、口頭に出る言葉は眼で語つてゐる事とは全で違つてゐた。

『最う何にも仰しやらない方が宜いワ。』

『だが、お前の解るやうに云ふのだ。』

『最う何も彼も仰しやり盡してゐるから此上仰しやる事はない筈です。』と無理遣りに冷ましてゐた。

其時忽ち病室の方から喧たましい小兒の泣聲が聞えた。

『あッ、妾を呼んでるやうだ。』と云ひながら氣遣はしげに願ひた。

『では最う歸らう。』とネフリユードフは云ひつゝ、握手を求めやうと手を出したが、マースロワは故と氣が附かぬ振して、内心の嬉しさを強に押祕さうとするかのやうに急いで偏走りに駈

けて行つた。

『怎ういふ了簡だらう？ 何を考へてゐる？ 何を感じてゐる？ 尙だ俺を試すつもり乎ナ。

夫とも昔年の辭憤が尙だ晴れない乎ナ。心に思ふ事を口に出せないのか、或は出すのを欲しないの乎。一體少しは折れて來たの乎、夫とも益々頑なになつたの乎、』とネフリュードフは自問自答したが、何分其解釋が著かなかつた。左も右もマースロワが變つて了つた、重大な變化が今起りつゝあ事だけは明かで、此變化が愈々マースロワに渠を結びつけ、且之といふも畢竟は神のお蔭と愈々歸依心を厚くして心嬉しくイソ／＼と奮ひ立つた。

マースロワはマースロワで、八臺の小さな寢臺を据ゑた受持の病室に戻ると直ぐ、看護婦の命令で寢床を一つ作らうとして、上敷の上に身體を伸ばし過ぎた機みに迂つて轉びさうになつた。

此體を見て、頸に縋帶をした癒り掛けの小兒は笑ひ出した。マースロワも我慢が出来ないで寢床に轉けてブツと哄笑すと、他の小兒も一緒になつてドツと笑ひ出した。



すると、一人の看護婦は腹立たしげにマースロワを睨付けて、『何を戯けるンだい？ 今迄在
た處とは違ふよ。さッ、食べる物を取つておいで。』

マースロワは黙つて了つた。で、命付けられた通りに皿を持つて食物を取りに行かうとして、
矢張笑つてはならぬと叱られた繻帯の小兒と眼を見合はせると復た笑止しくなつて笑ひ出した。
夫からといふもの、マースロワは唯つた一人となると、日に何度も袋の中から寫眞を
半分出しては嬉しさに見た。夜になつて、合部屋の看護婦が在ないうで獨りほつちとなると、
羊羹色に褪めた寫眞を袋から出しては餘念もなく凝然と看惚れ、多勢の顔から衣服から縁側の
上り段から後ろの木立まで一ツ一ツ丁寧に視た。取別けて前髪を前額に縮らした自分の美しく
い若い顔を見ては昔が戀しくて堪らなかつた。で、茫然と寫眞に氣を散られて、明燈の看護婦
が歸つて來たのをさへ知らずにゐた。

『彼の方が持つて來て下すつたのは何？』とポツテリした人の好い看護婦は後ろから寫眞を覗
込みつゝ、『誰の寫眞——貴娘の？』

「妾のでなくて誰？」と云ひつゝ朋輩の顔を見て嫣然とした。

「其の男の人が彼の方？ 其のお年寄は——彼の方のお母さま？」

「いゝエ、伯母さんなのよ。此の若いのが妾なのが解つて？」

「解らないワ。全で顔違ひがして了つたもの。尤も當然だワネ、最う十年前でせう。」

「十年どころか、全で前の世でさアネ。」とマースロワは云つた。すると不意に冴えくした氣色が失くなつて鬱込んで了ひ、眉の間に八の字を深く刻んだ。

「何故？ 貴娘なんかは今まで暢氣に面白笑止しく暮して来たんぢやないか。」

「暢氣どころですかい。」とマースロワは眼を閉ぢて首を振つた。「地獄よりか最つと痛い處ですワ。」

「何故痛い？」

「何故痛いッて、毎晩八時から朝の四時まで打通し、一と晩も缺かしつこなしの職業ですもの。」

「ですけれど夫程辛けりやア、誰しも止めさうなもんですネ。」

「夫が止たくても止められないんですワ。」とマースロワは、「そんな話をしたつて詰らないワ、と飛上りさま卓子の抽出に寫眞を投込み、口惜し涙を飲込みつゝ廊下へ駆出し、荒々しげにガタンと戸を閉切つた。

一と昔し前の此の一家族の面影に看惚れた時は、暫らく我を忘れて何年前の昔しの我が身に戻つたやうな氣がして、情々其時代の楽しい舊夢を偲びつゝ、聽て復たネフリユードフと同じ幸福を樂む事が出来さうに空想してゐた。が、朋輩の言葉に誘はれて今の身の上から既往を呼起すと、常から臆氣に心に思ひ浮べても有繋にまさしくと思出すに忍びなかつた浮川竹の淺まじさが今更のやうにヒシ／＼と胸に思當つた。

長い年月の夜毎／＼の淺ましさが今ほど顯然と胸に浮んで來た事は之まで無かつた。取別けて斷肉祭の晩、自分を身抜きして呉れる約束の學生を待つてゐた時の事が憶出された。酒汚點だらけの赤い絹の舞踏服を着て、束ぬ髪に赤い挿頭を挿し、疲れ切つた微醉氣味でお客を外し、丁度夜中の二時であつた、舞踏の間の時間に洋琴の傍へ來て、ネオリンの伴奏をする踵物の癖

痕だらけのコツ／＼した顔のピアノ弾手を對手に憂い辛い薄命な身の上咄をする、ピアノ弾手も矢張自分の商賣が染染辛くてならぬから少とも早く止めたいと述懐した。處へ思掛けなくベルタがやつて来て、三人が三人とも商賣を換へようと決心して、最少し夜が更けてから一緒に逃出さうと相談した。すると忽ち、醉漢の聲が前座敷で聞えたかと思ふと、オリン弾手が絃を靡り始め、ピアノ弾手も一緒にボン／＼鍵盤を叩いて、浮れ調子の面白い露西亞の歌に合してのカドリルが始まつた。何處から紛れ込んだか熟柿臭い燕尾服白ネクタイの小男が吃逆をしながら自分の手を取り、最一人のデク／＼肥つた髯男がベルタを捉へて踊つたり跳ねたり歌つたり飲んだりして、駈落沙汰は夫限りになつた。……爾う慙うする中に年は暮れ、二年と三年と段々深味へ陥つて了つて、怎うしても商賣換へが出来なかつた。之と云ふも畢竟は皆、彼の人の庇だ。

と思ふと、不意に復たネフリユードフに對する以前の憎惡が頭を持上げて、思ふ存分罵つて罵つて罵り捲りたかつた。今、考へれば最う一度斷乎と拒絶して、折角のお志ですが、昔し妾

の身體を自由にしたやうに、妾の精神を自由にしやうとしたつて爾うはなりませぬと小氣味よく云つてやりたかつたと、ツイ其機會を外したのが残念で堪らなかつた。

で、我が身が怨めしかつたり、無暗と男が腹立だしくなつたりする心を紛らしたさに、一と息グイと鯨飲りたくなつた。若し監獄に在たなら恐らく一旦誓つた禁酒を破つて了つたかも知れぬが、爰では助手の醫員にでも頼まなければ一滴の酒も自由にならぬ。此助手と云ふのが顔さへ見ればヤイ／＼執拗こく附纏ふ、イヤでイヤで堪らぬ氣障男だから、散三男に懲り抜いたマースロワは何が何でも恁んな氣障男に酒の無心をする氣になれず、暫らくは茫然と廊下に佇んでゐた。聽て小さな控へ部屋に戻つた時は、朋輩の言葉を耳にも掛けずに過去の墮落が口惜しくて口惜しくて前後不覺に聲を上げて泣顔れて了つた。

第十四回

ネフリユードフがベテルブルクに出張した用事は四件である。第一はマースロワの控訴、次

にはフキョードーシャ・ピルコワの嘆願書提出、夫からヴェーラ・ゾーホワから頼まれた國事犯嫌疑者シューストワ女の放免と、國事犯グールケウキチに面會する許可を其の阿母の爲め受ける事と、此二口を一件として之で三件。第四件は同志の者と共に聖書を回讀した爲めに高架索へ流された異宗徒の事件で、此の最後の件は關係者よりは寧ろ此方が熱心になつて誓つて全力を盡して此災難を救つてやらうとした。

副知事マースレニコフを訪問して以來、殊に田舎へ行つて實地に民情を視察した以來、ネフリュードフは怎う此問題を處理すべきかの確たる覺悟は定つてゐなかつたが、左に右く自分が今の今まで屬してゐた所謂上等社會が心底から熟々忌になつた。此階級の人間は少數者の安寧快樂の爲に萬人が蒙る不幸艱難を巧みに塗蔽すから、誰一人として己れらの殘忍酷薄を少しも悟らないし、又悟る事が出来ないのだ。此先き最早不快の感なく自責の念無くして此社會に交つて行動する事は出来なくなつたが、從來の慣習や交際や親族關係から嫌々ながらも矢張牽引けられてゐた。夫ばかりでなく、之からマースロワなり他の薄命者なりを助けやうとするに

は、勢ひ此の難有くもない腹の立つ馬鹿馬鹿しい此階級の人間に頼んで骨を折つて貰はねばならないのだ。

ペテルブルクでは叔母なるチャールスカヤ伯爵夫人の家に逗留した。此叔母と云ふは亡母の妹で、良人は前の國務大臣だから、爰に逗留するは今では別世界の感ある貴族社會の最中心に身を投ずるわけで、如何にも不快愉快まつてるが、左らばと云つて遁れる事は出来なかつた。ホテルへ泊れば叔母の機嫌を悪くするし、之から先き叔母の社會的勢力を借りる必要が随分有らうと云ふ矢先に感情を氣拙くするは不得策であつた。

邸へ著くと早速、叔母エカテリーナ、チャールスカヤ伯爵夫人は珈琲を薦めながら、

『お前さんの事ッては種々面白い噂を聞いてゐます。此頃お前さんはハワード(有名なる監獄改革者の名)を任じて罪人を助けたり、監獄を見廻つたりして、監獄を見廻つたりして、監獄を改良しなさるお意だとネエ。』

『中々怎う致して。』

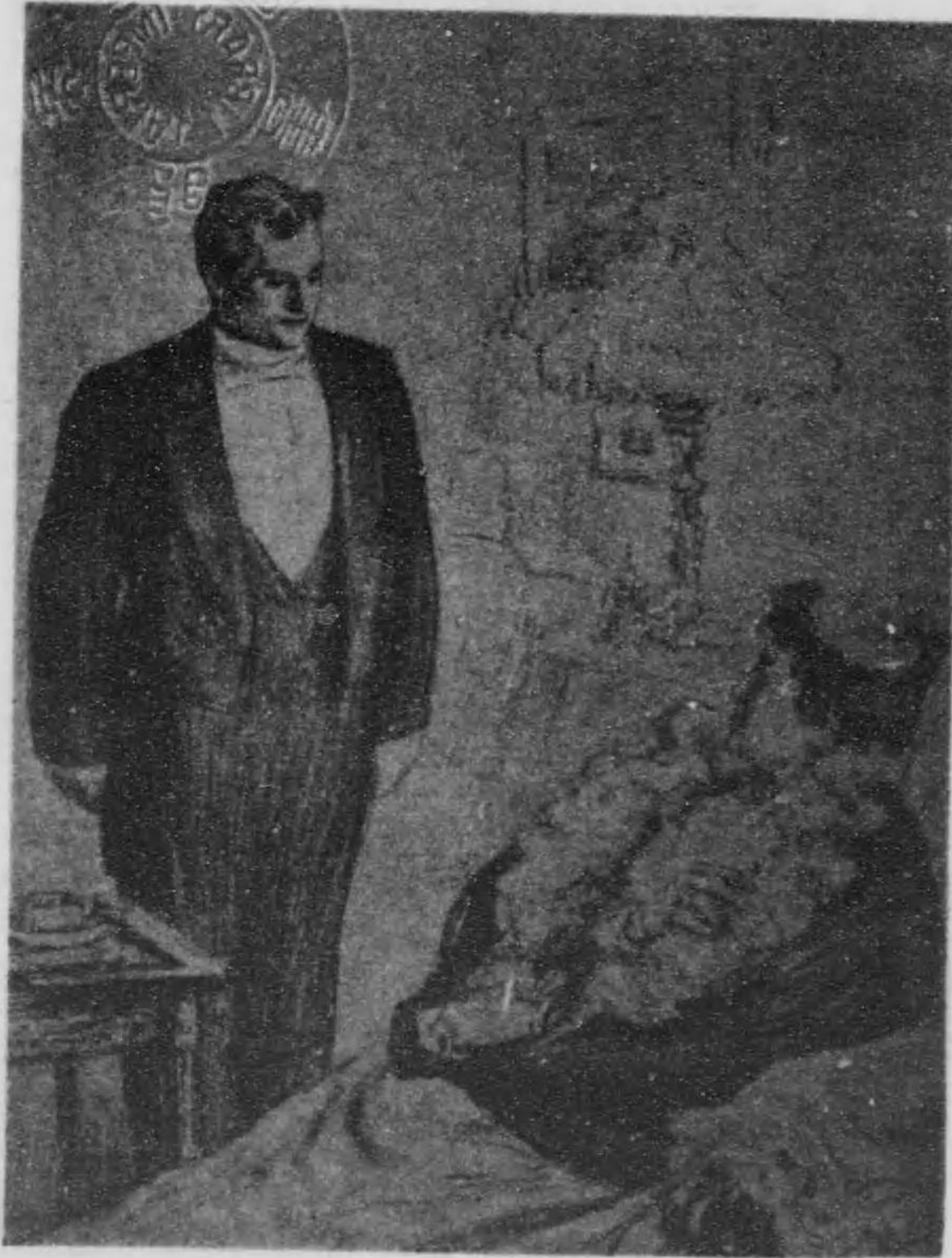
『何故サ。結構ぢやアありませんか。夫に就て小説的の話があるさうですが、聞きたいもんですネエ。』

と訊かれたので、ネフリユードフは少しも秘さずにマースロワに關係する一伍一什を明らかに遂一物語つた。

『知つてます、知つてます。お前さんがバノーヴォの伯母さん許に逗留してゐなかつた時、お母さんから聞きましたよ。伯母さん達は必とあの小間使をお前さんに嫁娶はせたかつたんでせう。(此伯爵夫人は何時でもネフリユードフの父方の伯母を馬鹿にしてゐたのだ。) 怎うしました、其女は？ 相變らず今でも美しいかエ？』

此伯爵夫人エカテリーナは今年六十歳になるが、到つて壯健で艶々しく、尙だ中々な頑丈な多辯の婦人で、脊も高く胖然と肥えて、鼻の上に薄墨色の鬚が生へてゐた。ネフリユードフは此叔母さんが大好きで、児供の時から男勝りのシツカリした氣性に懐いてゐた。

『いや、叔母さん。开んな浮氣咄は最うお終ひになつたので、唯罪もないのに不當な刑を宣



告されたのが可憫相だから助けてやらうといふのです。結局慙ういふ不幸な目に會ふ原因はといふと私の罪ですから、力の及ぶ限り手を盡してやるが義務だと思ひます。』

『夫は其通りに違ひない。ですけれどもお前さんは婚禮するお意だッて聞きましたか？』

『全く其意ですが併し女が承知しませんので。』
エカテリーナ叔母は呆れて了つて、何にも云はずに眉を釣上げて下眼で甥の顔を見た。が、忽ち復た氣色を變へて嬉しげな顔をして、

『お前さんよりは其女の方が餘程伶俐だよ。お前さんは先ア何ていふ馬鹿だらう。眞實に婚禮するお意かエ？』

『眞實ですとも。』

『那樣いふ墮落生活をしたものとかネ？』

『那樣いふ墮落生活に落ちたのは誰のお庇です。其の原因はといふと、私の責任——であつて見れば、愈々妻としませんければ……』

『眞個にお前さんは餘程馬鹿だ、』と叔母は無理やりに笑を忍びつゝ、『馬鹿も馬鹿も大變な馬鹿だよ。けれども爾ういふ途でもない馬鹿な所爲をするお前さんだから妾は可愛くてならない。』と叔母は叔母だけにネフリユードフの道徳心を十分正當に合點した意で、『丁度幸ひな事がある。此頃アリーンといふ人が廢業娼妓の引受所を作つて世話をしています。妾も一度ホームへ行つて見ましたが、ドウモ實に堪らなく不快な心持がして、身體まで臭くなつたやうな氣持がしました。夫からつても毎日々々身體を洗つて清めてゐるんです。だが、アリーンは感心な人です。身も魂も此事業に委ねて獻身的に働いてゐますから、お前さんの女も此のホームへお預けなさい。』

『結構ですが、マースロワは西比利亞へ宣告されてますから、實は其の爲めに控訴しに參つたので、是非叔母さんのお骨折を願ひたいのです。』

『何處へ控訴するの？』

『元老院へ。』

『元老院へ。元老院なら從弟のリヨフが在ります。尤も從弟は爵位局詰で、生憎と他の者は知つてませんがネ、何でも獨逸人みたやうな連中ばかりで、ゲーとかフェーとかデーとか云ふ字が附いたり、でなければイワーネンコとかセミヨネンコとかニキーチエンコとか、外國人のやうな聞馴れない名ばかりでした。何しろ伯父さんに聞いて見ませう。伯父さんは悉皆知つてゐます。元老院ばかりでなく、種々な方面の人を能く知つてゐますから、妾から話をしませうが、併し詳しい事はお前さんからお話しなさい。妾の云ふ事は何でも解らない解らないッてますからネ。眞實に笑止しな話で、誰にでも妾の咄は能く解るのに、伯父さんだけは解らないッて云ひます。』

此時、半チボンの家從は銀盆に手紙を載せて入つて來た。

『噂をすれば影で、アリーンから手紙が來ました。』と云ひつゝ夫人は手紙を請取つて見て、『丁度好都合だ、キーゼウエツテルさんのお法話が聞かれます。』

『キーゼウエツテルてのは何ですか？』

『キーゼウエツテルさんかエ。今晚になれば解ります。不思議に此の方のお話を聴聞すると怎んな悪黨でも膝を突いて泣いて懺悔します。』

エカテリーナチャールスカヤ夫人は不思議な事には氣性に似合はない信心者で、基督教の神髓は救の信仰にありと云ふ教に凝固まつてゐた。で、この頃流行る此法話のある集會なら何處へでも出席するし、自分の邸でも度々法話のお席を開いては同行の信心連中を集めた。尤も此流義の信仰では教會の有らゆる儀式や聖像禮拜や聖餐式の類は總て無用なのだが、伯爵夫人は矢張室毎に聖像を飾り、殊に寢所には立派な像を飾つて一向自分の信心と矛盾するのを頓著しなかつた。

『お前さんの女も此のお方のお話を聴聞したなら必と心を改めませう。何しろ今夜はお前さんも家に在て聴聞して御覽。眞個に豪いお方だよ。』

『开んものは私は嫌ひです。』

『先ア騙されたと思つて聴聞して御覽。聴聞すれば必と感服します。夫から尙だ外に妾の手の

要る事があるなら、序に悉皆話してお了ひなさい。』

『尙だ有ります。要塞の監獄に。』

『要塞ならクリーグスムート男爵に宛てた手紙を上げて宜い。此人は中々の傑物だよ。爾うお前さんも知つてゐなさるだらう。お前さんのお父さんのお友達でしたから。靈魂術の信者なのが少と何だけれども、开んな事は怎うでも關ひますまい、好いお人だから。だが、要塞に何の用があるの？』

『實は要塞に收檻されてる男の阿母の爲めに面會認可書を貰つてやりたいのです。クリーグスムート男爵の管轄でなくてチエルギアンスキーの権内のやうに聞いてました。』

『チエルギアンスキーは妾は大嫌ひさ。だが、彼の人の奥さんのアリエツトさんに話して見ませう。マリエツトさんなら何とか仕て呉れませう。美しい人ですよ。』

『夫から同じ監獄に何で收檻されてるのか解らない女があるんです。此女の爲めに放免の請願書を出したいのです。』

『そりやアお前さん、心配する事は無い。何で捕まつたのか、常人達には能く解つてます。何れ收檻されるには當然の理由があるのサ、あの散切女たちはネ。』(散切女とは女の虚無黨のこと)

『當然か不當然かは知りませんがネ、渠等は苦んでるます。貴姐は基督信者で聖書の訓を信じたらッしやるが、矢張人情は有りませんナ。』

『聖書は聖書、嫌ひなものは何處までも嫌ひなもの、何の關係もありやしない。假に妾が虚無黨の最負をするやうな顔をしたら、夫こそ飛んでもない事です。云ふ中、あの散切の女虚無黨と來たら迎も堪つたもんぢやアない。』

『何故です?』

『何故ッて事があるもんかネ。三月一日の一件(亞歷山二世の暗殺された日)以來开んな事を訊くものはな

い。』

『皆が皆三月一日の一件に關係したわけぢやありませんぜ。』

『何方の道、自分に關係しない事を除計なお世話ぢやアないか。女の出しやばる幕ぢやア無い。』

『では、お話しのマリエットさんも矢張女の要でも無い幕に出しやばるわけなんですネ。』

『マリエットさんかエ、マリエットさんはマリエットさんサ。けれどもあの人は親切なんだが、女の虚無黨連と來たら人を教へる了簡だから堪らない。現にハリチューブキナなどは其のツモリでゐる。女のくせに生意氣ぢやないか。』

『教へるのぢやアない。助けるのです。』

『あの人達が出しやばらなくても助けて宜い人、助けて悪い人は誰にでも解つてます。』

『けれども人民は大變困つてゐます。私は田舎から歸つて來たばかりですが、活々は馬鹿けた贅澤をして遊んでゐるのに、百姓達は腕限り命限り働いても尙ほ食へないッてのは當然でせうか、』とネフリユードフは伯母が快よく對手になつて呉れるのに誘はれてツイ我知らず胸襟を開いて話し初めた。

『では怎うすりや宜いの? 妾達も矢張働いて食べずにゐるやうかネ?』

『貴姐方に食べずにゐる下さいとは申しません。』とネリフドフは思はず笑ひながら、『私の希

望は人は上下の區別なく一様に働いて一様に食べるやうにしたいのです。」

伯爵夫人は再び眉を釣上げ、下最を遣つて訝かしげにネフリユードフを見ながら、

『困つたもんだ、お前さんは碌な終焉はしなざるまい。』

『何故です。』

丁度其時、夫人の良人なる前の國務大臣、伯爵チャールスキイ將軍は入つて來た。春の高い肩幅の廣い男で、

『やア——ドミートリイ、御機嫌宜う！』と剃りたての顔を接吻しろと云はぬばかりにネフリユードフに突出し、『何時お着きだ？』と云ひつゝ無言で夫人を接吻した。

『此人は途方もない事を云ひます。』と夫人は良人に向つて、『妾に向つて自分で濯ぎ洗濯をしてお芋でも食べてゐると云ふんです。呆れた男ぢやありませんか。其のくせ貴郎にお願ひしたい事があるなんぢ蟲の好い事を云ふ、餘程な大馬鹿者です。』と云ひつゝ復た、『お聞き遊ばしたか、カメンスキーの母御さんが弱り抜いて難かしさうだつてますが、貴郎、鳥渡お見舞に行つてら

ッしやいまし。』

『爾うか夫りや大變だ。』

『今直ぐ行つてらッしやいまし。妾は手紙を書かなけりやなりませんから。』

其時ネフリユードフは次の間へ行かうとすると、叔母は呼止めて、

『マリエツトさんに手紙を書きませうかね？』

『何卒、宜しく。』

『では手紙の中を明けて置くから、散切女の事はお前さんが勝手に何とでもお書き足しきなさい。すればマリエツトさんから良人さんに好いやうに話して、何とか計らつて呉れませう。悪く思つてお呉れでないよ。妾は那樣云ふ散切女を生得蟲が好かないんだからネ、何も痛い目に會はしてやらうとも思つてないが、那樣な者の爲めに一行だつて書くのは嫌だからネ。さア、之でお別れにませうが、今夜は是非家に在て、キーゼウエツテルさんの御法話を聞いて御覽。必と利益になる事があります。お前さんもお前さんのお母さんも恚う云ふ方には餘り氣が進ま

なかつたが、神信心も少しはして御覽なさい。夫ぢやア復た……』

第十五回

チャールスキー伯爵は前の國務大臣で、自信の頗る強い人であつた。其の自信と云ふは、鳥が蟲を啄み綺麗な翼や綿毛を著て空を飛ぶのが自然であるやうに、高い給料のコックが庖丁した擇りすぐつた頗る贅澤な料理を賞味し、著心の最も好い頗る贅澤な衣服を著て、最も駿足な逸物の名馬を馳らせるのが矢張己れの爲めの自然であるといふ信仰で、此信仰から有らゆる各種の贅澤物が伯爵の爲めに自づと準備されてゐるやうに思つてゐた。且、國庫からは種々の名義で引出せるだけ金を引出し、勳章や金剛石入の徽章をイクラでも慾張つて欲しがり、雲の上の高官貴夫人に取り入つて近づけば近づくほど得策だと信じ切つてゐた。

此の獨斷の理窟と比べたなら其他の物は總て無意味で下らぬやうに思つてゐた。外の事は何が何であらうと、右であらうと左であらうと關はぬ。此の自分勝手の自信一點張で四十年間世の

中を渡つて、到頭お蔭で國務大臣の位置にまで漕付けた。

伯爵が此の位置にまで漕付けた長處は、第一は法律及び公文書の意味を解釋し、拙いながらも政務書類の案文を明白に書き、且綴字を少しも誤まらない能力である。第二には重々しい立派な容貌で、尊大に構へなければならぬ場合には堂々として近づくべからざる威嚴を示し、又或る場合には随分卑劣にヘイコラして幫間的となる事も出来る強柔自在の才氣である。第三には個人的にも政治的にも道德の主義や法則はお留守にして、時と場合の御都合次第で誰とでも提携もすれば分離もするといふ融通力である。恚ういふ長處を巧みに運用して、唯だ貴族の體面を保つて、進退行動が餘りに矛盾するのが看え透かないやうにとのみ心掛けてゐた。恚うい行爲が道德的であるか不道德的であるか、全露國は愚か随分全世界にまでも最善或は最惡の影響を與へはせぬかといふ如きは全く無頓着であつた。

伯爵が大臣となつた時は、數多の屬僚共や朋友眷族其他の一味は本より何の關係もない他人でさへが、イヤ、當の本人の伯爵自身すらが頗る賢明な政治家と自惚れてゐた。が、若干の月

日を経て何れをも仕出來さず、何等の伎倆をも示さないで、丁度伯爵と同じやうな唯だ官文書を理解するばかりが能の、外見ばかりが立派な無主義無定見の他の俗吏が、生存競争の理窟から伯爵を蹴落して取つて代つて了つた。すると今度は、伯爵が賢明どころか、保守黨新聞の社説以上の権識は逆も覺えない頗る淺薄な無教育の獨り悦りの人間たるに過ぎないのが初めて明かに認められ、伯爵を透出した他の無智無能の獨り悦りの俗吏輩と比べて何等特別の技能がないのが明白になつた。伯爵自身にも能く解つた。が、之が爲めに毎年國庫から多分の金を引出したり大禮服には益々ゴテゴテと新しい勳章を飾り付けたりしやうといふ自信は確としてビクとも動かないから、有繋に誰しも伯爵の自惚の強いのを無下に斥けるにも忍びないので、大臣の職を罷めてからも依然として國庫からは年金とか政府の官吏としての俸給とか種々の委員長や會議長としての手當といふ名義で年々矢張數萬圓を受取り、且大禮服の肩やズボンに新しい種々の紐を縫付けたり胸にリボンや七寶の星章を飾りつけたりする伯爵に取つては一番大切な権利を探廻してゐた。随つて又依然として權門顯貴の關係を持つてゐた。

チャールスキー伯爵はネフリユードの話を屬僚の報告でも聞くやうに聞取つてから二本の手紙を書かうと云つた。其中の一本は元老院控訴部の議官ウォルフへ宛てたもので、

『此男は毀譽區々で種々風説もあるが、併し立派な人物だ。殊に吾輩には多少恩があるから出来るだけの盡力はして呉れやう。』

最う一本は請願局の某有力者に宛てたものである。ネフリユードが話したフキョードーシヤ、ビルコワの件は非常に伯爵を動かして、此事に就ては皇后陛下に上奏する意だと云ひ、此件は眞に感動すべき話であるゆゑ機會があつたら直きに陛下の内閣に達しやう、尤も約束は出来ぬから左も右も普通の手續に随つて請願局に請願書を差出したがよからう、若し又都合好く木曜日に内會議があつたら或は其時に陛下に直奏出来るかも知れぬと云つた。

ネフリユードは此の二本の手紙と、叔母からマリエットへ宛てた手紙を受取ると直ぐ夫々の方面へ出掛けた。

先づチエルギャンスカヤ夫人のマリエットを尋ねた。ネフリユードはマリエットを十代の

娘時分むすめときぶんに知つてゐた。貧乏貴族の娘で、餘り評判の好くない或る男の許まじに嫁に行つたと聞いたが、此男が不思議にズン／＼と立身したのだ。ネフリユードフは例の通り常から尊敬しない人間に頼むのが如何にも辛くて、頼まうか頼むまいかと散々煩悶して迷つた擧句に矢張頼む事に決した。困るのは、自分だけは既に仲間を抜けてる意でも先方では矢張同類と思つてゐる。嗚呼いふ連中と一緒に不本意を別としても、此の古臭い愚劣な仲間に交つてゐると、此社會で幅を利かす無思慮な輕薄な調子に心ならずも服従しなければならなくなる。現に叔母伯爵夫人の邸で此感があつたのは、極めて眞面目な話をしてゐる最中稍やともすると冷汗ひやかしや擗揄からかひになつて了つた。

ペテルブルグには暫らく遠ざかつてゐたので、肉にのみ強くて道徳的に鈍い都會風に忽ち感動された。

何も彼もが小ざつぱりと快よく行届いて設備された。一般に人間が暢氣のんきで道徳に頓着しないから、生活が頗る氣樂きらくらしかつた。

客扱ひの丁寧な立派な上巻辻馬車に乗つて、制服の立派な慇懃な巡查に迎へられつゝ清潔な水を撒いた立派な道路を駈はしらせて、美しい立派な家並を通り過ぎつゝマリエツト夫人の邸へ行つた。

玄關前げんくわんまへには英吉利風の馬具を附けた英吉利馬の二頭立の馬車が控えて、嚴かしい禮服の英國人めいた頬髯ほくひげの立派な馭者が手に鞭むちを持つて傲然と馭者臺に構へてゐた。

肝を潰すほど立派な禮服を着た玄關番は案内に應じて扉かどを掛けて玄關へ通すと、愈々けばけばしい金筋入の禮装をした叮嚀に櫛くしの齒を入れた美事な頬髯の家従が眞新らしい制服を着た給仕と共に控へてゐた。

『閣下は今日は誰方にも御面會をなさりません。夫人も——唯今お出ましになる處ですから。』ネフリユードフは叔母チャールスカヤ夫人の紹介狀を取出しつゝ、卓子たしこに備へた來客簿きやくぼくに自分の名を認め、且折悪しく誰にも面會出来なかつたを残念に思ふ由を書殘さうとした。

其時、家従は周章てゝ階段へ登つた。玄關番は外へ飛出して馭者に聲を掛け、給仕は兩脇に

臂を張つて騰然と突立ち、階段を急ぎ足に左して、威儀を繕ふ體もなくバタ／＼と駈降りて來た纖弱な小作りの貴婦人に目禮した。

此貴婦人は即ちマリエツト夫人で、鳥の羽を著けた大きな帽子を被つて、黒い衣服に黒いケープを掛け、新しい黒い手袋を穿め、面纱を顔に掛けてゐるが、ネフリユードフを見ると面纱を上げて美しい顔を現はしつゝ、バツチリした涼しい眼で訝かしげに睨と見。

『おや、ネフリユードフ公爵、』と柔しい嬉しげな聲で、『記憶えてますよ——』

『名まで覚えてらつしやるナ。』

『覚えてませんでサ、』と佛蘭西語で、『妾も妹も貴郎に戀してゐたんですもの——だけでも先ア、大層變つてお了ひなすつた事。何しろ出掛けで残念ですワネ。鳥渡二階へ行つてお話し仕ませうか、』とモジ／＼してゐるが、時計を出して見て『矢張不可ない。之から實はカメンスキーさんの許へ御供養に参るのですが、貴下お聞き遊ばして——お母様が大變なお力落しでゐいます。』

『カメンスキーで誰です？』

『お聞き遊ばさない？』ボーゼンと云ふ人と決闘遊ばして死んだ方です。夫が貴下、大切な一粒種の御子息ですから、そりやアお氣の毒よ、お母様の大變なお力落しと云つたら。』

『夫なら少しは聞きました。』

『ですから是非行きませんではネ。今晚か明朝、是非最一度入來しつて下さい、ネ、お待ち申してますよ、』と言捨てつて軽々と足早に玄關へ出た。

『今晚は伺へません、』とネフリユードフは跡から追蒐けて、『實はお願があつて参上つたのです、』と云ひつゝ玄關へ横付けになつて二頭の紅栗毛の馬を見た。

『どんな御用？』

『叔母からの手紙を持つて参りました、』と大きな定紋を刷込んだ小形の状袋を手渡しつゝ、『此中に詳しく書いてあります。』

『何で△いますか存じませんが、チャールスカヤの夫人は、妾が主人の公務上にまで勢力があるやうにお思召して在らつしやるらしいが、飛んだ事で△います。公務上の事なんか迎も妾に

は容喙しが出来ませせんし、又爾ういふ事は一切致しませぬ。併し外の方ではない、チャールスヤの夫人なり貴下なりの仰しやる事なら、妾も意地を張らずに規則を破りませうが、一體先ア何でムいます？」と黒い手袋を穿めた柔しい手で衣兜を捜りながら云つた。

「實は要塞に收檻されてる娘があります。全く身に覚えのない免罪ですし且唯今病氣ですから、何卒特別の御沙汰を願ひたいと思ひまして。」

「何て云ふ人です？」

「シューストワー——リダイヤ・シューストワ。手紙の中に書いてあります。」

「承知致しました。何とか出来るだけ取計らひませう。」と云ひつゝニス塗りの泥除のテカ〜光つた小型のフク〜した幌無し馬車に軽く飛移ると直ぐ日傘を翳した。同時に従者が馭者臺に飛乗つて合圖をすると、馬車は靜かに動き出さうとする其途端、マリエットは日傘で軽く馭者を叩くと、細い脚の紅栗毛は手綱をキューと引かれて頸を反らしながらタチタチと踏留つた。「是非入來しつて下さい、ネ、何卒、貴下の御勝手な御用ばかりで無しに」と嬌然しながら面

紗を下ろし、「さア、宜いよ、」と復た日傘で軽く馭者を突くと、馬車は靜かに軋り出した。

ネフリユードフは帽子を舉げて會釋した。サラブレッド種の逸物は靜かに鼻息をしつゝ石を蹴立て、凸凹する道を滑かに護謨輪の車を走らした。

第十六回

ネフリユードフはマリエット夫人と自分との間に交換された微笑を憶起しつゝ首を掉つた。

「漸と眼が覺めたか覺めないかの危なく復た彼の仲間引摺り込まれる處だ、」と腹の底で領きながら、扱て常から難有くも思はない奴らに頭を下げるのかと思ふと、イツモ自分を壓迫する煩悶疑惑が忽ち壓し被さつて來た。

扱て今度は何處へ行つたもんだらうか、再た出直すでもあるまいと暫らく考へた末が元老院へと方角を決めた。

元老院では直ぐ事務室へ通されたが、此大廣間の中央には風采の立派な頗る慇懃な官吏が多

勢詰めてゐた。で、其の中の一人から、マースロワの控訴狀が受理せられて審理調査の爲め官ウオルフへ廻附されてゐるといふ話を聞いた。ウオルフと云ふは伯父から添書して貰つた人と同人である。

『今週の中には議官會議がありません、』と一人の官吏は云つた。『尤もマースロワの件は多分間に合ひますまいと思ひますが、併し特別にお願いになつたら或は水曜日に提出されるやうになるかも知れません。』

で、事件が取調べられる間、待つてゐたが、決闘一條で持切つてゐる官更連の話を傍聴きして、初めてカメンスキーの決闘の顛末を精しく知つた。

其話は恚うだ。或る士官が六人で牡蠣を食ひに行つて、例の通り腹散三鱗腹喰酔つた擧句、其中の一人がカメンスキー所屬の聯隊の悪語を叩くと、カメンスキーは虚言者めと一喝した。すると對手はカメンスキーに打つて掛り、其日は無事に済んだが、其翌日が決闘で、カメンスキーは無残にも腹を突かれて二時間経つと死んで了つた。對手の男と立會人は直ぐ拘引された

が、併し二週間も経てば放免されると云ふ話だ。

元老院からの歸途に馬車を驅つて請願局の勢力家ウオロビョーフ男爵を訪問した。此男爵は宮廷附きの立派な官舎に住つてゐたが、玄間番はネフリユードフを見ると、男爵は接見日以外は一切來客に面會されない、殊に今日は陛下の御前に伺候中で、明日も亦謁見を給はる筈であると頗る尊大に構へた挨拶振だから、ネフリユードフは伯父からの添書を殘して、今度は議官ウオルフの邸へと行つた。

ウオルフは丁度今食事を了つて、例の通りの腹消化に煙草を燻らしつゝ座敷を運動してゐる處へネフリユードフは入つて來た。此のウラジミールウオルフは確かに圓滿な人物で、自分でも此圓滿を非常に高く買つて、何時でも此標準から總ての人間を見詰めてゐた。といふは畢竟圓滿といふ塵ばかりで目鮮しい立身出世をしたからで、婚禮をして一年に一萬八千圓の利を産み出す財産を手に入れたのも、自分の腕で議官の位置まで漕付けたのも皆此の申分の無い圓滿な氣象からである。其上に名聞を重んずる武士氣質があつて、此の武士氣風から一個人の私の苞

直を祕密で受取るやうな所爲は一切しなかつたが、併し手當とか報酬とか旅費とか日當とか名目を附けて政府から金を強請つて、其代りに若干かの仕事をするのは格別不都合だとも思つてゐなかつた。波蘭の或る縣の知事をした時、其同胞郷國を愛し祖先の宗教を奉ずるといふを廉に取つて、無辜なる人民を何百人も零落れさせたり監獄に投じたり流刑に處したりしたのは、嘗に不名譽と思はないばかりか、却て男らしい立派な愛國的の仕事だと信じてゐた。又貞實な妻や義理ある妹の所有物を悉く奪ひ取つたのを決して不正と思はないで、却て一家を整理する最良手段だと思つてゐた。一家と云ふは到つて平々凡々な妻と義理ある妹と極意氣地のない不容貌な娘とだけである。此の義理ある妹の資産を悉く自分の所有として、所有地は金に代へて銀行へ自分名義で預け入れてゐる。娘と云ふは佻しく心細く日を送つてゐるが、近頃は心床しの聖書いぢりを始め、アリーンやチャールスカヤ伯爵夫人のお法話のお席に出て自ら慰めてゐた。此外に放蕩息子が一人ある。十五から鬚を生やして酒を飲み初め、放埒に身を持壞して二十歳になつても何處の學校も卒業出来ずに借金ばかり拵へては親父を痛めつけた。初めての時

は二百三十圓を支拂はせ、二度目には六百圓の尻拭ひをさせて、今度限りに改心しなければ久離切つて勘當して了うと言渡されたが、處が一向平氣なもんで、改心どころか又二千圓の借金を拵へて、剩つさへ家に在たつて面白くないと不貞腐つたので、親父の勘忍袋は愈々切れて、最早親でも子でもないから何處へなと勝手な處へ行つて了へと言渡し、夫からといふものは自分でも男の子は一人も持たぬと言ひ、他の者も子息の事は一言も口へ出さぬ事にした。ウォルフは之で十分一家の整理をした意でゐた。

ネフリユードフが顔を出すと共に、ウォルフは足を留めて極馴々しげに會釋した。尤も己れが萬人に勝れた申分のない圓滿な人物であるのを街うやうな氣味合ひの、些と人を馬鹿にしたやうな微笑を含んでゐた。で、ネフリユードフが渡したチャールスキー伯爵の添書を讀みつゝ、『さ、何卒、腰をお掛けなさい。甚だ失禮だが、我輩は歩きながらお話しするから、』と云ひつゝ、衣兜に手を入れて野暮臭いキチンとした書齋の内を復た悠々と歩き出し、

『何分お心易く願う。何御用か知らぬが、チャールスキー伯爵のお手紙もある事だし、何なり

と我輩の力の及びだけは喜んで致さう。』

と云ひつゝ、頗る薫の高い薄色の煙を口から吐き出しながら、灰を落すまいと氣を附けつゝ葉巻を手に取つた。

『甚だ勝手なお願ひですが、』とネフリユードフは『此事件は成る可く神速に處理して戴きない。といふものは逆も控訴が成立しないで、愈々西比利亞へ流されるもんなら、何うも止むを得ませぬから寧ろ一日も早く西比利亞へ遣らして戴きたい。』

『如何にも、ニージニの一番船で行けたなら頗る都合が宜うごはせう、』とウォルフは尊大な微笑を含みながら、宛も之から人の云はうとするものを既に知つてやるやうな顔付をして、『何て云ふ四人でゐるノウ？』

『マースロワ。』

ウォルフは卓子の上の一束の御用書類の中から一件書類を取つて見て、

『マースロワ、宜うゐる。他の者とも相談して水曜日に開く事にしませう。』

『では辯護士へ電報を打ちせうか。』

『辯護士、何故辯護士が要ります？ 貴下が呼びたければ御隨意に御呼びなさいだが、元來如何いふ理由でゐるノウ？』

『實は控訴の理由が甚だ薄弱ですが、』とネフリユードフは云つた。『本とく、恚ういふ宣告を受けたのは全く鳥渡した行違ひだと思ひます。』

『爾う爾う、如何さま其様な事かも知れせんナ。併し元老院は其原因に遡つて決定する譯には行きませんワ。』とウォルフは嚴然として葉巻の灰を見ながら、『元老院は唯だ法の適不適及び解釋の當不當を考へるだけでゐる。』

『併し此事件の如きは實際例外だと思ひます。』

『如何にも、御道理。告訴人に云はせれば、何の事件でも皆例外でないのはありませんワ。併し我々は唯だ職制の命する所に従がつて、我々の義務を濟ます丈けでゐる、』と云つた。其時、葉巻の灰は尙だ持堪へてゐるが、割目が出来て危なく落ちさうになつた。

『ブテルブルグへは度々お出掛けですか？』と云掛けたウオルフは灰を落すまいとしたが、徐々落ちさうに揺れたので、静々と首尻よく灰皿まで持つて行つて灰を落した。

『如何でゐる、カメンスキーの一件は？ 非常ぢやアごはせんか。あたら青年を、太い事をやりをりましたナ。夫に一人息子ださうでござすから、親の身となつたら堪りますまい、』と矢張ベテルブルグの市中の者並に誰も彼も云つてるやうな事を云つた。チャールスカヤ伯爵夫人の人物や夫人の新信仰に對する熱心に就ては褒めも貶しもしなかつた、本來圓滿の人物たる渠には斯る詮議は確かに餘計な沙汰であつたからだ。

總てネフリユードフは軽く頭を下けて暇をした。

『お歸りか。之はお早々でござした。』と手を出しながら、『夫ではナ、若し御都合が好かつたら水曜日に来て食事をなさい。其時確たる御挨拶をする事にしませう。』

時刻は既う遅かつたので、ネフリユードフは叔母の家へと歸つた。



第十七回

チャールスカヤ伯爵夫人の餐晩は七時三十分で、其作法がネフリユードフには餘程目新らしかつた。給仕人は各自の前に皿を配つて了つて引退ると、後は各自が思ひ／＼にやるのだ。で、婦人達には少しも手を下させないのを男の役目としてゐるから、男は婦人の食事をする世話をすると共に自分も飲んだり喰つたりする二人前の働きをしなければならぬのだ。一順終つてから卓子に装置した電鈴鈕を押すと、給仕人は復た現はれて皿を片付けると共に次の料理を出すのだ。

料理は非常な贅澤なもので、酒も亦頗る高價のものであつた。佛蘭西人の包丁長は白い衣服を著た二人の助手を指揮して廣い明るい庖厨で働いてゐた。

食卓に就いたは六人で、伯爵夫婦と息子さん、(卓子に眩を突いてゐる近衛の亂暴士官が夫れた)、ネフリユードフ、佛蘭西人の女教師、夫から田舎から上京してゐる伯爵家の領地管理人とであ

る。

爰でも話頭^{わごしら}に上^{のぼ}つたのは矢張評判の決闘一件で、皇帝陛下が何と思召すかと頻りに話し合つてゐた。で、陛下が殺された男の母親の爲めに深く悲まれたのが解つたから、誰も彼も母親の爲めに悲んだ。が又、陛下の御心持が制服の名譽の爲め防衛した殺人者を嚴重に處罰するお思召でないのが解ると、誰の意見も忽ち一致して制服の名譽の爲め防衛した士官に對しては頗る寛大であつた。唯、伯爵夫人ばかりは性質の勝手氣儘な無思慮で大不承知を唱へた。

『酒の上だからッて、何の罪もない行末頼母しい若い者を殺するといふ法は無い。甚麼な理由が有らうと勘辨出来ませんネ。』

『さア、そこが俺には解らんのだ、』と伯爵は云つた。

『妾のいふ事は何時でも貴郎ばかりに解らないのです、』と伯爵夫人はネフリユードフに向つて、『誰にも解る事が良人ばかりには解らないのです。妾が云ふのは母御さんが實にお氣の毒だし、第一、人を殺したものが却て褒められて得々としてゐるなんて、其様な間違つたことがありますか。』

すか。』

すると其時まで黙つてゐた息子の士官は殺した方の味方をして激しく母の伯爵夫人を攻撃した。其脱に依れば、苟も軍人たるものは此場合に此手段を取らねば同僚からは卑められて聯隊を追出されて了うと云ふのだ。ネフリユードフは何方の側にも加はらずに唯だ黙然として聞いてゐるが、自分も嘗て士官であつたから、賛成こそしないが、若きチャールスキーの意見は十分に理解めた。が、軍人の名譽の爲めなら人を殺しても關はぬといふ議論を聞くと共に、監獄で見掛けた若い美男の罪人が喧嘩の對手を殺した爲めに鑛山服役を宣告されたのを憶出して、二人の運命を比べずにはゐられなかつた。二人ながら酒の上で人を殺したのは同一でありながら、一人は百姓であるが爲めに妻や子と生別れをして、足には重い鎖を付けられ、頭髪は剃り陥たれて西比利亞へ徒刑に遣られ、一人は士官であるが爲めに兵營内の立派な坐敷に置かれて美しい物を食ひ、美しい酒を飲んで讀書してゐる。加之も一兩日の中には元の通り自由に釋放されて却て人を殺した爲めに名が高くなるのだ。

と思ふと辛抱が仕切れなくなつて、ネフリユードフは心に思ふ儘を遠慮なしに陳べ立てると、初めは伯爵夫人だけは賛成する容子だつたが、末には他の者と同様に黙つて了つたから、矢張何か氣に入らぬ事を云つたものと見える。

食事が終つてから夜になると、舞踏室の大廣間に倚掛りの高い彫刻した椅子が幾列も並べられ、正面には説教者の爲めに駭掛椅子を据ゑ、其傍の卓子には水を入れた壺を準備した。で、碩徳の聞え高いキーゼウエツテル師の説教を聞くべく續々と集つて來た。

立派な馬車か何臺となく玄關に横村けにされ、贅澤に飾り立つた座敷には絹や天鵝絨やレーズの伊達を飾つた貴婦人達が精一杯のお化粧をして花やかに列んでゐる中に、制服の軍人や燕尾服の紳士が入交つてゐた。其席末には五人の平民、二人の従僕、店持商人、給仕人、及び駈者等が列なつてゐた。

すんぐりの嚴つい胡麻鹽髮のキーゼウエツテルは英語で説教し、鼻眼鏡の若い婦人が流暢な露西亞語に巧みに通譯した。

キーゼウエツテルは吾々人間の罪は頗る大なるが故に之に對する罰も亦從つて大且避くべからざるもので、此の重い神罰が必ず來るべきを豫期する時は一日も悠うして安心してはゐられぬと徐ろに説出して、

『親愛なる兄弟及び姉妹よ、暫らく吾々が何を爲しつゝあるかを考へて見よ。吾々が如何に生活しつゝあるか、如何に吾々が仁慈大悲の大御神に向て罪を犯したか、如何に基督を苦めたかを考へて見よ。吾々は殆んど赦されべき道も遁るべき術も救はるべき道もないのを理解するより外はない。吾々は實に滅亡すべく宣告されてゐる。恐ろしき運命、堪へざる苦みが吾々を待つてゐる。』と涙交りの震へ聲で、『オウ、如何に救はれべきや、兄弟よ。如何に吾々は此の恐ろしき消すべからざる火より救はれべきや。家は焔に包まれたり。然れども身は遁るゝの道なし。』と、爰で暫時聲を途切らすと共に涙が頬に傳はつて流れた。八年間此男は何時でも説教する時に必ず此の大好きな文句まで達すると、自づと悲しくなつて涙を流し鼻を塞らして嗚咽び返るのだ。

其處ら此處らでは嘔泣きの聲が聞え、伯爵夫人はモザイクの小卓に肘を突き、両手で頭を抱へて忍泣きをし、肥つた肩が慄へてゐた。駭者めは此容子に喫驚けて了つて、恰度道傍で往來の人を引倒さうとでもした時のやうに呆氣に取られて了つた。其他の面々は何れもエカテリナ夫人と同じやうに忍泣きをしたり鼻を拭んだりしてゐた。流行の伊達衣裳を著飾つた親父酷肖のウォルフの娘は両手で顔を隠して跪いてゐた。

廳て説教者はヌウツと顔を擧げ、俳優が舞臺で行るやうに如何にも嬉しさうな微笑を含みつ、
 『爰に救はれべき道がある。』と再た説き始めた。『爰に喜ばしき安らかな道がある。救ひは吾々のために苦みに委ねたる神の一人子が吾々の爲めに流した血の中にある。彼の苦みと血とは吾々を救つた。』と復た涙交りの聲となつて、『兄弟姉妹よ、吾々をして世界の罪を贖うために一人子を與へたる神を讚美せしめよ、彼の神聖なる血は——』と、爰まで聞いた時、ネフリユードフは何とも云へない不快な氣持がしたので静と座を離れた。で、顔に八の字を寄せ、人事ながら恥かしくて思はず歎息をしたかつたのを忍びつゝ、祕密りと爪先立ちして自分の部屋に戻つた。

第十八回

翌朝ネフリユードフが衣服を著更へて二階を下りやうとする處へ、家僕はモスコの辯護士
 フアナーリンの名刺を持つて來た。

フアナーリンは自分用でベテルブルグへ來た序に、若しマースロワの控訴裁判が直き始まりさうなら列席したいと容子を尋ねに來た。ネフリユードフの電報は行違ひとなつたのだ。で、ネフリユードフが愈々近日の中には開廷されて某々議官等が出席する筈だと語るを聞き、フアナーリンは莞爾して、

『丁度元老院の三輻對が揃ひも揃ひました。ウォルフがベテルブルグのお役人様で、スコウオロードニコフが理窟一天張の法律屋で、ベイと云ふのが實際の法律家。先づ一番人間らしい呼吸の通つてる奴は此男で、此奴だけは幾分か頼みになります。それから請願局の方は如何しました？』

「實は之からウオロビョーフ男爵の許へ行かうて處——昨日尋ねたが會へませんか？」

「爾うでしたか。時にウオロビョーフ「男爵」ていふ理由を知つてますかネ？——ウオロビョーフ「男爵」てのは妙でせう、と辯護士フアナーリンは此の純然たる露西亞人の名前に不似合な外國の肩書(かたがき)といふは例へば李兵衛伯爵(かたがき)とに力を入れ、(かたがき)「恠ういふ仔細です。今のウオロビョーフのお祖父さんて人がパウル皇帝の——たしか舍人か何か詰らぬ役をしてりました。處で皇帝が何とか肩書を附けて嬉しがらせてやらうと、洒落半分(しやれはんぶん)に「汝に男爵を授く、朕が意に背く勿れ」と勅(みこと)のらせて、夫からウオロビョーフ男爵が出来て、先生大得意なんだ。イヤハヤ煮ても焼いても喰へないイヤな親爺ですよ。」

「爾うですかネ。其のイヤな親爺に之から會ひに行く處です。」

「宜いでせう。それぢやア其處まで御一緒にお伴しやうかネ。」

で、二人は出掛けやうとして前座敷まで行くと、家僕はマリエットからの手紙を持つて来た。其手紙は恠うである。

「早速ながら彼の一條は餘人ならぬ御前様の御頼みなれば曲けて主人に申聞け、主人よりにはちに右監獄の署長に親展書を送りて放免に相成るべきやう取計らひ申候間、左様御承知可被候。猶ほ其中には是非とも御訪ね下さるゝやう山山待入り申上候マリエット。」

「此通りだ、とネフリユードフは辯護士に向つて、「之だから實に恐るべしだ。七ヶ月も密室禁をされた女が細君の唯一言で直ぐ放免されて了う。」

「何時でも其通りです。何しろ巧く行つてお目出度い。」

「お目出度いやうだが、實は餘りお目出度くない。といふは、此手際で推すと、益々平生何をやつてるか思ひやられる。七ヶ月も罪もないものを檻禁して置いて、何をしてゐたんだ。」

「だがネ、左も右も此方の思ふ坪に首尾よく行けばお目出度いサ。——夫ぢやア御伴致しませう、とフアナーリンは云ひつゝ、戸外に待たせて置いた立派な備ひ馬車に合乗で出掛けた。

「ウオロビョーフ男爵の處でしたナ？」とフアナーリンは念を入れて訊ねつ、馭者に行く先を告げると、馭者は二頭の駿馬にいと鞭呉れ、一散に駈けて忽ち男爵の邸に著いた。

丁度男爵は在邸して玄關へ通されると、咽喉佛の高い首の細っこい頗る瀟洒たる美男子が制服扮装で二人の貴婦人に應接してゐた。ネフリユードフを見ると、非常に嫺雅かな驚の足を踏む歩行振でシト／＼と進んで来て、『誰方様でムいます？』

と云つて、ネフリユードフの名前を聞き、

『貴下なら男爵がお噂をしてをりました。唯今直きに、』と叮嚀に會釋しつゝ奥の方へ行き、聽て喪服を纏ふた泣顔の婦人を伴つて再び戻つて来た。此婦人は眼を泣腫らして涙に頬を濡らしてゐるが、他の見る眼を恥ぢてや泣顔を蔽さうとして、前額に縮し上げた面紗を瘦枯れた節高の指で下した。

『さア、何卒此方へ、』と美男の祕書役はネフリユードフに云ひつゝ氣も輕々と書齋の戸口まで行つて扉を掛けた。ネフリユードフは突と室の中へ進むと、中脊のズングリした五分刈の紳士がフロックコートで肱掛椅子に凭れ、大テーブルに對つて莞爾々々してゐた。頭髮から口鬚願髯までが悉く白かつたが、顔だけは若々しく赤味を帯びて、人の好さうなのが著るしく目に

立つた。ネフリユードフを見ると、到つて馴れ／＼しい笑顔を作つて、

『ようおいでだ。久し振で會つて誠に大慶だ。お母さんとは古いお親昵で、貴下にも小兒の時分と——夫れから士官をしておいでだったの、其時分一度お顔を見た事があるが、誠に久し振だ。さサ、腰をお掛けなさい。何なりと御用を承はらう……ふむ、ふむ、成程、』と眞自な頭を掉立てながらネフリユードフが諄々と語るフキョードーシャの物語を聞きつゝ、『ふむ、ふむ、成程、成程。如何にも、如何にも、能ウ解つた。如何にも、成程、どうも氣の毒千萬な。道理。道理。——夫でと、請願局へは書面を出しましたかい？』

『請願書ですか。請願書は此通り認めて來ました、』とネフリユードフは衣兜から出して見せつ、『そこで、折入つてお願がムいます。唯今お話し申したやうな事情ですから、何分特別の御詮議を願ひたいものです。』

『承知しました。お若いのに、イヤどうも感服致した。御奇特な事だ。宜しい、お引受けした。俺から直々に奏聞する事に致さう。如何にも惘然な次第だ、』と持つて生れた元氣な容貌を強や

りに響めて同情を見せやうとした。「實に愍然千萬な咄だ。多分其女は尙だ小女で、夫婦の情愛が理解出来なかつたので、亭主の方でも面白くなくて痛い目に會はせる。夫が長じて到頭裁判沙汰になる騒動を持上げたんだらう。夫だから時が経つて仲直りが出来れば最う何の事もない。若い夫婦間には能く有る奴だ。宜しい、宜しい。俺から直き／＼に奏聞することに致さう。」

「何分何卒。伯父の伯爵からも奏聞する筈になつてます、と言掛けると、尙だ言切らない中に男爵の顔色は見る／＼變つて了つて、

「だが矢張、請願局へ公へむきに書面を出した方が宜しいだらう。俺は俺で無論出来るだけの事はして上げる。」

其時美男の祕書役は例の科を作つた歩き振を街つて復た顔を出した。

「先刻の御婦人が最う一應何か申上げたいさうでムいます。」

「宜し／＼、此方へ来るやうに云ひなさい。イヤ涙を覆すとも覆すとも、散三に泣付かれたワ。あの涙を綺麗に乾かしてやりたいが——併し手の届くだけ骨を折つてやるまでの事だ。」

處へ婦人は入つて来て、

「御免下さいまし、と會釋しつ、『先刻お願いするのをツイ忘れましたが、何卒あの男が娘を見捨てないやうにお骨折を願ひます。アレは見捨てゝ了う意でをりますから。』

「可也々々、先刻も云つた通り、俺の力の及ぶだけはナ——」

「夫では男爵。何卒妾を助けるとお思召して——」と云ひつゝ婦人は男爵の手を取つて接吻しやうとした。

「俺の手の盡せるだけは十分行つて上げやう。」

嫌人は連りに難有がつてお禮を云ひつゝ歸つて了つた。ネフリユードフも續いて暇をひをして歸らうとした。

「夫では俺の力で出来るだけの事は行つて上げやう、と男爵は別際に云つた。「左も右く先づ司法省の意見を問合はしてから其返事次第で出来るだけ行つて上げやう。」

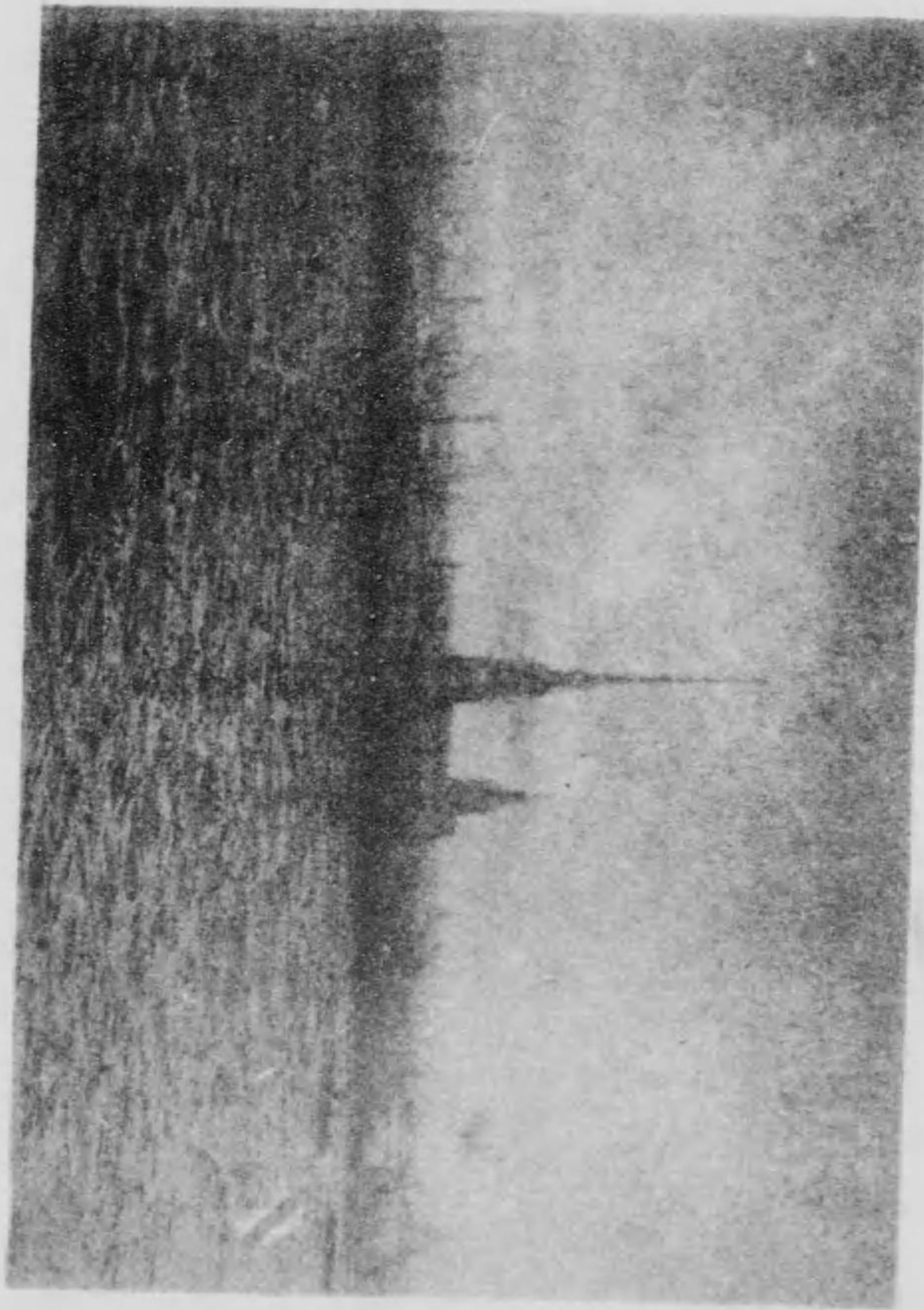
ネフリユードフは會釋をして歸つた。其歸途に請願局の事務室へ立寄つて見ると「元老院と同じ

やうな立派な室に立派な風采の多勢の官吏が衣服も言語も堂堂と重々しく威儀を作つてゐた。此體を見ると、ネフリユードフは心中ムラ／＼として、『幾人在るだらう。幾人も在るやつが何れも是も能く肥えてをる。襦衣や手が揃ひも揃つて綺麗な事は。渠奴らの靴のテカ／＼光つてる事は。一體先ア誰が渠奴らを肥らしたり粧飾したりするのだらう。誰を見ても氣樂らしい暢氣な面貌をしてをるワイ。罪人と一つにならんのは勿論だが、百姓達と比べても全で話にならぬワイ。』

と云ふやうな考へが偶つと浮んで來た。

第十九回

ペデルブルグの監獄囚徒の運命を握つてゐるは名譽赫々たる獨逸系統の男爵の老將軍であるが、人の噂では些と老耄した氣味で、全で小兒は化つて了つたと云ふ評判だ。澤山、勳章を持つてる中で、白十字架章だけを平時でも佩用してゐるのは、高架索に在動中、武装した農夫を



指揮して自由の爲め祖國の爲め一家の爲め奮闘した一千人の義人を殺戮した功勞で授けられた大得意の勳章であるからだ。其後波蘭に在勤中、露西亞の農民を指喚して種々雑多の罪惡を行はしめた手柄で益々澤山の勳章や徽章を胸間に飾立てた。其他何處へ行つても慙ういふ風に忠勤を抽んでたから、今日老耄れ爺さんとなつても猶ほ地位を保つて、立派な邸や収入や尊敬を得てをるのだ。

渠は上から布達された法令を嚴密に奉じて遺憾なく勵行しやうと懸命になつてゐた。世の中の有りとも有らぬものは悉く變へて了う事が出来るが此法令ばかりは永なへに變える事が出来ないやうに格別に難有がつてゐた。で、男女の國事犯を取締る職務を忽諾せにせず、大拭の者は密室に檻禁し、十年経たない中に氣違ひになるか、肺病に罹るか、或は自ら絶食するか、硝子の破片で血管を切るか、首を縊るか、憤死するかして半数以上を殺して了う。

勿論慙ういふ事實は目前に生ずるのだから知らぬわけはないが、落雷や洪水に原因する不慮な變事ほどに心を動かされなかつた。といふは是等の多數の罪人が慙ういふ果敢ない最後を遂

けるのは皇帝陛下から下し給へる法令を勵行した結果ではあるが、本とく、法令は十分勵行するが當然のものであるから、其結果が怎うならうと止むを得ないので、初めから問ふに及ばないのである。であるから這般な事は頭から考へる必要は無いので、這般な下らぬ事を心配して大切な職務を怠たるやうでは夫こそ大變である。軍人としては這般な事を全然考へないのが愛國の義務だと心得てゐた。で、一週に一度は監獄を巡視して囚人達の希望を訊く役目を實體に守つて決して等閑にしなかつたが、何を嘆願されても只無言で靜かに聞いてゐただけで、一度たりとも其願を聞届けてやらないのは、何故かといふと囚人の希望が何時でも法令と反してゐるからである。

ネフリユードフが此老將軍の邸へ馬車を飛ばした時、監獄内では胸のあたりを寸断に割いた衣服を着て髪振亂した女囚が眼を一杯に開いて睨みつけ、失望落膽の聲を振擗つて壁や戸へ頭を打つけては怒鳴つてゐた。

折々監守が戸の穴から内部を覗いては復た後へ戻つて、往つたり來たりしてゐたが、看守の

眼が戸の穴に見える度に叫り聲が一段と高くなつた。

『何だつて覗きやアがる。さア殺して呉れ。小刀を呉れ。毒を呉れ。何故殺さないんだ。さア殺して呉れ。えッ、残念しい。死にたくても死ねない!』

すると登音が聞え、廊下口の戸が開いて、士官の服を着た役人が二人の押丁を従へて見廻りに來た。左右の檻房の戸の穴からは急いで覗いて見たが、士官は通過する度に一々穴の戸を閉めた。

『極道め! 人非人め! 畜生め!』といふ聲が一方からすると、一方では又戸をドン／＼叩いて叫く者がある。

見廻りの士官の顔色は變つて了つた。イクラ度々の事で慣れツこになつてゐても、監獄の内部の景色は恐ろしくも凄まじかつた。

聽て前の叫り散らしてゐる女の檻房の戸を排けるや否、女は矢庭に飛出して、

『さア、獄外へ出して呉れ、出して呉れ!』と片手に衣服の破れた胸を引攪み、おどろに髪を

振亂して大聲で叫り立つた。

『コラ、黙んなさい。其様な事を云ふても通らんのは知りやうぢやらう。下らぬ事を云ひなさん勿。』と云ひつゝ、士官は戸口に突立つた。

『出す事が出来ねえなら、寧ろ殺して呉れ。』と女は愈々叫いて士官を推しのけやうとした。

『黙んなさい。』と士官は一喝した。

が、女は諾かなかつた。

士官は手を舉げて押丁に指揮すると、押打は女を取つて押へた。

女は愈々叫き立つた。

『黙らんか。汝の利益にならんぞ。』

女は一向耳にも入れずに叫いてゐた。

『黙んなさい。』

『黙んねえや。』

と云つたが、如何したのか急に情なさうに哀れな嘆息を吐いて、聽て到頭静まつて了つた。押丁の一人は女の兩手を背ろへ廻して縛りつけ、一人は木綿の布の捻つたのを口に割込んで猿轡を穿めた。

女は瞎と眼を露出して士官と押丁とを睨みつけた。

顔は一面に攀絡つて漸く鼻で呼吸しつゝ、兩肩を耳のあたりまで怒らしてゐたのが、段々と復た首垂れて了つた。

『ジタバタしたくても最う出来まい。度々云つて聞かせた通りだ。汝が自業自得で慙ういふ目に會ふのだ!』と士官は云つた。

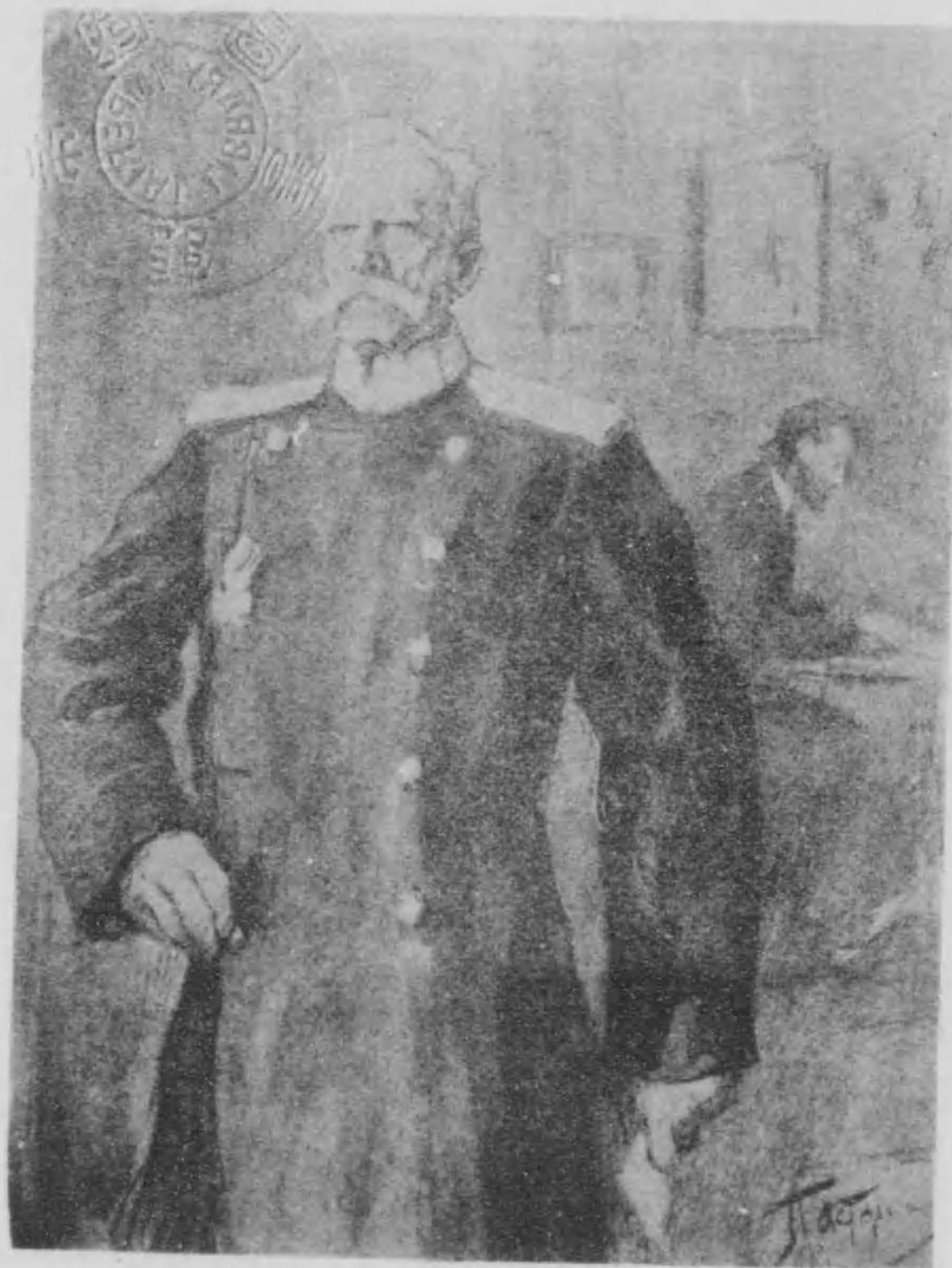
其時、監獄の塔のオルガン装置の時計は「シオンの神は偉いなる哉」の譜を鳴らし終ると一時を打ち、番兵は撤退してツァールの御墓には御燭光が點された。此讚美歌を聞くと、ネフリードフは曾て十二月黨の物語を讀んだ時、此の妙なる音楽が一時間毎に奏されて、終生禁錮されてる囚人達の心の奥に如何に深く響いたかと書いてあつたのを徐ろに憶出した。

丁度其時である。

老男爵將軍は薄暗い坐敷で、屬僚の兄弟だとか云ふ若い術士とモサイクの卓子に相對つて茶碗の皿を廻してゐた。(コックリ様のやう)術士の繊細な軟かい水々した指と老將軍の皺だらけの節高の硬い指と互に組合はした手がabcを書いた文字紙の上を皿と共に動いてゐる。人は死んでから怎うして互に相識る事が出来るかと云ふ老將軍の卜占に此皿が答へてゐるのだ。

ネフリユードフが名刺を通じた時はジャンダークの死靈が皿を借りて答へてゐる最中で、半分までは答辯を作つて、恰も皿がBとYとに留つてから更に音を軋らせて動き出し、今度は何の字で留るだらうと互に揣摩して、將軍はBだと云ひ、術士はIだと云ひ、二人ながら夢中になつて、將軍は眞白な蜘蛛眉をビクビクと動かし、術士は血相を變へ唇を慄はして皿の動くと共に視線を轉じてゐた。

落然ネフリユードフの名刺が邪魔をしたので將軍は苦い顔をした。が、暫らく経つてから名刺を取つて見て、鼻眼鏡を掛けて腰の痛いのも關はずに、痲痺れた指を揉みながらウ、ンと噓



つて、身を反らして轟然と突立つた。

『書齋へ通しなさい。』

『御免を蒙りまして、手前一人でやつて了ひませうか？』と若い術士は云つた。

『宜からう。貴公一人でやつて了ひなさい。』と將軍は嚴乎と決心したやうに言渡しつゝ、大股に歩調を取つ、書齋へ來た。

『能ウムつた。』と將軍は皺枯聲で馴れ／＼しく、卓子の傍の肱掛椅子を指さして、

『さア……ペテルブルグには最う暫らく滞在かエ？』

ネフリードフは著いた許りだと云つた。

『あア、左様か。お母さんは——相變らずお壯健ぢやらうナ？』

『母は物故りました。』

『物故らしやつたかい。夫は一向知らなかつた。残念な事ぢやノウ。時に、いつぞや悴が貴下に面會したとか云ひをツたツけが。』

將軍の子と云ふは父と同じやうな立身の道を志さして、陸軍の學校を終つてからは探偵局に出仕し、今では國事探偵の取締をして大得意である。

『貴下のお父さんとは暫らく同役をして兄弟同様に親善くしたもんぢやが、貴下も矢張何處へか御奉職ぢやらうナ？』

『私はマダ何處へも奉職してゐませぬ。』

將軍は甚だ感服出来ないやうに頷いた。

『少々お願があつて上りました。』

『は、ア、如何いふ御用でムる？』

『私のお願が見當違ひであつたら御免を蒙りますが、是非ともお願ひしたのでムいます。』

『何でムる？』

『貴下の御支配の監獄にグールケーウキチといふ者があります。其者の母親が是非面會して書を差入れたいと願つてをりますが、何卒許可して戴きたいので。』

將軍は耳を澄まして聞いてゐるが、善いとも悪いとも云はなかつた。で、首を傾け眼を閉ぢて頻りに沈吟してゐるらしかつた、其實少しも考へてゐないのだ。何でも總て法令に随つて答へれば濟むので、少しも考へる必要はないから、考へる處か、頭からネフリユードフの願を確に氣に留めずに、唯だ精神的の休息をしてゐるのだ。

『夫は俺の知つた事ぢやムらぬ、』と暫らくしてから發言した。『俺一個の心持では何にも計らへんのぢや。面會に關しては皇帝陛下がお定めになつた規則がある。夫から書籍の事はナ、監獄内に圖書室があつて、囚徒が讀んでも差聞ない書籍は悉く蒐集してあるのぢや。』

『でムいませうが、グールケーウキチが讀みたがつてますのは監獄の圖書室に無い理學上の書籍で理學を勉強したがつてをります。』

『いや、夫は不可ん、渠奴等のいふ事を恃にさつしやる勿、』と、暫らく話を途切らしたが、聽で、勉強したいのぢやムらぬ。兎角酢だの蒟蒻だのと御託を吐きたがるのぢや。』

『併し囚徒だからツて何か仕ませんでは——獄中の苦悶を慰める爲め何か仕たいでせう。』

『そんな御詫を陳べて始終ブツクサ云ひをるのが渠等の辯ぢや。俺は能う知りをる。』

と將軍は囚徒一般——殊に其内の悪い者の話をして聞かせた。

『元來俺が許の囚徒どもは外の監獄では決して得られない便利を與へられてをる。』と得々として、監獄制度の目的は素と囚人に愉快なる家庭を與ふるにあるのだと説いて、當監獄内に設備された囚徒の娛樂を一々數へ上げ、

『成程、昔は囚徒を残酷に扱つた事もあつた。が、今では非常に寛大なもんぢや。例へば三食の一度は必ず肉を附ける。加之もカツレットとかリゾールとかを一と皿附ける。日曜日には尙だ此外に美味いものを最う一度喰はせる。神様のお庇ぢやノウ、露西亞人は何處に在ても氣樂に食べられるのぢや。』

老人は誰でも同じ事で、將軍も矢張知れ切つた事を諄々と繰返して、囚徒の要求の言語道斷極まる事からお上のお慈悲を難有いとも思はない恩知らずの罰中りな事を數へ上げた。

『例へば宗教上の書籍ぢやとか古い雜誌ぢやとかは勝手に讀ませるやうに圖書室を設備して置

く處が渠奴等は減多に讀書しない。初めは多少か讀むやうぢやが、段々と願望しても見ない。新らしいものは半分も紙を切らずにあるし、古いものは全ページを翻した痕跡が無いのぢや現に俺が試験した事がある。』と將軍は微笑を含みつ、『詩みに如何かと思つて、或る書物の間に紙を故と挟んで置いたもんぢや。然るに何時まで経つても其紙の位置が一向變らんぢやないか。書く事だつて矢張禁じてないのぢや。石盤や石筆はチャンと用意して慰みに書けるやうにしてある。夫ぢやから書いては消し、消しては書けば随分と慰みとなるぢやらうと思ふが、トンと書かんのぢや。併し渠奴等も初めの中こそゴテゴテ騒ぎをるが段々と斷念めて沈著いて了う。爾うなると不思議に肥つて來るワイ。』と將軍は其言葉の中に恐ろしい意味が含まれてゐるのを一向氣が附かないで云つた。

ネフリユードフは此の皺喰れた老耆れ聲を聞き、コツ／＼して腕や、眞白な蝟髪眉の下の艶の抜けた眼や、軍服の襟に埋もれてる綺麗に刺つた軟かな願や、殊に首に掛けてる白十字架章——無鐵砲な残酷極まる大袈裟な殺戮をした功勞で賜はつたのを大得意で自慢してゐる此の白

十字架章を見ると、無心で口にする言葉の裏に恐ろしい意味が含まれてゐるのを説明して聞かせた處で到底無益だと思ひ、更に話頭を轉じて、今朝がた聞いた女囚シユーストワ放免の命令が既に來たか如何かと訊くと、

『シユーストワ——シユーストワ？ 頓と聞いたことがないが、何しろ多勢ぢやから一々名を覚えてをらんワ。實に又多勢來てをるのぢや、』と宛も多勢の囚徒が舞込んで餘計な厄介を掛けると云はぬばかりに云ひつゝ、鉦を鳴らして秘書官を呼んだ。

で、秘書官の來る間、頻りにネフリユードフに仕官をしろと懇々と説論した。『立派な誠忠無二の人物は、』(と自分も矢張此中の一人としてをるのだ。)『皇帝陛下の爲めにも國家の爲めにもお役に立つ。俺を見さつしやい。此通り年を老つても尙ほ根限り腕限り陛下及び國家に御奉公しをるのぢや。』

秘書官と云ふはキョト／＼した悪猾さうな眼付の瘦せ衰へた男で、ツカ／＼と入つて來て、將軍の間に應じて、シユーストワは奇妙な變な處に檻禁されてゐるが、尙だ放免の命令は受取

らないと云つた。

『命令さへあれば直ぐ免してやる。何も道樂に入れて置くのぢやムらぬ。渠奴等の來るのに餘り難有くないのぢ、』やと將軍は強に笑止しがつて笑つて見せやうと顔へ皺を寄せた。

ネフリユードフは最う片時も辛抱が出来なかつた。此の因業老爺の態度が胸糞の悪くなるほどムカ／＼して來たり、又氣の毒になつたりする心持を顔色に出すまいと強に制へつけて、一刻も早く逃出さうと座を起つた。處が老人は老人で、昔しの同僚の息子が無分別不心得極まつた横道に外れてるのを他に見過して意見を加へずに歸すには忍びないやうな氣がして、

『夫では左様なら、何卒悪く取らつしやる勿。公けの事では誰彼の差別なくお上の規則通りに計らうのが俺の性分ぢや。夫からノウ、之は俺の老婆心ぢやが、監獄に入つてゐるやうな人間と交際つてはなりませんぞ。一人として碌なものゝムらぬ。どれも之も手におへぬ破落戸ばかりぢや。俺は能ウ知りをる、』と少しも疑の餘地を許さない口吻であつた。

全く將軍は此通りに信じて少しも疑つてゐないのだ。若し少しでも疑つてゐたなら、圓満の

一生を送り又現に送りつゝある大人物を自任する事が出来なくなる。却て反對に若い時から此老齡になるまで十年一日の如くに良心を賣つて生存してゐた奸物を自覺しなければならなくなる。

『先づ第一に仕官をさっしやい。夫が上分別ぢや。陛下は常に誠忠の人物を御懸望遊ばしてゐのぢや。國家もぢや、』と云ひつゝ將軍は又更に云ひ足した。『例へば俺初め他の者が貴下のやうに仕官を嫌つたら如何ぢや。唯だ政府のする事を高見の見物で批評ばかりしてゐて助けてやらなかつたら如何ぢや。』

ネフリユードフは吻と溜息を吐きつゝ低く腰を屈めて、將軍の叮嚀に伸ばした大きな節高の手を握つて會釋しつゝ室を去つた。

將軍は甚だ面白からぬ氣色で首を動かさず、腰を摩つて座敷へ戻ると、術士はジャンダークの精靈が皿を借りての答を控へて失刻から待車臥れてゐた。將軍は鼻眼鏡を掛けて其答を見ると、『人は死後其の星の如き魂魄より發する光に由つて互に相認むるを得、』とあつた。

『オウ、』と將軍は感服して頷き、暫らく眼を閉ぢてゐたが、聽て、『それぢやが、若し魂魄の光が同じぢやつたら如何ぢや？』と更に疑問を掛け、再び術士と指を組合して皿廻しを初めた。

辻馬車馭者はネフリユードフを乗せて門を出ると、『奈何です、此邸は——クサク／＼しますナ。旦那、私は旦那、逃出しちまはうかと思つた。』

『全くクサク／＼するナ、』とネフリユードフは頷きつゝ吻と嘆息を吐いた。で、中空に漂ふ鼠色の雲やネワ川を通ふ小舟や小蒸汽の舳洗ふ小波のキラ／＼するを見て、漸つと氣が爽然した。

第二十回

其翌日は愈々マースロワの控訴が元老院で開かれるので、ネフリユードフと辯護士ファナーリンは出頭して、澤山の馬車が待つてゐる宏大な玄關先きで顔を合はした。で、宏大な嚴かしい階段を昇つて第一階へ行くと、豫てから案内知つてゐるファナーリンは向つて左に折れて、法律實施以來幾年月の古色を帯びた扉を排けて奥へ入つた。

狭い室で外套を脱捨てながら、丁度今、拂りの議官が悉く出揃つた處だと廷了から聞きつゝ、眞白なシャツの胸に白のネクタイを結んだ燕尾服では唇邊に己惚の微笑を含みながら次の室に入つた。右方には大きな戸棚と卓子とがあつて、左の榮螺形の階段からは丁度制服を着た立派な官吏が大きな書類挾を小脇に抱へて下りて来る處だ。此官吏は誰の目にも着く眞白な長髪の長老めいた容貌の老人で、短いコートに鼠色のズボンを着いてゐた。其傍には二人の廷了が恭しげに侍いてゐるが、廳で突と立つて戸棚の中に隠れて了つた。

只見ると、自分と同じ燕尾服に白ネクタイの辯護士が在たので、フアナナリンは直ぐ會話の火蓋を切つて盛んに氣焔を吐き散らした。

ネフリユードフは其間、同室の人達の容子を見廻した。凡そ十五人ばかりで、其中の二人は女である。若い方は鼻眼鏡を掛け、年々老つた方は最う胡麻鹽頭髮であつた。

此日は誹毀事件の控訴が開かれるので、常よりは多數の傍聽人があつた。大抵は新聞社の人達ばかりだ。

立派な制服を着た、目元のホンノリした櫻色の美男の廷吏は手に紙を持ってフアナナリンの傍へ来て關係の控訴を尋ね、マースロワの件だと聞くと何だか紙へ書留めて去つて了つた。

其時戸棚の戸は開いて、長老然たる容貌の老人は再び現はれた。今迄の短いコートを脱捨て了つて、金糸の縁縫ひをした金屬の胸板付の制服扮装で、ビカ／＼キラ／＼して恰で鳥のやうだ。有繫に此の奇妙な扮装を自分でも感服しなかつたと見えて、常よりは急ぎ足で、入口と對ひ合つた口から外へセカセカと出て行つた。

『あれが元老院一番の豪者のベイだ、』とフアナナリンはネフリユードフに向つて云つた。夫から復たネフリユードフを仲間の辯護士に紹介し、之から開かれる控訴事件の顛末を話して頗る興味ある訴訟と考へると云つた。

愈々控訴の審問が開かれるので、ネフリユードフは他の傍聽人と一緒に左へ曲つて法廷へ出廷し、フアナナリンを初め一同、句欄の背後の席に着いた。ベテルブルグの辯護士だけは句欄の前の書卓に對つた。

元老院の法廷は巡回裁判所の刑事部ほどに廣くなく、裝飾も極質素であつたが、議官連の卓子の卓氈は萌黄羅紗でなくて、金糸の縁縫ひをした真紅の天鵝絨であつた。で、何處の裁判所にも附物の法典の三菱玻璃(プリズム、露國の法廷には必ず備へらる)や偽善の本尊の聖像や壓制の看板たる皇帝の肖像が飾り附けてあつた。

廷吏は例の嚴格な聲で開廷を呼ばつた。一同は例に従つて起立し、各議官連は何れも制服で出廷して背ろの高い椅子に座し、刑事法廷の判事と同様に態と無頓着な容子を作つて卓子に凭れた。

列席の議官は四人で、綺麗に顔を剃つた細面のニキーチンは裁判長の席に着き、仔細ありけに唇を結んだウオルフは小さい白に手で御用書類を頻りに捻くつてゐた。其次はデク／＼肥つた痘痕面のスコウオロドニコフと云ふ元老院一番の法學學者。最後に着座したのは即ち長老然たる容貌のベイである。

議官連と共に書記官長が出廷した。夫から綺麗に鬚を剃つた色の淺黒い中香弱形の哀れッほ

い黒い瞳の検事が出廷した。奇妙な制服姿に變つて了つた上に、今年で六年間一度も會はなかつたからネフリユードフは鳥渡看違へたが、此検事が昔しの書生時代の親友であるのを直ぐ氣が附いて、

『彼の検事はセレーニンぢやアないか、』と辯護士に訊くと、

『セレーニンだが——何故?』

『セレーニンなら能く知つてる。極の好人物だ。』

『極の好人物かも知れぬが、役人臭いお誂向きの検事さ。だが、彼の男の辯論は中々の聞き物ですぞ。』

『だが、彼の男なら如何なる場合にも良心に従つて決するだらう、』と昔しの二人の親密な關係からセレーニンの愛すべき美質、即ち正直で潔白で高尚であつた事を憶浮へた。

『先ア其様な事は——既う初まります。』とファナーリンは耳語いて、今や始まらうとする控訴事件の報告に耳を引立てた。

此事件は地方裁判所の與へた決定を承認した控訴院の判決に對する上告である。ネフリユードフは謹聽して目前に進行する事件の真相を見極めやうとした。が、巡回裁判所の刑事廷に於けると同様に肝腎の要點を捨置いて枝葉ばかりの議論に花を咲かすから一向要領を得なかつた。

其事柄は或る新聞が或る有限責任會社の社長が詐欺をした顛末を剔抉いたと云ふ一件で、一番肝腎の要點は此會社の社長が果して信用を濫用したか否、若し濫用したとしたら之を防ぐ爲め剔抉いたのだらうか否、と云ふ廉であるが、此の肝腎な要點は全て度外に置いて、唯だ新聞記者たるものが怎ういふ事柄を紙上に暴露する法律上の權利が有る歟とか無い歟とか、之を掲載すれば如何なる犯罪を構成する乎とか、誹毀とか、名譽毀損とか、誹毀の中には名譽毀損を含んでゐるとか、名譽毀損の中には誹毀を含んでゐるとか、素人には皆目解らない司法會議を通過した法律條文の解釋や決定ばかりを問題としてをる。

唯ネフリユードフに解つたは、前日ウォルレに面會した時、元老院は原判決の裁判上の效力

を追究しないと力を極めて云つたに拘らず、ウォルフは執拗く原裁判の決定の效力を繰返してゐた事と、セレーニンが持前の引込勝ちに似氣なく意外にも熱心になつて反駁した事である。一體平生控目なセレーニンが怎うしてネフリユードフを驚かすほど一生懸命になつたかといふと、此會社の社長が常から金錢に汚ない到つて卑吝な慾張なのを知つてゐた處が、ツイ五六日前にウォルフが不思議にも此の吝嗇の社長から大變な御馳走になつた事を聞込んだからである。で、ウォルフが見え透いたやうな偏頗な意見を辯護的に陳べ立てると、セレーニンは忿然として這般な平凡な事件には過ぎたる侃々諤々の大議論をした。ウォルフは度肝を抜かれて聲さへ出さず、眞赤になつて椅子をガタ／＼さしてゐたが、聽て他の議官連と共にブ／＼憤つて會議室へと退席した。

其時廷吏は再び来てファナーリンに回ひ、「貴下方の御關係の事件は？」

「既う御話し仕たぢやアないか。マースロワの一件サ。」

「爾うでしたナ。成程。夫なら今日開かれる筈ですが、併し——」

「併し、何だ？」と辯護士は訊いた。

「議官方は事に由ると今日其訴訟を開く御意がないから、只今の事件の言渡しが済むとお歸りになるかも知れない。何しろ爾う申して置ませう。」

「何だと？」

「兎に角話して置ませう、と云ひつゝ廷吏は復た紙へ何だか認めた。

議官連は會議室で誹毀事件の決定を議してからマースロワの一件初め其他の要件を、茶を飲んだり紙巻を吸つたりしながら相談する意であつた。

第二十一回

議官連が會議室の卓子を圍んで着席するや否、ウォルフは非常な勢ひで此事件を再審に附すべき理由を滔々と陳べ立てた。

裁判長のニキーチンは元來が性質の善くない處へ、此日は取別けて捻くれてゐた。實はウキ

グラノフといふ同僚が先任の自分を飛越して、豫て長い間規ひを付けてゐた或る位置に昇つたのが癢に觸つて、肝癢紛れに昨日の日記に書擲つた大氣焔を夢中になつて繰返して、ウォルフの議論などは頭から耳に入らなかつた。ニキーチンは極正直な處、職務上關係ある最高二階級の上官に對する自分の批評は他日の歴史家に價値ある材料、與ふるに足ると己惚れてゐた。其了簡でニキーチン、是等の上官輩は斯くいふニキーチンが滔々たる俗吏の爲めに危ふされる現下の頽勢を救はうとするのを妨げる責任を負はなければならぬと大袈裟に日記に書立てたが、其意味は實は斯くいふニキーチンの月給を殖える邪魔をしたといふ事に過ぎないのだ。が、頗る大得意で、他日歴史家は此日記に由り歴史の上に新光明を得るだらうと考へてゐた。

「爾うとも、無論、」とニキーチンは答へたが、實はウォルフの意見を疎すつほ聞かずに唯調子を合はしたのだ。

ペイは困つた顔をしてウォルフの説を聞きながら花環の畫を紙に描いてゐた。此男は生一本の自由主義で、六十年時代に流行した自由説を尊奉してゐたから、公平を外れた時は先づ自由

主義に傾き勝ちである。殊に事件が事件だし、此の詐欺社長は全くの悪漢であるし、且又新聞發行人を誹毀罪に問ふは言論の自由を束縛する所以だから、自づと控訴を破毀する方に傾いてゐた。

で、ウォルフが辯論を終ると共にベイは花環を描く手を休めて溫和かな情なささうな聲で、全くベイは這般な解り切つた理窟を餘儀なく説明しなければならぬのを情なく思つた。極めて簡単に明白に、但し斷々乎として控訴人は何等の理由を有せずと一喝して、眞白な頭を傾けて再び花環を描き始めた。

ウォルフと對ひ合つてるスコワオロドニコフは太い指で口鬚や鬚髯を口に捻り込んで前歯で噛んでゐたが、ベイの言葉が終ると共に凜々とした高い聲で、此會社社長が如何なる悪人にして再審すべき法律上の根拠があれば再審に附するが何據がない以上はベイの説の通りに棄却に左據すると主張して、骨灰微塵に小氣味よくウォルフの説を打破した。

裁判長は此説に賛成し、控訴棄却に即決された。

ウォルフは大不服であつた。殊に不正の肩を持つたやうに取られたので頗る面白くなかつた。故と白ばくれて一向平氣に冷まし込んで、マースロワ事件の關係書類を廣げて餘念なかつた。

其時議官速中は鉦を鳴らして茶を命じ、決闘事件と共にベテルブルグの大評判となつてゐる一件を話し始めた。之は刑法第九百九十五條に規定された罪を犯したる官省の局長の一件であつた。

『實に鼻持もならぬノウ、』とベイは苦々しげに云つた。

『何故悪い？ 獨逸の學者の説を書いた露西亞人の著述を君に見せやうか。其中には這般な事は罪にならぬばかりか、男が男と婚禮するのを許しても宜いやうに書いてある。』とスコウオロドニコフは焰え盡くして指の股から掌に届きさうな葉巻をスバスバと燻かしながら哄然と笑つた。

『其様な途徹もない！』